
少年少女の戦極時代
あんだるしあ

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女の戦極時代

【作者名】

あんだるしあ

【あらすじ】

仮面ライダー鎧武の世界にちびっこを投入する試みです。オリ主ものです。 ■■少女は親友のために踊る。少女は仲間のために戦う。 ■■少女は路傍の石か？ 運命に投げられた一石か？ ■■ハイメ
ルンでも投稿しています。1/18からこちらにも上げ始めました。

第1話 室井咲

「まーっじっくたあいむ とーっりくじゃなーい♪ まほーひろー
はんぱねーぞー♪」

咲は最近のお気に入りに入り曲を口ずさみながら、ダンススクールの教室のガラス戸を開けた。

「こんにちはー」

「へい、らっしゃーい」

それは寿司屋です、とすでにツッコむ者もないコーチの出迎え口上。

咲も答えず、一面ガラス張りの教室の一角で、フローリングに固まった2人組へと向かう。

「やっほー」

「あ、咲。観て観て！ 新しいビートルライダーズホットライン」

「またバロンが一位だよ」

「へー、見して見して」

友達のナッツとトモが空けてくれたスペースに咲は座り、タブレットを覗き込んだ。タブレットから流れる、DJサガラの陽気な実

況。そして、赤と黒のゴシックコスチュームの一団が、ホログラフの怪物を操る映像。

トランプツートン

「あーあ。ここんところランキングがかわりばえしなくってツマンネ」
「咲、どこ派だっけ〜？」

「蒼天」

「シブい」

「ナッツはPOPUPよね。万年2位の」

「言うな」

「どうせふてーき配信なら、ランキングがドドン！ って変わった時にやってくれればいいのに〜」

咲たちがくだくだとしゃべっていると、教室のガラス戸が開いて男子が二人入ってきた。その男子たちにトモが声をかける。男子たちはすぐ咲たちのほうへ来た。

彼らはモン太にチューやんという。もちろんニックネームだ。モン太は球児でもないのに坊主頭に鼻バンソーコー、チューやんは本人曰く「早めの第二次成長期」のせいで小学生に見られないほど背が高いのが特徴だ。

「何観てんのー？」

「今日のビートライダーズ。またバロンだよ。ホレ」

「おー！ かけー、カイト、マジかけー！」

「これだから男子は」

「んだよお。バロンには女子のファンだっているぞ」

「……オラオラエイギョウモエなんだって」

「そいつ明日屋上呼び出し」

そこでホイッスルが鳴る音が長く教室に響き渡った。

咲たちは即座におしゃべりを止め、コーチの前に行って整列した。ホイッスルはレッスン開始の合図である。

「ワンツースリフォット、ファイシックスセブエイツ」

コーチの手拍子に合わせてステップを踏みながら、一人分足りない列を咲は見つめた。

（ヘキサ、学校には来てたのに。家の用事かな？）

ヘキサは咲のグループの4人目の女子だ。控えめで大人しい彼女はまるでお嬢様かお姫様。

そんな彼女はセレブオーラを裏切らずそれなり家の子で、家で用事がある日はダンススクールに来ないことも珍しくない。ないのだが。

（ヘキサがいないときびしーなあ）

親友を自負する咲からすれば、ヘキサがいないとダンスがキレイない。

「こらあ！ 咲、集中！」

「！ ハイ！」

さざ波のような苦笑の気配に囲まれたこともあり、咲は一度へキサのこを頭から追い出し、ステップを踏むのに集中した。

第2話 ヘキサ

「ヘキサがやめる!？」

大声を出したモン太の口を、チューやんとナッツが左右から塞いだ。モン太がもがもが言う。

教室の他の生徒がこちらを見たが、すぐ自主練や自分たちのおしやべりに戻った。

「中学に入ったらベンキョーにセンネンしなさいっておウチの人に言われたんだって」

「マジかよ」

「それでヘキサ、最近元気なかったんだね」

咲は正座の膝の上で拳を握った。咲がこの話を知ったのは、ヘキサがそれを決定事項としてコーチに伝えた後で、だ。

「あのね。その、わたし、来年ここ、辞めることになったの」

寂しそうに、それでも微笑んでいたヘキサ。もちろん咲たちに先に言ったとて、咲には何もできない。ヘキサの家の人を説得することも、ヘキサに続けてくれと訴えることも、何の力も持たない咲で

は不可能だ。

だから今から、悔しいけれど、ヘキサがいなくなることを前提に話を始めなければいけない。

「あたしたち、ヘキサが辞めるまでに、何かしてあげられること、あると思う？」

仲間もまた悩み始めた。

「できるだけいっしょにいるようにするとか？」

「それ今もしてるじゃん」

仲良しグループなのだ。ヘキサだけ学区が違うので学校の時間は一緒にいられないが、ダンススクールでは常にこの6人である。

「……みんなでコンクール以外にも出る」

「チューやん、ナイス！」

「テレビの一芸大会とかやってっかな」

「でも今は、ビートライダースホットラインがあるからダンスの番組はのびないって、なくなってきたわよ」

その時、咲の頭にひらめきが降りた。

「――ビートライダース」

一度だけヘキサが零した言葉を思い出す――わたしもやってみた

いな――

「それよ、ナッツ、それよ！」

「え？ まさかあんた……」

マジか、という目でトモもモン太もチューやんも咲をまじまじ見てくる。咲は自信を湛え、きっぱりと肯いてみせた。

ヘキサは学校を終えて、いつものようにダンススクールへ向かっていた。足取りは重い。

（こうして通えるのもあと1年とちょっと……ううん、兄さんのことだから、中学受験の時にはもう辞めろって言われるかもしれない）

まだ後1年とちょっとあるじゃないか、とオトナならば言うだろう。だが、幼いヘキサにはそう割り切れない。楽しい時間はずっと続いてくれないければイヤだと感じるのがコドモなのだ。

（何だかみんなこそこそしてるし）

咲たちはヘキサ抜きで何かをボソボソ話し合うことが増えた。ヘキサが何の話だと聞いてもごまかされるばかり。ヘキサはもっと気分が重くなった。

「こんにちは――」

俯いたままダンススクールのガラス戸を開け、いつものメンバーを探そうと顔を上げる。

すぐに咲たちは見つかったが、今日はいつもと違った。

いつもはヘキサを手招く彼らなのに、今日はヘキサを認めるなり、咲とトモが立ってこちらにやって来たのだ。

「どうしたの？ そのカッコ」

咲とトモはお揃いのトレーナーを着ていた。六角形に流れ星が入ったピンクのトレーナー。「リトルスターマイン」という刺繍は、明らかに人の手によるもの。

「えへへー。今日からみんなでお揃いにしたの」

「？ そうなの？」

見れば、ナッツとモン太とチューやんも同じトレーナーを着ていた。

「ハイこれ、ヘキサのね」

「え――え？」

咲がヘキサに差し出したのは、これまたピンクのトレーナー。

「じゃートモ、おきがえよろく」

「おけー」

トモがへキサを連れていく。へキサは何が何やら分からないまま連れられて行くしかなかった。

第3話 結成！ リトルスターマイン

トモに着替えさせられたヘキサは、教室に戻るや咲に座るよう言われた。

車座になった仲良しグループ5人の中にヘキサもとりあえず座った。

「えー、コホン。おれたち、桂ダンススクール第11期生6人は、今日からビートライダーズのチームをけっせーしたいと思います」
「……リーダーのあいさつ……です」

モン太とチューやんのパスを受けて、すっと立ち上がったのは咲。

咲はポケットから4つ折りの紙を出して、開いて読み始めた。

「ヘキサへ。あなたがダンスをやめるって聞いて、あたしもみんなもすごくショックでした。でも、一番悲しいのはきっとヘキサだよね？ だから、みんなで考えました。あたしたちがヘキサにあげられることは何だろう。どうすればヘキサが最後まで楽しくダンスをできるだろう。いっぱい考えました。それで思いついたのが、ビートライダーズをやるってことでした」

咲の声が震えた。ヘキサを見た。咲の目からぽろりと涙が落ちたのを。

「ヘキサ、前に一度だけ言ったよね？ ビートライダーズのどこかのチームが踊ってるのを見て、『やってみたい』って。いつもひかえめなあなたが、初めて何かをやりたいって言ったのが、印象的でした。これが正しいことかは分からないけど、よろこんでもらえるか分からないけど、ヘキサがよければ、あたしはみんなでビートライダーズをやりたいです。桂ダンススクール第11期生、室井咲」

咲が紙を畳んで目を袖で乱暴に拭いた。ナッツが咲にタオルを差し出すと、それでまた顔を乱暴に拭いた。

仲間の目がヘキサ一人に向けられる。

ヘキサは未発育の胸を押さえた。冬なのに熱く、ビートを刻んでいる。

（ずっとここそそしてたの、このためだったの？ わたしが、咲と、みんなと、ビートライダーズをやる？ みんながいっしょにやってくれる？）

——ずっと憧れだった。兄が仲間とおそろいの色を着て、ステージで踊っているのを観た日から。家では決して見せない笑顔で踊る兄を見てから。

「いい、の？ だって、ビートライダーズって、怪物使ってステージうばい合ったりするんだよ？」

「その辺は抜きやしよ。チューやん」

「……ん」

チューヤんが広げたのはこの土地の地図。縮尺は限界まで広げている。

「……ここが学校。ここがダンススクール。で、ここ。並木道の通学路。……ここをこうぬけると、野外劇場がある」

「スピーカーもスポットライトもないし、今の時期、イチョウでキタナイけどそこがイイ。こんなオンボロステージ、オトナのビートルライダーもほしがんねえだろ」

「ぶっちゃけ『ビートルライダーズごっこ』なんだけどね。あたしらじゃロックシードなんて買えないし。エア観客のエアステージ。だからバトルは心配しなくていいよ」

「いつのまに……」

見通しが甘い部分も目に付く。だがヘキサの心臓のビートは強くなるばかりで鳴り止まない。

「――やりたい」

ヘキサは顔を上げて、最高の友達5人を見渡して。

「どんなステージでも、どんな条件でもいい。わたし、みんなでビートルライダーズ、やりたいっ」

一拍の間。そして、咲たちはぱあっと顔を輝かせ、文字通り跳び上がって快哉を上げた。ナッツやトモなどヘキサに抱きついた。

「よかった。これでヘキサがイヤって言ったらどうしようかって」

「咲……ほんとに、わたしなんかのために……いいの？」

「ヘキサのためだから、できるんだよ。あたしも、みんなもね」

前に上の兄に言われたことがある。ダンススクールの生徒——咲たちはしよせん世界が違う人間だと。

でも、ヘキサはそうは思わない。同じ世界にいるから、こうしてヘキサのために悩んで、考えて、実行してくれたのだ。今回は特にしみじみと思った。いつか兄にもこの胸の想いを伝えたい。

思っていると、トレーナーの刺繍が目に入った。六角形の中に流ヘキサグラムれ星。「リトルスターマイン」はチーム名だと最初に言った。

「あ、それね、あたしがぬったんだよ」

リトル・スターマイン
「小さな連続火花？」

「そう。あたしたちにぴったりでしょ？」

ヘキサは咲と指を絡め手を繋ぎ合った。

「ありがとう——咲」

「あたしこそ。受け取ってくれてありがとう、ヘキサ」

第4話 vs 戒斗！ 初めてのインベスゲーム

11月も終わりにさしかかる季節。リトルスターマインの少年少女は、いつものように並木の奥の野外劇場で踊っていた。

始めたばかりの頃は、ナッツが言ったようにそれこそ「エア観客」の「ごっこ遊び」だった。

しかし噂とはどう広まるか分からないもので。並木道を通学路にする児童たちが、帰り際、あるいは塾や習い事に行く前のちょっとした時間、観客として咲たちのダンスを観に来るようになったのだ。少し前など、あのDJサガラのネットラジオで、「小さなビートライダーズ」と紹介されたくらいだ。

客がいるとなれば、小さいながらもパフォーマーである咲たちが手を抜く道理はない。

ダンススクールで習ったダンスを、もっと「楽しみながら」やるように自主練習した。

ダダン！ 最後の踏み込みから、決めのポーズ。

ちびっこしかいない、咲たちを観に来てくれたお客が、拍手をくれた。荒い息の下、達成感で咲は笑った。仲間たちと、汗だくのまま笑い合った。

「アンコール！ アンコール！」

ちびっこたちがピンクのハンカチやバンダナ、上着などを振る。

咲は一緒に踊っていたヘキサたちをふり返り、コンディションを確かめる。

(だいじょうぶそうね。時間的にもあと一曲くらいならやれるし)

咲は肯いた。端のポジションのヘキサが、舞台袖に避けておいたラジカセのリモコンを持ってくる。咲はリモコンを受け取り、客席近くに置いたラジカセを操作しようとした。

カチ。不意にラジカセが止められた。

ラジカセを切って野外劇場にズカズカと上がり込んできたのは、トランペット赤と黒のゴシックコスチュームに身を包んだ男たち。チームバロンだった。

「このチームのトップは誰だ」

仲間たちが咲の後ろに集まる。咲は、相手側のリーダー、確か駆紋戒斗とかいう男の前に出た。

「あたしがリーダーだけど。何の用ですか？」

「ーステージカードもない、ステージともいえない野外で、ダンスの腕もお粗末。まるっきりガキのお遊戯だな」

出会い頭にけなさければ、咲もむかつ腹が立つ。

「そうよ。ガキのオユウギ。悪い？ だからわきまえて、ここ以外じゃおどってないでしょ。もんく言われるすじあいないわよ」

「いいや、お前たちは弁えるべき一番のことを弁えていない」

「は？」

「弱者のくせに『ビートライダーズ』を名乗った。それは許されざるべき所業だ」

戒斗が何か小さな物を投げつけた。咲はとっさにキャッチし、見た。

ネットラジオでしか見たことがない、ロックシードという錠前だった。

「——インベスゲーム？」

怪物を操ってチームの上下を競うゲーム。液晶の向こう側の、無関係な娯楽。まさか自分がそんなモノを手にすると思わなかった咲は密かに震え始めていた。

（だって、あたしたちがビートライダーズなのは、ただのごっこ遊びで、ヘキサの思い出作りのため。だから町の隠れ家でひっそりやってたのに。どうして？ 何でこの人はそれを壊しに来たの？）

「ガキでもビートライダーズを名乗る以上、ロックシードの一つくらい持ってるだろう」

「……持ってるわけない」

「ガキのフトコロの寒さなめんな！」

チューやんとモン太の返しに戒斗は意外とでも思ったのか。はたまた呆れたのか。

しかし戒斗は容赦なく錠前を開錠する。すると、光でフィールドが形成され、宙に縦に開いたチャックから小さな怪物、インベスが召喚された。

いよいよ咲が進退窮まった、そんな時だった。

「咲、使って！」

舞台袖から出てきたヘキサが、これまた小さな物を二つ投げた。キャッチして見ると、それはたった今戒斗が投げた物と同じロックシードの錠前だった。

「これ、何で……え、これ、Aクラス!？」

「なにっ？」

何故ヘキサがこれを持っていたのか。普通の小学生の小遣いで買える品ではないのに。

疑問に思ったが、咲はすぐ意識を切り替えた。ヘキサに聞くのは後でもできる。今は咲の、ヘキサの思い出を穢そうとする戒斗と戦うのが先だ。

「チューやん！ これオネガイ」

咲はチューやんに錠前を一つ投げ渡した。チューやんは格ゲーが仲間内で一番上手いからだ。

「いいだろう。ハンデとして2対1でやってやる。来い」

咲は錠前二つ、チューやんが錠前一つ。彼女らは同時に錠を外した。咲側のフィールドに3体のインベスが召喚される。戒斗が咲を睨みつけた。咲も負けじと睨み返した。

「みんな観てて。これがあたしたちのステージよ！」

……

……

…

それはいつもと何ら変わらない日常。

『ハロー、沢芽シティ！ 今日のトップニュースは先日紹介した小さなビートライダーズ、チーム「リトルスターマイン」だ！』

それは投げられたことに誰も気づかない小さな一石。

『バロンにゲームを挑まれたリトルスターマイン。子供ばかりのチームに大人げないぜバロン！ とは言わないのがお約束だ。何たってスゴイのはこのチームのリーダー。何と弱冠11歳の小学生女子！』

インベスを巧みに操り、あのバロンを退けたSuper Gir
1だけ!』

それは「いつもの日常」に音もなく波紋を広げた、微かな変化。

第5話 咲、憂う

タブレットで保存した「ビートライダーズホットライン」を観直して、咲はフローリングの床に倒れた。全面鏡張りの教室のあちこちに、咲の寝姿が映る。

（ほんとにビートライダーズになっちゃったよ）

元はヘキサの思い出作りにと始めたものが、どこで踏み外してしまったのか。ごっこ遊びでよかったのに。戒斗の言ったようにガキのお遊戯でよかったのに。

（じゃあバロンに勝たなきゃよかった？ わざと負ければよかった？）

そんなわけがない。あそこで負けていたら、ごっこ遊びさえ続けられなくなっていた。悲しく閉じてしまうヘキサの思い出をもっと悲しいものにしていく。

それだけは、室井咲は断じて許せない。

（ホンモノのビートライダーズになった今、この先続けていくには何がひとつ？）

咲はタブレットの映像を変えて再生した。インベスと戦う新しい方法、アーマードライダーが映し出された。

現在、アーマードライダーを擁しているのは、咲たちが先日戦ったチームバロン、そして落ち目かと思わせて復活したチーム鎧武。

チーム鎧武はともかく、チームバロンとは少なからず因縁ができてしまった。

戒斗はまた挑んでくるかもしれない。前はインベスの数に物を言わせて勝ったが、戒斗がアーマードライダーになったら確実に負けて、今度こそ咲たちの「ビートライダーズごっこ」は終わる。

（もっかい勝とうと思ったら、あたしたちにも……アーマードライダーが、いなくちゃ、いけない。その時、このベルトを着けることになるのは……）

体を起こす。寝転んだせいで髪型が崩れた。咲は髪ゴムを結び直しながら、アーマードライダーの映像をリピートしてもう一度観る。

「髪、はねてるよ」

「――ヘキサ」

「貸して。やってあげる」

いつのまにか横に来ていたヘキサが、優しく笑んで手を差し出す。咲は髪ゴムをヘキサに渡した。

ヘキサの手榴が頭を何度も掠める。髪はヘキサに任せて、咲はタブレットの画面に目を戻した。

「――ごめんね」

「何が？」

「わたしがビートライダーズやりたいて言っちゃったから……こんなことになるって分かってたら、わたし、」

「ストップ」

咲はへキサの手を掴んだ。へキサの手から零れた髪がうなじを掠めた。

「それ」をへキサに言わせたくなくて、咲は悩んでいるのだ。へキサが先に諦めてしまったのは、咲たちががんばる意味がなくなってしまう。

「咲……でも」

「せっかくホンモノにしょーかくできたのに、もったいないじゃん。ここでやめちゃうの。悪いのはあたしたちのセイイキにズカズカふみこんできたバロンのヤツらよ」

へキサはさらに悲しげな顔をした。咲も困った。どうすればへキサが気にしないようにできるだろう。

「そーそー。へキサ、あんま気にしないでいいんじゃないの？」

によき、と。いつからいたのか、モン太が生え……もとい現れた。

「うわ！？」

「きゃっ」

「咲もおれたちも自分がタノシイからビートライダーズやってきた

んだし。ヘキサのためだけだったら咲だってキレイにカイサンしてしゅーりょーしてたって。な、咲？」

「え、あ、うんっ、そうね」

本心はむしろ逆のことで悩んでいたのだが、モン太が説得してくれそうな雰囲気だったので咲は肯いておいた。

「あ。おーい、お前らー」

モン太が、ちょうど更衣室から出てきたチューやん、トモとナツツを呼ぶ。

「咲がチームやめたいって言ってんだけどお前らどーするー？」

「ちょ、モン太!？」

「え、ヤだし!」

「……じょーだんじゃない」

咲は面食らった。軒並みやめたい派がいない。

「ちょっとお、リーダー？ ナカマの意見ムシってジューダイケツギするってどーゆーことお？」

真っ先にトモが咲の眉間をぐりぐりしに来た。地味に痛い。

「……じょーだんじゃない」

「チューやん、セリフが使い回しだぜ」

「……それ以外思いつかない」

——思い出作りのためのはずだった。ヘキサ一人のためのはずだった。

それがいつのまにか彼らの中でこんな危機にあっても誰もやめようと言い出さないくらい、大切なものとなっていた。

「——みんな、いいの？　ほんとに」

「あんたと同じグループになってから、こっちはイチレンタクシヨ一のつもりだったの」

「あで」

ナッツに鼻をデコピンされて、咲は鼻を押さえた。横でヘキサが驚いている。

「……うん。そうだったね」

咲は立ち上がった。胸にはすでに闘志が戻っていた。

「ガキの本気はオトナにも負けないって、世の中に思い知らせてやろう！」

『おー！！』

第6話 ガキの本気

バン！ 店のドアが勢いよく開いた。しかし店長の板東は珍しいことでもないのです、

「いらっしやー…」

い、と続けるはずだったが、口を噤んだ。

入ってきたのは小学生ほどの男女が6人。一直線に、錠前ディラーの指定席に向かった。

「……ごゆっくりー」

今はあの程度の歳の子供でさえインベスゲームをやるのかと思うと、やるせない板東だった。

シドはティーカップをソーサーに置いて手を組んだ。

「おやおや。噂のリトルチームがお揃いで。ロックシードでもご所望かい？」

正面の席にチームのリーダー——室井咲が座った。

「鎧武とバロンが持ってるのと同じベルトを下さい」

言うと思った。シドは小さく笑った。

「お代は？」

咲は空の2Lペットボトルを音を立ててテーブルに置いた。ラベルが剥がされたペットボトルの中身は1円玉から1万円札まで全種類の日本銀行券でぎっしり詰まっている。

「みんなでお年玉ちょきん全部くずして持ってきた」

シドは危うく盛大に嘔き出しかけた。お年玉と来たか。さすがは小学生。発想が幼い。幼いが。

ざっと見た限りではそこその金額がありそうだ。最近の子供の小遣いは景気と反比例するように高いという噂は真実だったらしい。

後はシドがこの少年少女、特にドライバー装着者になる気らしい室井咲を気に入るか次第だ。

「君らは確か元は非公式のチームだったんじゃないかかったかい」

「そうですね、それが？」

「手に入れたビートライダーズのイスをそこまでして守るのはどう

してだろうと思ったただけだよ。何か重大な理由でもあるのかな」

咲が後ろをふり返る。目線の先には、ストリートダンスをするとは思えない大人しげな少女——彼女の名が「ヘキサ」だとシドは知っていた。

「——ちょっと前。あたしたち、チームバロンにステージをとられそうになりました」

「デビュー戦だね。評判の」

「あたしたちは、ホンモノのビートライダーズみたいにくつもステージを持ってない。別に持ちたいとも思わない。あたしたちが『ビートライダーズ』でいられるのは、あのステージだけでいいって思ってたから。でも、バロンに勝負をいどまれて。そんなささやかなことも、ゆるさないってヤツらがいるって分かった」

咲は胸元で強く拳を握った。

「ゆるさないっていうなら、あたしも、ゆるしてあげない。バロンでも他のチームでも。ガキが本気になったらこわいんだって、思い知らせてやる」

——気に入った。

シドはキャリーケースの抽斗を開けて、戦極ドライバーを出してテーブルに置いた。

「小さなリーダーの覚悟に免じて、足りない代金はまけておこう。

ロックシードは——もう持ってるな。それを使ってくれ」

後ろに立つ咲の仲間が顔を輝かせ、すでに細かい動作で喜んでい
る。

咲はというと、じっと黒いドライバーを見つめてから、ドライバ
ーを両手で掬うように持ち上げた。

男の手にも余る大きさのドライバーは、少女の両手からもはみ出
していた。

咲が立ち上がる。一本筋の通った立ち姿は、そこらの大人よりず
っと凛としていた。

第7話 どの錠前にする？

「こいつにどのジョーマエをはめるか、それがモンダイだ」

野外劇場の舞台の中心で、咲たちは円になって座っている。今日はダンススクールがない日なので、リトルスターマインのステージ後の時間を作戦会議に当てたのだ。

輪の中心には黒光りする戦極ドライバー。インジケータはまだブランク。

「……おれたちの手持ちは、ヒマワリと、パイント、ドラゴンフル
ーツ」

チューやんが言いながら一つずつ錠前を置いていった。

白黒、黄色、紅色。鮮やかなフルーツのデザインが一行に並べられる。

「Dが1コにAが2コね。これはマジ、ヘキサさまさまよね」

「なく。よくAクラス2コも買えたよな」

「あ……その、へそくりがあつて」

『おー』

へそくり。何となく大金がありそうなイメージの言葉である。具

体的にいくらからがへそくりかは、コドモの咲には想像もつかないが。

「とりあえずパインはなしね。鎧武とネタがカブっちゃう」

咲がぼいと投げたパインロックシードをモン太が空かさずキャッチした。さながらfrisbeeを投げられた犬である。

「ヒマワリはDだからショーキョホーでドラゴンフルーツ決定じゃない？」

鎧武もバロンも使用していたのはAクラスの錠前だった。咲もAクラスのドラゴンフルーツで変身するのが妥当だとは思う。

だが、妥当すぎて、つまらない。

ヒマワリロックシードは最下位クラスだが、実は——的なびっくりどっきりギミックがあったりしないだろうか。なくとも、あえて弱いロックシードで勝つと、カッコよくないだろうか。

空想してみる。鎧武とバロン、特にバロンが「馬鹿な！？ Dクラスのロックシードなのに！」と叫ぶのを、ヒマワリロックシードで変身した咲（ビジュアルは適当）がズババツとやっつける。

倒れたバロンたちをしり目に、カンカンカン！ と鳴るゴング、拳を挙げる自分……

「うんイケる」

「どこへだ」

まるで思考を読んだかのように、左隣のナッツから裏拳が入った。

「あんた今またロクでもないこと考えたでしょ」

「ろくでもなくないよお」

咲はヒマワリの錠前を手にとった。オイまさかそれで変身するんじゃないだろうな、というチームメイトのまなざしは措いて。そもそも――

「――なあってヒマワリなんだろ」

チームメイトが全員、今度は疑問を呈して咲を見つめてきた。思っただけのつもりが口に出してしまったらしい。

「いや、その、ね。ロックシードってくだものっていうか、なんかの木の実がフツーじゃん。なのにヒマワリだけ花だし種だしで、なんかトクベツな意味でもあるのかなーって………ごめん」

居心地が一気に悪くなってしまい、先に謝ってしまう咲だった。

「と、とにかくっ。咲、使うのはドラゴンフルーツでいいの？」

ヘキサが早口でフォローしてくれた。やはり親友はイイ。ここは

素直に肯くだけの咲だった。

第8話 ××碧沙の二重生活

リトルスターマインのステージ、そしてダンススクールのレッスンを終えたヘキサは、自宅に一人帰り着いた。

「ただいま」

がらんとしたエントランス。豪華なだけで応える人がいない。ヘキサにとってはこれこそ無駄でしかない装飾。

ヘキサは鞆をぎゅっと握り、部屋に向かうため階段に足をかけた。

「へキサ碧沙」

上から声がかして、ヘキサ——呉島碧沙は顔を上げた。2階から長兄が階段を降りて来ていた。

「貴虎兄さん」

「今日も遅かったな。またダンススクールで無駄な時間を使ったのか」

前に「スクールの同期生とおしゃべりが長引いた」という言い訳を使って以来、貴虎は決まってこの文句をつけるようになった。

「ごめんなさい、貴兄さん」

貴虎はとくとくと語りながら階段を降りてくる。

「所詮は住む世界が違う連中だ。必要以上に馴れ合うな。お前に悪影響しか与えない。光実のように右腕とはいわないが、碧沙、お前もいずれはユグドラシルの要職に就く身だ」

呉島碧沙の生まれに課せられた義務と、そのための教育。正直、重苦しかった。

「はい。気をつけます」

「分かっているならいい」

下りてきた貴虎は、碧沙の頭を骨張った掌で撫でた。

こうして不意に親愛を示すから、碧沙は貴虎を恨みきれない。

次兄のように騙しきれない。

兄の掌に甘んじていた碧沙は、ふと貴虎が発するものに気づいて顔を上げた。

「どこか、けがしたの？」

「してないが、何故だ？」

「血のおいがするわ」

——去年かもっと前かは忘れた。貴虎はたまにこんなふう「血のおい」を付けて帰ることがあった。

ケガをしたのかと尋ねてもはぐらかされるばかり。それでも碧沙は問うことをやめられない。ひょっとしたら今度こそ答えてもらえるかもしれないという期待を捨てきれない。

「何もない。お前の気のせいだろう」

「……そう」

また今日も答えてくれなかった。

「じゃあ、食事にします。貴兄さんは夕飯は」

「もう食べた」

「そう。じゃあわたしだけ食べるわ。着替えてくる」

傷ついていないフリばかり上手くなる。そう思いながら、碧沙は階段を登って行った。

一人きりの夕食を終え、部屋に戻った碧沙は、今日のダンスを踊って一人反省会をしていた。

すると、ドアがノックされた。碧沙は急いでプレイヤーを切り、タブレットを勉強机の抽斗に隠してから、応対に出た。

「光兄さんっ」

「ただいま、碧沙」

来客は次兄の光実だった。

碧沙は笑って光実を部屋に招き入れた。光実も勝手知ったる妹の部屋、入るやベッドに腰を下ろして荷物を床に置いた。

「今日も上手くやれた？」

碧沙は笑顔でOKサインを作った。光実が微笑む。それが碧沙には嬉しい。

「光兄さんもだいじょうぶだった？」

光実も同じくOKサインを出して笑った。兄妹はふふふ、と笑い合った。

碧沙は光実が、光実は碧沙が、それぞれビートライダーズ活動をしているのを知っている。自分と光実を結ぶ、とても大きな秘密を共有するこの時間が、碧沙は好きだった。

碧沙は語る。光実も語る。その日のステージの楽しさ、明るさ。仲間の愉快さ、大切さ。

けれども互いに自分の所属するチームの名だけは隠して。まるで虚構遊びのように。

「あのさ、ちょっと聞いてもいい？」

「なあに？」

「最近でいいんだ。アーマードライダー鎧武かバロンを見かけたりしなかった？ 碧沙じゃなくても、チームの子たちとか」

「いいえ、見てないわ。わたしたちがアーマードライダーを見る機会なんて、ネットラジオを観てる時くらい」

「そうか……うん。ないならいいんだ」

碧沙は光実の手の上に小さなてのひらを重ねた。

「何かこまってる？」

「ちょっとね。でも大丈夫。僕たちのチームのことだから」

「兄さんがそう言うなら……でも、ほんとに困ったら言ってね。わたし、がんばるから」

「ありがとう」

光実は碧沙の頭を撫でてくれた。掌の感覚が貴虎と似ているのは、やはり兄弟だ、と思った。

第9話 みんなは一人のために

ダダン！ 最後の踏み込みから、決めのポーズ。

同じ年頃の観客の拍手喝采を浴びて、ヘキサは汗だくのまま笑っていた。

「ありがとうございましたー！ これからもリトルスターマインをヨロシクねー！」

センターの咲が笑って手を振る。

いつのまにか、このチームはヘキサだけでなく、咲たちにも大切なものになっていた。

自分が望んだものを好きな人たちも望んでくれる。共感できる時間。これほど嬉しいものが人生であるだろうか。

ステージを終えてぞろぞろとちびっこ観客が帰っていく中、ヘキサたちは片付けに勤しむ。

手作りの「Now Dancing♪」の看板を片付け、ちょっぴりマナーがなくなっていない客が置いていったジュースの空き缶や菓

子袋を集めてまとめる。ラジカセを回収し、舞台の上をホウキで掃いておしまいだ。

ヘキサが学生鞆を持ったところで、先にカラフルなランドセルをしょってタブレットをいじっていたトモが声を上げた。

「どうしたの？」

すでに咲とナッツが来ていた女子の輪にヘキサも声をかける。

「あ、ヘキサ！　ねえこれ観て」

トモがタブレットを見やすい位置にどいてくれたので、その隙間に入る。ランドセルと学生鞆がぶつかり合いながらも、ヘキサは映像を覗き込んだ。

——チーム鎧武から新しいアーマードライダーがデビューした時の映像だった。緑のライドウェアの上にブドウ色の中華鎧を重ねたアーマードライダー。

彼はチームインヴィットとの一戦を終えて変身を解除した。

ヘキサの手から鞆が床に落ち、砂利を鳴らした。

変身を解除したアーマードライダーは、ヘキサの次兄、呉島光実

だった。

《新たな戦士は、チャイニーズテイストのGun Stringer！ 決め技が火を噴く様はまさにドラゴンの息吹。名付けて、アーマードライダー——龍玄と行こうじゃないか！》

そこでネットラジオの配信は終わった。

咲はひそかにほぞを噛んだ。元々の想定敵はチームバロンだけだったのに、二人もアーマードライダーを擁したチーム鎧武。彼らもチームバロンのように咲たちの舞台を奪いに来るかもしれない。大のオトナが二人もいては、咲にはほぼ勝機がない——考えていた時だった。

「ヘキサ、だいじょうぶ？」

トモがおそろおそろヘキサの顔を覗き込んでいる。蒼白だった。

「…なの」

「え？」

「わたしの…兄さんの…！」

咲は他の仲間たちと顔を見合わせた。

「兄さんって…この龍玄が？」

ヘキサがスマートホンを取り出し、猛然と液晶にタッチして耳に当てた。このタイミングで電話する相手となれば、彼女の兄であるアーマードライダー龍玄に他ならない。

「――出ない」

「お兄さん？」

ヘキサは沈痛に肯いた。

「兄さんに何かあったらどうしよう……」

咲はすっと立ち上がった。

「行こう」

「え。咲、行くってまさか」

「お兄さん。今のラジオでチーム鎧武の人だってわかったから。ナツツ、鎧武のキョテンって、西のステージの近くだったわよね」
「ん。ウラとってないけど」

ナツツはトモのタブレットを借りて、画面を近辺の地図に切り替え、指である一帯を丸く囲った。

「ねらージョーホーによるとこの辺の空きガレージ」

「よし。みんな、いい？」

チームメイトの誰も、チーム鎧武を尋ねることに反対意見を言わなかった。

「じゃ、このキカイに、あたしたちもチーム鎧武とナカヨシになりに行きましょう」

皆がどやどやとランドセルを持ち準備する中、ヘキサが咲のトレナーの裾を指先で摘まんだ。

「――ごめんなさい。またメーカー、かけて」

咲は苦笑してヘキサの手を取った。

「いいよ。トモダチのことだもん。チームワークは助け合い。だからヘキサも、あたしたちのだけれかが大変だったら助けてね」

「うん！ ぜったいぜったい助けるからっ」

第10話 変身！ 其は月に開く花

咲たちリトルスターマインは、走りに走ってついにチーム鎧武の拠点があるガレージ通りに辿り着いた。

「なあ、あれってバロンの駆紋戒斗じゃね!？」

「うっそ、バトル中!？」

しかもタイミングの悪いことに、チーム鎧武の龍玄はチームバロンのバロンとバトルの真っ最中だった。

すでにバトルフィールドは形成されている。中にいるのはバロンと龍玄。それにバロン側にインベスが2体。しかもインベスは完全実体化していた。

3対1という圧倒的不利な状況で、チーム鎧武のアーマードライダー龍玄は戦わされている。

(インベスゲーム、じゃない。こんなただのフリョーのけんかじゃない)

「にいさん…っ」

『碧沙…!？ 何でここに』

龍玄と、加えてバロンも咲たちに気づいた。

空に開いたチャックから落ちる、炎の形をした紅い果実。

咲の頭部に果実が落ちて嵌るや、咲は大ジャンプして不可視のフィールドに跳び蹴りを入れた。

《ドラゴンフルーツアームズ！ Bomb Voyage！！》

信じられないものを、龍玄は見ている。

戦極ドライバーを起動した少女は、フィールドに蹴り入れた足から上半身へと向けて変貌していく。ライドウェアの黄色を、ドラゴンフルーツの紅が鎧っていく。

『だああああああっ！！』

少女ライダーのキックでフィールドが割れた。

キックの推力はそれでも落ちない。少女ライダーはパレオを翻しながら、まるで流星のようにバロンへ向かう。

少女ライダーのキックがバロンの胸に命中した。

少女ライダーは蹴りの反動を利用して、倒れた龍玄の前に着地した。

『だいじょうぶ？　ヘキサのお兄さん』

少女ライダーが龍玄に手を差し出した。龍玄が恐る恐る握り返すと、思いの外、しっかりした力で引き起こされた。

起き上がってみると、少女ライダーの背丈は龍玄の肩くらいだ。思ったより大きい。

『君、碧沙を知ってるの？』

『あたし、ヘキサと同じダンススクールなの。室井咲っていいます。はじめまして、お兄さん』

『は、はじめまして。えーっと、妹がお世話になってます』

『いえ、こちらこそっ。ヘキサにはいつもオセワになってます』

『……おい』

和やかな挨拶モードをぶち壊す、バロンの険しい声。龍玄は少女ライダーを背にして構え直した。

『ここはガキのお遊戯場じゃない。さっさといつもの田舎小道へ帰れ』

『やなことだ。だれがあんたなんかの言うこと聞くもんか。べーだ』
『貴様——』

せっかく庇ったのに、こうも可愛げがなくては庇い様がなくなる。龍玄はちよっぴり泣きたくなった。

第11話 爆誕！ アーマードライダー月花

バロン側にいた子供たちが一齐にフィールドを回り込んで龍玄側に走って来た。絃汰たちがいる側に。

「あなたたち、そのマーク……リトルスターメイン？」

「舞、知ってるのか？」

「絃汰、知らないの！？ ビートライダーズ中、最年少のチームで、初めてのインベスゲームで戒斗に勝ったっていう、話題のチームだよ！？」

チームのブレインを自負する光実は、リトルスターメインの存在も知っていた。

駆紋戒斗と同じくインベスを複数同時制御できる小学生の女子。その子をリーダーとした、小学生だけで構成されるビートライダーズの異色チーム。

『その節はガキのオユーギにつきあってくださった上に負けてくださってアリガトウゴザイマシタ』
『フン』

そんなチームが自分に助太刀した。特に交流もなければ敵対もしていないのに。理由があるとすれば、それは妹・碧沙の存在に他ならない。

薄々察してはいた。小学生の碧沙がビートライダーズをやるチ

ームは一つしかない、と。

自分が碧沙の兄だから、この少女ライダーは助けに入ってくれたのだ。

『今日はハンデも手加減もなしだ』

『いいわよ。あたしだって、あんたに勝たせてあげるつもりなんかない』

咲は両手に、新体操のバトンに似た武器を出して構えた。バトンの両端にはドラゴンフルーツの意匠が刺さっていて、まるで和太鼓の撥だ。

『あんたはあたしのトモダチを泣かせた。あたしたちだけじゃあき足らず、トモダチのお兄さんをキズつけた』

『だからどうした。強い者が勝って奪い、弱い者が負けて失くす。それが俺たちのゲームだ。ガキの出る幕じゃないんだよ』

すると、外野にいた咲のチームメイトが叫んだ。

「さっきからガキガキうっさいわよ！ 他の呼び方思いつけないの！？ のーたりん！」

「そもそも3対1なんてヒキョーだ！」

「……オトナげない」

「KYヤロー！」

いかにもコドモらしいシュプレヒコール。龍玄は危うく脱力しか

けた。

逆にバロンは琴線に触れたらしく、リトルスターマインに対して殺気を放っている。……あの子たちの言う通り、大人げない。

「咲は『ガキ』じゃねえぞ！ そいつはなア、おれたちのアーマー
ドライダー……」

「『月花だ！』」

「げ、げっかあ？」

月花と名付けられた少女ライダーは、胸を張るようにしてバロンと向き合った。――月の花はドラゴンフルーツの異称だ。

『インベスはあたしが引き受ける。お兄さんはあいつと戦って』
『う、うん、ありがとう！』

月花はインベス2体に向かっていった。状況の整理は一時棚上げにし、龍玄はバロンへ向かった。

『はああっっ！！』

月花はDFバトンを両手に、フィギュアスケーターのように回転
をかけてインベス2体を叩き抉った。

インベスからの攻撃は受けるのではなく避けるほうに専念する。
変身して等身が伸びたといっても、軽さだけはどうにもならないと、
試運転で知ってたからだ。

（お兄さんのところには行かせない）

足を前後180度にかけてしゃがみ、その態勢のまま、ブレイク
ダンスの要領でインベスの足を蹴って転ばせる。即座にバク転で離
脱し、月花は両手に紅い実の形をした、手に握り込める小ささの手
榴弾を持った。

ドラゴルーツ
DFボム。DFバトンと同じで、ドラゴンフルーツアームズのも
う一つの基本装備だ。

そのプチ手榴弾を月花はインベス2体に投げつけた。
着弾、そして、二つの小爆発。

「やったあ！」

後ろのチームメイトが快哉を上げた。だがまだ月花は油断しない。
二回目のDFボムを出す。

案の定インベスは健在だったので、敵影がちらっと見えるや、月
花は再びDFボムを投げつけ、爆破した。

（あたしのほうは、初戦にしてはイイかんじ。ヘキサのお兄さんは？）

2体の挟み撃ちを上手く捌きながら、月花は、バロンと戦う龍玄に目をやった。

第12話 強さの定義

龍玄は隙を見てはバロンにブドウ龍砲を撃っているが、それより速くバロンのほうが懐に入ってバナスピアで龍玄に斬りつける。

遠近の差が如実に表れている。圧倒的というほどではないにせよ、不利なのは龍玄だ。

また一撃。バナスピアの刺突が龍玄の胸に入る。龍玄は両膝と手を地面に突いた。

『負けられない……！ 紘汰さんが……舞さんが……見てる……！
うあああああ……！』

それでも龍玄はしゃにむに起き上がり、バロンに向かっていく。だがダメージを受けてふらつく龍玄を、バロンは無慈悲にバナスピアで突き、斬りつける。

月花はとっさに駆けつけようとしたが、目の前にインベスが立ちはだかった。

自分がインベスを放置すれば、その分だけ負けに近づく。月花はDFバトンでインベスを殴った。

DFボムをバロンに投げて龍玄を援護するにも、ああも彼らが動き回っては狙いが定まらない。

つまり月花のポジションからはどうやっても龍玄のフォローに行

けない。

（だれか。ねえだれか。たすけてあげてよ。あたしのトモダチの兄さんをたすけてあげて！）

——まるで咲の心の悲鳴に応えるかのように。

『おおおおおおっ！！！！！！』

オレンジの鎧武者が月花の前を走り、バロンに殴りかかった。

『ここからは俺のステージだ——！！』

アーマードライダー鎧武に変身した、後に知る彼の名は、葛葉紘汰。

鎧武はインベスを大橙丸で一度退け、龍玄の腕を取って立たせた。

『やはりな。弱さの枠には収まらない奴——！！』

バロンがインベス2体をこちらに向かわせる。だがインベスの侵

攻は横から投げられた小さな紅い果実の小爆発で遮られた。

『あたしがいるの忘れんなあ！』

「行けー！ 行っただれ咲く！」

鎧武の中で闘志がより固まった気がした。

あの白いアーマードライダーに殺されかけた時は独りだった。だが今は違う。光実がいる。咲がいる。そして、相手は同じビートルライダーズ。

自分は決して、巨大すぎる敵に独りで挑んでいるわけではない。

鎧武はインベスを抜けてバロンに大橙丸で斬りつけた。

『貴様らはこのベルトの力を持って余している。弱者を支配し、強さを求める意思がない！』

『違う！ 強さは力の証明なんかじゃない！』

鎧武がバロンと切り結ぶ間にも、龍玄と月花がインベスと戦い、鎧武を助けるように動いてくれている。

バロンが言う「強さ」を鎧武が振りかざしたとして、彼らは助けてくれたか？ ——NOだ。

『強い奴の背中を見つめていれば、心碎けた奴だって立ち上がることもができる！！』

数で劣る相手にも決して屈しなかった光実を見つめて。
助けたいというだけで大人のリングに飛び込んだ咲を見つめて。

葛葉紘汰は再び戦場に帰って来られた。

『誰かを励まし！ 勇気を与える力！ それが本当の強さだ！！』
『……ほざくなっ！』

Baronがバナスピアを突き出すより速く、鎧武はBaronの胸板を殴った。再びBaronが向かってくれば、また殴った。今なら武器なくしてもBaronに負けないと思えた。

第13話 黒影&グリドン登場！

『紘汰さん、これ使ってください！』

龍玄が投げた錠前を鎧武はキャッチし、すぐにバックルにセットした。鎧武の頭上に巨大なイチゴ型のアームズが現れる。

《イチゴアームズ！ シュシュッとスパーク！》

鎧武の鎧がオレンジから赤に換装される。武装を確認する。イチゴを模したクナイだ。

『投げる武器かっ。サンキュー、ミッチ』

イチゴクナイを2本連続してバロンへ向けて投げた。

バロンは容易くバナスピアで防御したが、効果はそれだけに留まらなかった。バナスピアにぶつかったイチゴクナイは小爆発を起こし、バロンにたたらを踏ませた。

どうやらこのクナイには、月花の果实型爆弾と同じ規模の爆発を起こす効果があるようだった。

『シュシュッとお！』

鎧武は次々にイチゴクナイをバロンに投げる。バロンはバナスピアでクナイ自体はガードするが、着弾時の爆発の衝撃は殺せない。

バロンはじわじわ後ろに下がっていき、ついには吹き飛ばされた。

『よっしゃ！ 決めるぜミッチ！』

『はいッ！』

『咲ちゃんも！』

『うんっ』

バロン、そしてインベス2体がちょうどよくバロンの前に来る。

鎧武はそうなるのが自然のように、龍玄、それに月花とも並んで、無双セイバーにイチゴロックシードをセットした。

『行くぜ！』

『はい！！』

龍玄はブドウ龍砲にエネルギーをチャージし、月花は十指の間で持てるだけのプチ爆弾果実を構えて腰を落とした。

3人の決め技がバロン、そしてインベスを襲う。

バロンは上手く防いだが、インベス2体は爆散して跡形もなく散った。

『やはり楽しませてくれるなー鎧武！』

ダメージは蓄積しているはずなのに、バロンは悠然とバナスピアを掲げてやって来る。月花は唇の奥を噛んだ。

と、その時だった。バロンと月花たちの間に、二人の男——イン
ヴェットの城之内と、レイドワイルドの初瀬が飛び込んできたのは。

「さすがに3対1はマズイっしょ、リーダー」

『貴様ら——』

「見損なってもらっちゃ困るなあ。俺たちもそうそう捨てたもんじ
ゃないんだよ」

城之内と初瀬が懐から出したのは、——戦極ドライバーだった。

「男子三日会わざれば括目せよってな!!!」

「変身!!!」

空にチャックが開く。城之内の上にはドングリ、初瀬の上にはマ
ツボックリ。

鳴り響くは法螺貝の鬨の音、そしてファンファーレ。

《ドングリアームズ！ ネバー・ギブアップ！》

《マツボックリアームズ！ 一撃・イン・ザ・シャドウ！》

彼らの変身が完了した。

城之内はドングリをモチーフにした西洋鎧。初瀬は忍者のような
黒地に蜂の巣型の和鎧。

5人目、6人目の、新しいアーマードライダーの誕生であった。

『俺は、アーマードライダー黒影』

『あっ、自分で名乗るんだ。えっと、じゃあ俺は…』

『そしてこいつは、グリドン』

『え。えー…ええええええ！？』

不本意だといわんばかりにグリドンと命名された茶色のライダーが後ずさる。

これには咲も仲間ともども乾いた笑いをもらすしかなかった。案の定、チーム鎧武もブークスクス状態だ。

グリドンが黒影に迫って名前についてあーだこーだと応酬していると、その両名の間を割って入ってバロンが前に出た。

『さあ。仕切り直しだ』

鎧武と龍玄が構える。月花もDFバトンを持ち直し、腰を落とし、腰を落とす。

（数の上じゃこれでゴカク。あとは後ろのふたりがどれだけ強いかわけどー）

グリドンと黒影もバロンの後ろから出てきてバロンに並べばなかつた。

黒影がバロンを背後から槍で勢いよく斬りつけたからだ。

第14話 仕切り直し？

月花たちの困惑に構いもせず、バロンはふり返って黒影にバナスピアを突き出した。

『貴様……何をする！』

黒影は槍身で逸らし、押さえつけて上手く避けた。

『てめえの言う通り、こっから先は仕切り直しだ！』

『そういうこと！』

グリドンもドンカチでバロンに殴りかかった。バロンは何とか避けるが、黒影とグリドンの猛攻は止まらない。

2対1になってさすがの彼も捌きかねているのが伝わってくる。

『お、おい！ お前ら仲間同士じゃなかったのかよ！？』

『後々のこと考えると、さ！ ここで一番強くてイヤな奴にご退場願うのが、ベストだよねっ。――3対3で手堅く勝つのもいいけどさ、5対1で反則的に勝つのが、もっと賢いわけよ。だろ？ 鎧武のお二方に、リトルスターマインのおチビさん？』

言うだけ言ってグリドンも攻勢に戻って行った。

月花は鎧武や龍玄と顔を見合わせるしかなかった。

やがて、黒影とグリドンが同時に各々のカッティングブレードを倒して必殺技の態勢に入る。

バロンなら、個々に来れば防御できたであろう。だが、黒影とグリドンが同時に来たことでどちらも防げなかったバロンは、もろに必殺技を解けて転がり、変身が解けた。

戒斗がフェンスに背をぶつけて倒れ伏す。

『そのベルトぶち砕いて、二度と変身できないようにしてやるぜ』

つい経過を見るだけだったが、ここに来て月花は動いた。

『ちえやああっ!』

黒影の後ろ脛、俗に言う弁慶の泣き所を横からスライディングで蹴ったのだ。当然、黒影は派手に転倒した。

『あい、っでえ!?! 何すんだこのクソチビ!』

『チビじゃない、月花よ!』

DFバトンで叩こうとしたが、そこはやはり体格差、バトンの片方が黒影の影松で手から弾き飛ばされた。

『お返し、だっ!』

月花はとっさに顔の上で両手を交差させて身を竦めた。

だが、ガキン！ と鋼同士がぶつかる音がただけで、月花には痛みがなかった。

顔を上げる。――鎧武が無双セイバーで影松を防いでいた。

『おい！ 一緒にバロンを潰すチャンスなんだぞ。何しやがるっ』
『お前らの事情は知らねえが、コドモに暴力揮うような連中の片棒を担ぐのは御免だね！』

鎧武は鏢競りから黒影を突き飛ばし、グリドンにぶつめた。

両者がぶつかってもつれる隙に、彼は月花を抱き上げて起こしてくれた。そして改めて黒影とグリドンへと、雄叫びながら向かっていった。

『戦略としては間違っていないんだけどなあ』

と言いつつも、龍玄はブドウ龍砲の散弾を撃ち、黒影とグリドンを引き離している。

『大丈夫？ 咲ちゃん』

『うん。なんとかヘイキミたい。まだがんばれる！』

考えなしに突っ込んだ自分を助けてくれたのだ。月花は鎧武と龍玄にそのお返しをしたかった。

『じゃあね、――、――』
『！ わかった！』

龍玄に耳打ちされた通り、月花はグリドンへ向かって駆け出した。

第15話 初陣の戦果

月花はグリドンに向かって駆け出した。

ブドウ龍砲の射線上をまっすぐ行っても、月花は体格が小さいので、頭上を弾が行くだけで当たることはない。

月花はグリドンの両足にタックルして、グリドンを後ろに押し倒した。そして、ぐわしと、グリドンの両足を抱え持ち、大車輪の姿勢に入る。変身したおかげで腕力はパワーアップしている。

5対1で勝つ？ 一番イヤな奴に退場願う？ そもそもこのグリドンは前提から間違えている。

『あたしは元々、龍玄の助っ人に来たのよ！！ えい、やああああああああ！！』

『え、ちょ、それありいいいいああああ！！??』

月花はグリドンをぶん回した。ぶん回した。ぶん回した。

『飛んでっ……けえー！』

月花が手を離す。グリドンが飛ばされた先には――階段の上でブドウ龍砲をチャージした龍玄。

顔が露出していたなら、おそらくにやっと笑う光実が見られただろう。

龍玄がトリガーを引いた。龍の息吹のようなエネルギー砲がグリドンに命中した。

グリドンは階段に落ちて、転がって、止まる頃には変身が解けていた。

「き、今日はたまたまっ、調子悪かったただけだからな！」

城之内はドライバーを拾うと、一昔前の小悪党のようにびゅーっと逃げていった。

鎧武のほうは鎧武で、黒影の撃退に成功したらしい。いつのまにか初瀬が消えていた。

何とか勝てた。

安心感から月花はその場にへたり込んだ。その拍子に変身も解けた。

「咲くくくっ！」

「へ……ひゃあ!？」

トモとナッツが左右から咲に抱きついた。全員がフェンスを乗り越えて駆けつけてくれたらしい。

「すごかったよお。メツチャかっこよかった！」
「やっぱあんたサイコーだわ！」

モン太もチューやんもヘキサも、興奮した様子で咲を褒め称える。こうはしゃがれると、まんざらでもない気分になってくる。咲はえへへ、と笑った。

すると、咲たちのちょうど前を、変身を解いた光実が走って行った。

「絃汰さん！」

行き先は葛葉絃汰とチーム鎧武のもと。光実は絃汰と握手し、仲間たちと健闘を讃え合っている。

「あたしたちも行こう。これ以上はおじやま虫みたいだし」

「だね」

「立てる？」

両側からヘキサとトモが咲を支える。モン太とチューやんが先導し、ナッツが後ろに付いた。

仲間の肩を借りて、咲はその場から去った。

「そうだ、ミッチ！ さっきの子たちは」

「あれ？ さっきまで向こうにいたんですけど」

「まだ礼も言っただけなのに……」

「ピンチに颯爽と現れて人知れず去る、ですか——まるでスーパーマンですね」

「だな。今度会えたら、ちゃんと話してみてえな」

第16話 あなたは優しい

季節は12月。並木道のイチョウもだいぶ裸木に近づいている。落ち葉が減るのは、リトルスターマインにとってステージ掃除が楽に済んでいいので大歓迎だ。

ステージと客席をほうきで掃き清めて、すり鉢型の劇場のベンチは、濡らした雑巾で拭く。そして、これまたトレーナーと同じで手作りの看板を垣根の割れ目前に置く。

最後に客席前にCDプレイヤーを置いて、リトルスターマインのステージ準備は完了だ。

咲とヘキサをセンターに仲間は並ぶ。

観客はすでに、満員御礼というほどではないが、集まってキラキラした目でこちらを見上げている。

ヘキサがリモコンを持ってCDプレイヤーを最大音量で起動した。

わっ、とちびっこばかりの観客のボルテージが上がったのを肌で感じる。この瞬間は何度経験しても気持ちよく、楽しい。

咲たちは踊る。全身を上下左右前後に動かして。どちらかといえれば緩やかでスローペースな振り付け、少ないステップのくり返し。

決して巧くはないと自覚している。チームバロンやチーム鎧武には及ぶべくもない。

それでも、そんなことは関係ない。

咲は楽しいから踊っている。仲間もそうだ。今日が楽しい、この世界は楽しいと伝えるために踊る。

（あれ？ なんかいつもとちがう感じのお客さんだ）

足を着けたまま体を横にずらす振りの時に咲は気づいた。

観客の中にオトナがいる。めずらしい。たまに近くにおさんぽに来たご老人が立ち寄ることはあるが、あの観客ほど若い人は初めてだった。

曲が終わり、咲たちがポーズを決めた時、その若いオトナの観客は、ちびっこに劣らぬ拍手を贈ってくれた。

野外劇場の片付けで、咲がビニール袋で客席のゴミを集めていると、咲の前にぬっと空き缶が差し出された。

「あ。ありがとうございます……」

顔を上げて、驚いた。

「どもっ。久しぶり」

「あなた……」

チーム鎧武の葛葉紘汰だった。

この日のリトルスターマインのステージは解散とし、咲は紘汰と海浜公園を歩いていた。

「前はありがとな。ミッチのこと助けてくれて」

「——それ言うために、わざわざ来てくれたの？」

「この前はちゃんと話せなかったからね」

律儀な人だ。真っ先にそう感じた。

「ヘキサの…トモダチのお兄さんだから。それにバロンのやり方、なんかやだったもん。数で勝つのがヒキョーとは言えないけどさ。でも…やだったんだもん」

「そっか。うん。やっぱ、ありがとう」

親以外のオトナから、何かお手伝いをしたわけでもないのに礼を言われるのは、初めての経験だった。

咲は妙にほかほかしてきた頬を隠したくて俯いた。

「ところでさ。何で咲ちゃんはビートライダーズなんてやってるんだ？ 小学生なのに」

それは学校の教師からも尋問されたことだった。反社会的な若者

の真似など、ごっこ遊びでも許しがたい、いずれ本物の非行少年少女になる、というのが教師側の主張だった。

その時はあれこれ濁したが、同じビートライダーズの紘汰になら。

「へキサがやりたいって言ったから」

第17話 炸裂！ New・カマー

ヘキサがやりたと言ったから——リトルスターマイン結成の動機を、咲はそう答えた。

「ヘキサ？ ミッチの妹さんの？」

呉島光実は、チーム鎧武では「ミッチ」で通っているらしい。

「うん。そのミッチくんの妹。ヘキサはわがまま言わないし、自分のキモチはとじこめちゃうタイプだから。そんなヘキサがはじめて『やってみたい』って口にしたの。だからあたしもみんなも、全力でかなえてあげたかった」

「——咲ちゃんもリトルスターマインもいい子だな。友達想いで」

咲はランドセルのベルトを握りしめた。

「そんなことない。あたし、全然イイコなんかじゃなかったもん」

きらきらと反射する大川に目を流す。まぶしい。

「あたしだけじゃない。みんな。でも、そんなあたしたちが『イイコ』になれた。ヘキサと会えたから。だから今度はあたしたちが、ヘキサのしたいこと、何でも叶えるの」

紘汰が何か言いたげに口を開きかける。もし尋ねられても、咲は

答えていい気がしていた。

だが、そうはならなかった。

咲と紘汰を追い抜いて、咲と同じ年頃の子供らが走って行ったからだ。

「なんかこの先でインベスゲームが始まるんだって」

「変なおっさんが言ってたんだけどさ」

咲はつい子供らを目で追い、紘汰を見上げた。

「インベスゲーム？」

「行ってみよう！」

走り出す紘汰に咲も続いた。

ギャラリィが出来上がっていたのは高架下の河原だった。ギャラリィは笑っている。笑いの対象は、アーマードライダー黒影とグリドンだった。

『何だお前ら！ 見せもんじゃねえぞ！』

黒影が影松の石附を地面に突き立てると、囃し立てる声はやんだ。

「いや、だって、ここでインベスゲームが始まるって聞いたぞ。なあ？」

「うん、聞いた」

『はあ？』

『おい、誰だ！ そんなデマ流した奴は』

城之内と初瀬も全く与り知らぬところらしかった。そうなるも咲も紘汰と共に首を傾げざるをえない。

するとギャラリーが割れて後ろから、妙にマッチョで背が高い男が前に現れた。

「ワテクシがギャラリーの皆様をお招きしましたの。記念すべき初舞台ですから」

マッチョで背が高いのに、オネエ言葉。11歳女子にはインパクトがありすぎるオトナだった。

「ワテクシはアナたちの下らないお遊戯に風雲を巻き起こす者。鳳蓮・ピエール・アルフォンゾ」

鳳蓮はサングラスを取って優雅に一礼した。そして、懐から取り出したのは、戦極ドライブー。

咲は紘汰と顔を見合わせ、同時に鳳蓮をまた見た。

『あ、それ、確かレッドホットの園村が!』

「ああ。あの格闘技のイロハも知らない子? あんまりマナーがなっていないものだから、ドルチェセットのお代にこちらを頂いたの」
『マジかよ…』

凰蓮はさらにロックシールドまで取り出した。遠目で視えないが、刺々しい果実のようだ。

「変・身♡」

《ドリアンアームズ! M i s t e r D a n g e r o u s!》

派手なポーズを決めながら凰蓮が変身した。

ライドウェアは黄緑。全身トゲだらけで、両手に持った鋸のような武器も突起で埋め尽くされている。見ているだけで痛そうで、咲はつい一歩下がった。

さあ戦いが始まるという寸で、絃汰がギャラリーの前に出た。

「おい! あんた、ビートライダーズでもないのにインベスゲームに参加しようってのか」

『ん? あら、誰かと思えばこの間のダサ男くん! 文句があるの?』

「——絃汰くん、ダサくないし」

独り言のつもりだったが、ドリアンのアーマードライダーは聞き逃さなかったようで。

『そちらのmademoiselleも！ よーくお聞きなさい。古来より戦いとはエンターテイメント。時のローマ皇帝は、コロシウムで剣闘士を戦わせ、市民に娯楽の興奮を提供したもののよお？ 今からここで、最っ高のショーを披露してあげるわぁん♡』

わぁんとギャラリィが沸いた。

こうなってしまうのは、咲にも紘汰にも、これから始まる理不尽な闘争を止める術はなかった。

第18話 「エンターテイメント」

黒影とグリドンは、ドリアンのアーマードライダーにこてんぱんに伸された。

全然いいとこなし、善戦とも言えない。ただただ一方的にいじられて遊ばれて倒されただけ。

変身が解けた初瀬と城之内はベルトだけ持ってほうぼうの体で河原から逃げて行った。

時々「本当のセンジョウ」「フクロツメ」などよく分からないことを言っていたが、凰蓮の実力が自分らと桁違いなのは幼い咲にも分かった。

比べてしまったから、分かってしまった。

変身を解いた凰蓮がまた優雅に礼をする。ギャラリィから歓声が上がった。――気持ち悪い。

「あんた、こんなことして何になるんだ」

歓声の中、ただ一人険しい声を上げたのは、紘汰だった。

「今のは勝負にもなっていないじゃないか。勝てるよと分かっている相手を人前で叩きのめして、そんなに楽しいのかよ」

そんな紘太の背中に励まされるものを感じた。咲は思い切って前

に出て紘汰と並んだ。

「遊びにだってルールはあるもん。あたしたちも、あの二人も、ルールを守ってやってきた。それを、いきなり来てブチこわして。わかってないの、そっちじゃない」

すると凰蓮は呆れたようなしぐさをしてから。

「プロの世界のエンターテイメントは残酷なの。プレイヤーは全て血に飢えた観客たちへの供物。そこがアマチュアのアナタたちとの、チ・ガ・イ♡」

咲の心臓が大きく跳ねた。

——咲は知っている。凰蓮の言う通り、強者が弱者をいたぶり、叫ばせ、泣かせることが「エンターテイメント」になりうることを。知っているのだ。身をもって。

「冗談じゃねえ…!!」

「っ、紘汰くんっ?」

「俺たちは誰も、笑われるためにステージに立ってるんじゃない!」

紘汰は咲の背中を押し、咲を連れてギャラリィを抜けていく。咲は連れられるまま、紘汰と共に河原を後にした。

「だー！ 何っなんだあいつ。一体何様のつもりだっ」

紘汰はずかずかと河川敷を歩いていく。歩幅が足りない咲は小走りになって紘汰を追いかけた。

「インヴィットとレイドワイルドのリーダーたち……カワイソウ」

紘汰が歩みを止めて咲をふり返った。まずいことを言ってしまっただろうか。咲も立ち止まって、紘汰の視線を受け止めた。

「ああ……一番怒りてえのは、きっとあいつらだよな。俺なんか……見てただけ、だもんな」

彼の表情は寂しげだ。前のバトルでは、宿敵ともいえるチームバロンの戒斗さえ助けた彼だ。今回の件も気に病んでいるのかもしれない。

「あー、くそっ。何でケーキ作りの名人が俺たちなんかを目の敵にするんだ？ 訳分かんねえ。ケーキ屋なら店でケーキ作ってりゃいいだろうが」

その時、咲の脳裏に閃くものがあった。

第19話 遊びにだってルールはある

「――あたし、何で分かる、かも」

え、と紘汰が首を傾げて咲の答えを待つ。

「前に、あたしが行ってるダンススクールのインストラクターの人が言ったの。『アタシん時と違って、今のガキはチャンスだけなら恵まれすぎてる』って」

「チャンスに…恵まれすぎ？」

「センセーはコドモの頃からダンスやって、たっくさんオーディション受けて、コンクールに出て優勝して、やっとプロになった。でもそれもケガして長く続かなくて、今インストラクターやってるの」

「へえ…」

「『最近じゃ、ネットに動画を投稿すれば誰だってアーティストになれる。そういう意味じゃチャンスに恵まれすぎだよ、お前らは』って。少しキズついたけど、ほんとだなんて思った」

彼女の意見は、幼い咲には耳に痛かった。まるでインターネット世代の咲たちの生き方そのものを否定され、責められている気がした。

「そう、かもな――でもさ」

紘汰は屈んで咲と目線の高さを合わせる。澄んだ目をしていた。

「いくらチャンスに恵まれたって、それを掴めるか、みんながそれを活かせるかっていわれたら、そうじゃないだろ？ 手の届くところにある分、目を付けられやすくて、オトナの都合で消費されて潰れてく奴だっているだろう。だから俺は、昔と今と、カタチが違うだけで、がんばんなきゃってところは変わらないと思う」

紘汰が起き上がってニカッと笑った。

「……いいの、かな。そんなふうには思っちゃって」

「ん〜——実は俺もさ、現役でチームやってた頃、そんな感じのこと言われたりしたからさ」

「そうなの？」

「そう。だから咲ちゃんもさ、あんま卑屈になることないんじゃないかな」

卑屈。言われてみればそうだったかもしれない。恵まれた自分は、ずっと「ごめんなさい」を想って抱えて踊らなければいけないと心の奥で思っていた。

「俺たちストリートダンサーが一番大事なのは、技でも上手さでもない、楽しむこと！ ……ってこれも舞の受け売りだけど」

胸をこつんと叩かれた。咲は胸に手を当てる。

ここにあるものは？ ダンスをする時にここはどうビートを打っている？

いつだって楽しくて弾けそうに打っていた心臓。

「……なぐさめてくれてる？」

「へ？ あ、いや、そうじゃなくて。いやそうなんだけど！ ごめん、俺ばっか話しちゃって」

咲は首を振り、両手で胸を押さえた。何となく、今までより軽快に打っている、気がした。

「ねえ。メアドこーかんしない？」

「俺と？」

「今日はあだし、あなたにそーだんにのってもらったから。今度はあたしが、あなたに何かあった時、そーだんのもってあげたいなってだめ？」

「だめじゃないよ、全然。ちょっと待ってな」

紘汰がポケットからスマートホンを取り出す。咲も自前のお子様用スマートホンを出して、番号送信の操作をする。

青と黄色のスマートホンを突き合わせると、液晶に「葛葉紘汰」の表示。

「かつ……は？ ……ごめん、何て読むの？」

「かざらば、こうた。紘汰でいいよ」

「ありがとう——紘汰、くん」

咲は今日一番の笑顔で紘汰を見上げた。笑い返す紘汰が、何となく、まぶしかった。

第20話 Shall we dance?

葛葉紘汰がステージを訪ねてきた日から1週間ほどが過ぎたある日。咲のスマートホンに紘汰からメールが届いた。

内容は、チーム鎧武とチームリトルスターマインによる、合同ステージの誘いだった。

「コラボ？」

「チーム鎧武と？」

ナッツとトモに問われ、咲は肯いた。

「あんた……いつのまに鎧武の人とアド交換する仲になったの」

「まあいろいろあって。オサソイに乗るか乗らないか。みんなどうしたい？」

いつもの作戦会議のように円陣を組んでいる仲間に戻した。
5人ともが考え始めた。

咲としては、ぜひ参加したい。今や「あの」を接頭語にするまでに盛り詰めたチーム鎧武との共演だ。その上。

「わたしは……やりたい、かな」

一番にヘキサが言った。

そう、チーム鎧武にはヘキサの兄・光実がいる。兄妹で同じステージに立てれば、ヘキサの思い出作りにはもってこいだ。

「ステージって鎧武のほう？」

「ええ。あくまであたしたちはスペシャルゲストって形らしいから」

「スペシャルゲストかー。なんか特別な感じすんなー」

「でも観に来るのってマジなお客さんでしょ？ いつも小学生とか幼稚園児相手なあたしらが行っていいのかなあ」

ナッツは渋い顔をしたが、ここで意外な応援が。

「……逆に言うと、ちゃんとしたお客さんに観てもらえるチャンス」

「お、チューやんがめずらしくセツキョクテキだ」

「そうそれ！ いずれスクール単位で大会に出たら人前で踊るんだし。チューやんナイスっ」

賛成意見を受けて気が大きくなった。咲は立ち上がった。

「ビートライダーズ同士がバトるんじゃないって、いっしょに踊る。

そういうこともできるって、観てる人たちに教えてあげるのよ！
ほかでもない、あたしたちが。これってスゴイことじゃない？」

「そう言われると……」

「すごいかも……？」

乗り気でなかったナッツとトモの顔に笑みが浮かぶ。

「うん。そういうことなら、せっかくのオサソイ、乗ってみようじゃない」

「ナッツならそう言ってくれるって信じてたあ！」

咲はナッツに抱きついた。

これにて、リトルスターメインとチーム鎧武のコラボが決定した。

………

……

…

後日。チーム鎧武のガレージ前に、リトルスターメインは集まった。

「高司舞よ。よろしくね」

「リーダーの室井咲です。よろしくおねがいします」

咲が舞と握手した。光実ほか鎧武のメンバー、そしてヘキサほかリトルスターメインのメンバーも交互に自己紹介をした。

「紘汰くん、今日はいないんですね」

「紘汰に用事があったの？」

「ううん。メール送ってきたのが紘汰くんだったから、紘汰くんもいるんだと思って」

「ごめんね。あいつは今日バイト探しでき。本番は絶対観に来るって言ったから」

「よかった」

光実が震えた。季節とは関係なく、何となく。舞と咲のやりとりの中に薄ら寒いものがあつた気がしたのだ。

「——ねえ、ヘキサ。もしかして咲ちゃんって、紘汰さんのこと……」

「えっ？ ——そ、そんなこと、ちっとも言っていなかったけど。咲、そういうの、かくさないから」

無自覚か、光実の勘違いか。後者であってほしいと光実は切に願った。

ふと光実が視線を感じて目だけをそちらに流した。

リカとラットがヘキサに注目し囁き合っている。私生活が謎に包まれている光実の姉妹とあって、取り沙汰しないと気がすまないのだろう。

「こーら！ おしゃべりしてる暇があったらフォーメーション考えてよね。ただでさえスタイルが違うんだから」

「わっ。ご、ごめん、舞」

くるっ。舞が光実をふり返る。なびいた髪や無邪気な口元に、どきっとする。自分と舞は身長差がほとんどないから、何気ない仕草を至近距離で感じてしまうのだ。

「まずはお互いに踊ってみよ。実際にどんな感じか、ネットラジオじゃ分からないこともあるし」

舞の提案で、チーム鎧武とチームリトルスターマイน์が順番に普段のダンスを披露する段取りとなった。

チーム鎧武のスタイルは、ポップな曲に足を使ったジャンピング

がメイン。

リトルスターマインは上半身を左右にうねらせ、曲はランダム。――ということが分かった。

互いを観終わってすぐ、光実が舞と話し合い始めた。

「ミッチはどう思う？ リトルスターマインのダンスってスローな感じが多いから、やっぱあたたしたちでスピード落としたほうがいいかな？」

「そう…ですね。選曲にもよると思いますが、僕らは結構飛んだり跳ねたりしますから。ステップの少ない向こうに合わせるのが無難じゃないでしょうか」

「やっぱそうよねえ。――咲ちゃんはどう？ 何か案ある？」

話題を振られた咲は腕を組んで首を傾げた。どこかで木魚が鳴っていきそうな沈黙。そして。

「ミッチくん。ヘキサのこと抱っこしてみて」

「え！？」

兄妹揃って声を上げた。しかも赤面してしまったから光実としては恥ずかしい限りだが。

「え、ええと、ヘキサ、いい？」

「は、はい」

何だこの付き合いたてのカップルのような会話は。そういう会話

は舞としたい。

——などという雑念を払い、光実は妹の背中と膝裏に腕を回して妹を横に抱き上げた。

(まさかこの歳になって妹をお姫様抱っこする日が来るなんて……)

「うん、イイ感じ」

「ねえ咲、これってどういう意味？」

「チューやん以外はみんな背の高さがスゴイ差があるでしょ。だからバレエとかフィギュアみたいに、鎧武の人たちがあたたしたち抱っこしたらカッコイイんじゃないかなーって」

「それいいかもっ」

舞が手を打ち鳴らした。リカやチャッキーも「良くない？」と言いつ合っている。

「ミッチ。実際にヘキサちゃんリフトして、どう？ イケそう？」

「はい、バッチリですっ。ヘキサは元から軽いし。みんなヘキサと同じくらいなら、ラットたちも全然イケます」

「トモとナッツは男の人に抱えてもらうの、へいき？」

「スクールでたまにやる社交ダンスに比べたら、ちよろいちよろい」

「決まりねっ」

舞がパン！ と、手を叩いた。

それが決定の合図となり、二つのチームは新しいダンスに向けて

の練習を開始した。

合同練習の日々はあっというまに過ぎ、ついにリトルスターマイ
ンが鎧武のステージに立つ日が来た。

「あー、ヤバ。キンチョーしてきたあ」

「……」

「チューやん、顔青いぜ、だいじょうぶか？」

「……へいきだ」

トモやチューやんだけではない。モン太は普通通りだが服の前後
が逆だし（今直しに行った）、ナッツは貧乏ゆすり。

目を輝かせてチーム鎧武のダンスを観る余裕を見せるのはヘキサ
だけだ。さすがの咲も今回はやはりブから始まるコンプレックスを
口にしてやろうかと思ってしまった。

ステージの曲が停まった。沸き起こる拍手。チーム鎧武のダンス
が終わったのだ。咲の心臓はさらに速くビートを打ち始める。

「今回は特別にスペシャルゲストを呼んでるよ！ カモン！」

舞の声にヘキサ以外の5人は肩を跳ねさせた。

「——ここまで来たら腹くくるしかないわよ」

咲たちはメンバーを集め、円陣を組み、中心で手を重ねた。

「さあ、行っくわよー、みんなっ」

『おー!』

そして、咲たちリトルスターメインは、初めての正規ステージに上がった。

——1日限りの祭典が幕を開ける。

最初観客は未知なる招待客に訝しんだが、誰かがリトルスターメインという特別なチームだと言い、舞がそれに応えるように咲たちを紹介したことで、咲たちは拍手で迎えられた。

まずはリトルスターメイン単独のダンス。

今日はいつも以上に、ゆらゆら揺らめく動きを強調し、抒情的（とヘキサが表現した）に踊った。

これについては、拍手はまばら。残念だが構わない。これは観客にリトルスターメインを紹介するためのダンスだから。

続いてはメインプログラム、チーム鎧武とのコラボレーション・

ダンスだ。

ポップコーンのように飛び跳ねるチーム鎧武のメンバーの間を縫って、リトルスターメインは水草のように踊る。

緩と急をそれぞれのチームに割り振り、舞台の上で融合させる新ダンス。

そして振りつけはついに咲提案の「鎧武の男子がリトルスターマインの女子をリフトする」ところまで来た。

さあいざ、ヘキサと光実の兄妹コンボ―

という寸前、プレイヤーズパスが何者かに抜き取られて音楽が中途半端に停まった。

「こういう物で公共のステージを使わせるのなら、もっと厳正な審査の上で発行するべきよね」

観客がどよめく。咲にはイヤというほど見覚えがあった。プレイヤーズパスを奪ったのは、凰蓮・ピエール・アルフォンゾだった。

「あたしたちのダンスの良し悪しを、何であんたに決められなきゃなんないのよっ」

「誰も決めようとしなからよ！」

果敢にもチーム鎧武のリカが声を上げたが、凰蓮はそれを上回る大声と氣勢で言い返してきた。

さらに凰蓮は「ニセモノ」だの「文化が廃れる」だの言い連ねたが、咲の耳には届かなかった。

咲が想っていたのは一つ。

ビートライダーズ始まって以降初の試みだった。

ヘキサを光実と踊らせてあげられる初めての舞台だった。

それを、潰された。

それを、邪魔された。

(絶対、ゆるしてなんかあげない)

咲の手は吸い込まれるように戦極ドライバーに伸び、ドライバーを取り出していた。

第23話 アマチュアは主張する

しかし、ベルトを掴んだ咲を、当のヘキサが腕にしがみついて止めて来た。

「咲、待って！」

「待てない！ だってあいつ…！」

「ここはチーム鎧武の人たちのステージよ！ 別のチームのわたしたちが先に出ちゃいけない！」

確かに、ここで咲が戦って負ければ、あの男はそれを言いがかりにしてこのステージを奪ってしまいかねない。ここは咲たちの野外劇場ではないのだ。

「ストップ！」

観客側にいた絃汰が、足のジャンプだけでステージに上がってきた。

「絃汰くん…」

「大丈夫だ、咲ちゃん。その子の言う通り、ここからは鎧武おれたちの問題だ。咲ちゃんの分は俺が引き受ける。——ミッチ、あいつは強敵だ。助太刀するぜ」

絃汰の背中では、河原での時のように頼もしかった。

『あらあ。アナタもビートライダーズだったのね。道理でセンスのない格好してるわけだわ』

チームユニフォームは仲間を繋ぐ大事な品であり、人々に自分を示す証の服だ。それさえ貶され、咲はまた前に出ようとしたが、今度はへキサと、ナッツにも掴まれて止められた。

「あんた、みずがめ座の俺とは相性悪いんだってな。星占いなんて信じる気はないが、今度ばかりは納得だよ！ ミッチ！」

「はい！」

紘汰と光実と同時に戦極ドライバーを装着し、それぞれの錠前を起動した。

「「変身！」」

《オレンジアームズ！ 花道・オン・ステージ！》

《ブドウアームズ！ 龍・砲・ハッハッハッ！》

オレンジとブドウの鎧が紘汰と光実を鎧武者へと変身させた。

ブラーボは満足げに、両手を観客に向けて広げた。

『開幕よ O u v e r t u r e ！』

わあ、と観客が沸いた。咲とて分かっている。演者が感情をむき出しにすればするほど観る側のボルテージは上がる。それでも、忸

惚たる思いだった。

『いちいちうるさいんだよ!』

大橙丸で鎧武が先陣を切った。鎧武がブライボと切り結ぶ隙に、龍玄がブドウ龍砲で撃とうとする。だが。

(あいつ、紘汰くんを盾にしてる!)

龍玄もそれに気づいたらしく、ブドウ龍砲をトンファアのように逆手に構えて、近接戦に入った。

鎧武が大橙丸でブライボと鏢競り合う。

『あんだ、誰よりも頑張って立派なケーキ職人になった、それを誇りにしてんだろう!』

『そうよお? ワタシこそが本物のプロフェッショナルよ』

『だったら自慢のケーキを作ってるだけで胸を張ってればいいじゃないか。こんな馬鹿げたことをやるよりも、よほどみんなが喜ぶはずだ!』

「紘汰くんの言う通りよ! さっきからプロ、プロって、プロがどんだけえらいのよ!」

同じ思いの人がいるという心強さは、今度も咲の背中を押した。

「大体プロだってアマチュアの行きつく成れの果てじゃん! あなた、ちっちゃい子がケーキ職人になりたいって言って、砂場でどろ

んこケーキ作ってたらそれ壊すの！？　あなたがやってるの、そういうことじゃん！　ちよっと人より先にゴールしたからって、スタート地点にいる人たちをバカにしないでよ！！」

息が荒い。咲は肩を上下させた。言ってやった。あの凰蓮・ピエール・アルフォンゾに。

チームメイトは呑気に「咲やるう」「度胸あるく」などと言っているが、咲としては人生を懸けたと言ってもいい未成年の主張であった。

第24話 大玉ビッグ・バン

『ええい、黙らっしゃい!』

『おわ!?!』

鎧武が鏢競りに負けて吹き飛ばされたが、舞台下にいた龍玄が何とか受け止めた。

鎧武と龍玄は同時に無双セイバーとブドウ龍砲から弾丸を発射した。

しかしブラーボは鋸を合わせて棍のように回してそれらを弾き返してしまった。

『そうだわ。ちょっとあの子の真似をしてみようかしら』

ブラーボが出したのは、今までビートライダーズから奪ったであろうロックシードの数々。ブラーボはそれらを次々に開錠し、地面に放り捨てていく。

空にチャックが次々と開き、中からインベスが溢れ出た。

『おい! コントローラーはどうすんだよ!』

『はあ? 何よそれ』

「インベスゲームの初歩さえ知らないなんて…!」

ステージ上のフィールドを破ってインベスが溢れ返る。こうなつては咲も傍観しているわけにはいかなかった。

咲は仲間の輪から出て、今度こそ戦極ドライバーを腹に装着した。

「変身！」

ドラゴンフルーツの錠前をバックルにセットし、拳を2回打ち下ろしてロックとカットを同時に行う。

《ドラゴンフルーツアームズ！ Bomb Voyage!》

ドラゴンフルーツのアームズが頭に落ちて、咲の体を鎧った。

月花は変身が終わるや、持てるだけのDFボムを、ステージにいるインベスの群れに投げた。ステージの上なので、もちろんブラーボもインベスの爆発に巻き込むこととなる。

『チョット！ ワテクシがいるの忘れてなくて!?!』

『さっきやれなかったウラミを込めてみた』

『ムキーン!』

それにブラーボなら巻き込んでも死なない気がしたのだ。月花としては大変忌々しいことだが。

月花は武装をDFボタンに変え、自身も鎧武と龍玄を追ってステージから飛び降り、インベスの群れに突っ込んだ。

『ふーはあ!』

1打、2打とバトンでインベスを打ち倒す。それでもインベスは無限にいるかのように次から次へと湧いてくる。

『絃汰さん、これ使ってください!』

ステージ脇にいた龍玄から鎧武にロックシードが投げ渡された。鎧武が錠前のロックを外す。

すると鎧武の頭上に、通常のアームズの10倍はありそうなスイカが出現した。

『うおお!? でかい! ミッチ、無理! 無理!』

『え、そんな大玉…』

デカすぎでしょー、と仲間やチーム鎧武のメンバーからも声がかかる。

『くっっ男は度胸!!』

鎧武はバックルからオレンジの錠前を外し、スイカの錠前を嵌めてロックした。

カッティングブレードを落とすや、大玉スイカは鎧武の上に落ち、鎧武を押し潰した。

「つぶれたあ!?!」

「絃汰さくん！」

『ホホホ！ 自滅ですってえ』

インベスが大玉スイカに近づく。

その途端、大玉スイカは地面を抉って猛烈な勢いで回転した。

第25話 泣き虫咲

《スイカアームズ！ 大玉・ビッグ・バン！》

大玉スイカは無人の客席を縦横無尽に転がり、全てのインベスを噴き飛ばし爆散させた。それどころか、受け止めようと飛び込んだブライボさえ吹き飛ばした。

月花も龍玄もチームのメンバーも、ぽかーんとそれを見ているしかなかった。あまりに圧倒的で、反則級だ。

ひよこ、とスイカの頭頂部から鎧武が頭を出した。

『すげえぞ、ミッチ！ こいつは使えるぜ』

チーム鎧武もリトルスターメインも揃って快哉を上げた。笑顔で手を打ち鳴らした。

——喜びの中にあって、誰も気づかなかった。一体だけ難を逃れたインベスがいて、落ちたロックシードを食べて巨大なイノシシ型インベスに成長したことに。

一番に気づいたのは龍玄だった。

『——やばい!』

龍玄は即座に巨大なイノシインベスの前に出てブドウ龍砲を連発した。そこをすかさず、スイカを鎧った鎧武が押さえにかかる。

スイカ鎧武の猛攻に、イノシインベスが逃げ出した。

鎧武がスイカになって転がり、龍玄はロックビークルに乗ってそれぞれインベスを追って行った。さらにブラーボが去った。

ロックビークルのない月花に追うことはできない。月花は錠前を閉じて変身を解除した。

『咲!!』

駆け寄って来たのはリトルスターマインのメンバー。

その中で、ヘキサの顔を見た咲は、今まで堪えてきた想いを溢れさせていた。

「…めん…」

「咲？」

「ごめん…ごめんねえ、ヘキサ…っ、はじ、はじめ、て…お兄さ、

と…ぶ、ぶた…い！ まも、れ、まもれ、なくて…！」

「あ……」

ヘキサや仲間も、咲が言う所に気づいて、気まずい表情をした。それが咲の涙腺をさらに刺激した。

「ごめっ、ごめんなき…うえーん！！！」

咲はその場に座り込んで泣いた。泣きじゃくった。

ヘキサを喜ばせたくて、ヘキサの思い出を増やしたくて設けたコラレーション・ステージだった。それなのにこんな形で潰れてしまい、その潰した相手に自分では敵わず。

結局、咲には何もできなかった。瑕になる思い出を作ってしまっただけ。

咲が泣いていると、ふわりと温かい感触が包んだ。

「あいかわらず咲は泣き虫ね」

ヘキサが咲を抱き締めてくれたのだ。

「…ご、めん…ううっ」

「いいよ。そんな咲だから、わたしもみんなも咲が大好きなんだもん」

ヘキサの手が優しく咲の髪を撫でる。きっと泣きたいのはヘキサ

のほうなのに。

「だいじょうぶ。ちゃんとわかってるから。咲がわたしのためにがんばってくれたこと。咲、大好きよ」

「へキ、サあ…う、え…！」

絃汰と光実が帰るまで、細く小さく、咲は泣き続けた。

第26話 インベス捕獲作戦前夜

——とある日の夜の呉島邸。

風呂上りの碧沙は寝る前に光実の部屋を訪ねた。

すると光実から、光実のリーダーの提案であるインベス捕獲作戦について聞かされた。

そして、光実がその作戦を積極的に立てた理由も。

「白いアーマードライダーが貴兄さんかもしれない——」

「うん。前に僕のチームの人がスイカロックシードで変身した時があったろ？」

光実は碧沙に顔を寄せて声を潜める。

「あれ、兄さんの部屋にあったライダーと一緒にあった錠前だったんだ。戦極ドライバーなんて意味なく持ち歩く物とは思えないし、現時点で一番兄さんが怪しい。だからインベスを倒すのはもちろんだけど、インベスとユグドラシルが繋がってないかも、今回のことで確かめられたら——」

「そう、なの……じゃあ、あの香りも……」

「香り？」

碧沙はためらったが、声を低くして口にした。

「ここのとこずっと、貴兄さんから甘い香りがするの。くだもの、くさる手前の、熟しきった感じ。最近は毎日」

碧沙は身を乗り出して光実に、息の交わる距離まで迫った。

「光兄さんからも少し感じる……何を持ってるの？」

光実はたじろいだ。だが、やがて観念し、ショルダーバックから何かの袋詰めを出した。

「これがインベスのエサ。前に話した「森」に生ってる果実なんだ。これを使ってインベスをおびき出すのが今回の作戦」

袋の中身は、毒々しい赤紫の果物だった。光実は袋から出して碧沙に見やすいようにしてくれた。

「……ひどい香り。すごく甘ったるくてやな感じ」

「そう？ 香りは分からないけど、僕は、その、とてもおいしそうに見えるんだけど」

「ダメ」

碧沙は果実に蓋をするように両手を光実の手に重ねた。

「食べちゃダメ、ぜったい、ダメだから」

碧沙なりに必死に訴えた。何故かは碧沙自身も分からないが、この果実は良くないものだと分かった。

そもそもこんなひどい香りがする物を、光実が口にするなんてとんでもない。

「——分かってるよ。言ってみただけ。心配してくれてありがとう、碧沙」

光実が空いたほうの手で碧沙の髪を梳いた。

「光兄さんの手と貴兄さんの手って、似てる」

「僕が、兄さんに？」

「やさしくて、ふんわりした気分になれる。そんなの兄さんたちだけ。やっぱり兄弟だから？」

「分かんないよ——そんなの」

光実の手が離れる。

いつもそうだ。貴虎の話題になると、光実の態度は冷める。

せめて碧沙に向ける半分でも互いに向け合えば、もっと歩み寄れるのに。

「もう遅い。碧沙、部屋に戻りなよ。夜更かししてたら、貴虎兄さんに怒られるよ」

「はあい」

碧沙は名残惜しくもベッドを降り、とたとたとドアに行って。

「おやすみなさい。よい夢を」

「よい夢を。おやすみ」

碧沙は満面の笑みを浮かべて光実の部屋を出た。

第27話 新しいゲーム

世間はクリスマススムード。たくさんの店がクリスマス商戦でにぎわっている。

オトナも子どもも浮き足立っている中、ここ、桂ダンススクールではいつも通りのレッスンが行われていた。

「新しいゲーム？」

ダンススクール教室の鏡際。咲はタオルで汗を拭きながらつい言い返していた。

「うん。光実兄さんのアイデアだね。ロックシードの生る森があるんだって。そこへ行って、ロックシードをいちばん多くあつめた人が勝ち」

「そんな森があるの？」

「あるみたい。兄さんも、あと、チーム鎧武の葛葉さんと、高司さんて人も行ったことあるんですって」

「ふーん」

「光兄さんは咲にもこのゲームに参加してほしいみたいなの。キョウリョクシヤは多いほうがいいって言ったけど、出るかどうかは咲しただいだから」

「まあ……あたしたち、いちおーバロンに勝ったってことになってるから、参加しようと思えばできると思うけど」

「？ 咲？」

咲はヘキサの顔を覗き込む。まだ言いたいことを言いきっていない顔だ。

このゲームは勝っても負けてもリトルスターマインにメリットがない。

アーマードライダーの代理戦争で勝敗が決まる現状では、必ずしもロックシードが要るわけではない。ランキングに拘っているわけでもないから、参加して敵を増やす理由もない。

「ヘキサは出たいの？」

それでも、ヘキサが持ちかけたということは、彼女の家庭事情に関係することだろうから、尋ねた。

「……前に、わたしには兄さんが二人いるって話したの、覚えてる？」

ヘキサの言葉を一つでも忘れるわけがない。

「上の兄さんがね、その森で何かしてるみたいなの。しかも、鎧武の葛葉さん……殺されかけたって」

「ころ……」

「もし兄さんがそんなことしてるんだったら、今まで兄さんからしてた血のおいもナットクできる。でも、人を……光兄さんの大事

な人を殺しかけたなんて……信じたくない、のに」

咲はヘキサの背中をそっと撫でた。

「……光実兄さんも、上の兄さんがそうかカクシンが持てないから、今回の新しいゲームで、兄さんかもしれない人——白いアーマードライダーのショータイをつきとめようとしてるの」

「アーマードライダーなの？」

ヘキサは沈んだ面持ちになったが、しっかりした表情を取り戻して首を縦に振った。

「わたしも知りたい。ほんとに兄さんがアーマードライダーなのか、葛葉さんを殺そうとした人なのか。だから、もし咲が出なくても、わたしは光実兄さんといっしょに出るつもり」

第28話 小さな体に大きな決意を

「ふうん………ええ!? ヘキサ一人で!?」

咲はヘキサをまじまじと見返した。目が据わっている。本気だ。

「一人じゃないわ。葛葉さんといっしょに行かせてもらえるよう、兄さんがたのんでくれるって」

「じょ…っ」

(ジョーダンじゃない! いくらだれかといっしょでも、ヘキサはアーマードライダーでもないふつうの子。そんなあぶないライダーが出る場所にハイドローぞって放り込めるわけじゃないじゃん! オオカミのオりにひつじ投入するようなもんだよ!)

俯いた咲の顔をヘキサが覗き込む。

「咲、だいじょうぶ?」

「———ごう」

「ん?」

「ウチの子全員しゅーごー!」

自主練やら別のグループとのおしゃべりやらをしていたモン太、

チューヤン、ナッツ、トモが顔を上げ、がやがやとこちらに戻ってきた。

「リーダー、なにー？ クリスマスパーティーでもすんのか？」

「てかウチの子ってなによ。ツチノコみたいじゃん」

「クリスマス近くに、ビートライダーズのトップランカーで新しいゲームがあるの。参加していいと思う？」

全員の顔からおふざけ要素が削げ落ちた。彼らはいつもの作戦会議用の円陣を組んだ。

「ランキング上げたいの？」

「ううん」

「……ほかのチームのケンセイ」

「ううん」

じゃあどうして、と仲間が口々に言い、睨に注目する。

「チーム鎧武の人たちが、最近のインベス事件についてしらべてるの。それで、ヘキサを通してあたしに協力してほしいって。このゲーム、調査のイッカンなんだって。それと、もいっこ。ヘキサのおうちのジジョー。そのゲームで、お兄さんのことで知りたいことがあるの」

「お兄さんってチーム鎧武の龍玄……」

「じゃ、ないほう」

皆がヘキサを向く。ヘキサは肯いて誤りがないことを伝えた。へ

キサのほうも、咲たちを信頼してくれているから、こうして内情を曝しても怒らない。

「ヘキサのおうちのことならしゃーないかあ」

モン太が言ったのを皮切りに、残る3人も賛成の声を上げた。

「決まりね。ヘキサ、お兄さんに伝えて。リトルスターメインも参加するって」

「つ、伝えるのはいいけど……咲、ほんとにいいの？ いつものインベスゲームとはちがうのよ？」

「ロックシード集めでしょ？ だったらむしろインベスゲームより安全じゃない。だいじょーぶ。あたし、がんばるから。だからいっしょに行かせて？ ね？」

かくて、室井咲と呉島碧沙の「クリスマスゲーム」への参加が決定した。

………

………

…

――12月24日

沢芽市のとある倉庫街に、光実、戒斗、初瀬、城之内、咲――ビートルライダーズの5トップが集結した。

第29話 クリスマスゲーム開始

——来たるクリスマス・イブ。

沢芽市のとある倉庫街に、光実、戒斗、初瀬、城之内、咲は集合していた。

そして、これは咲と光実しか知らないことだが、物陰には紘汰とヘキサが隠れている。

彼らは他のチームリーダーの目を盗んで別途「森」に侵入する手筈になっている。

「何故このガキがここにいる」

試合開始直後のジャブとばかりに、戒斗は咲を睨み、咲も戒斗を睨み返した。

「いちゃ悪い？ あたしだって、ルーキーだけど、1コのチームのリーダーよ」

「僕が呼びました。彼女もビートライダーズですから。あなたのおかげで」

戒斗は小さく舌打ちした。咲とのインベスゲーム初戦を思い出したのかもしれない。

それにしても今の光実の笑顔は黒かった。ヘキサも怒らせると怖い、今の光実はもっと怖かった。さすが兄妹。

「全員揃いましたから、ゲームを始めましょう」

光実が戦極ドライバーを出した。彼に倣って、戒斗、初瀬、城内、そして咲もドライバーを出す。

誰から変身してもおかしくない——一触即発の空気を、

「Attends!! ちょおっとお待ちなさい!」

流暢なフランス語とオネエ言葉がぶち壊した。

凰蓮・ピエール・アルフォonzは歩道橋の上から、意味もなくアクロバチックな宙返りを決めて降り立った。

「こんな楽しそうなイベントにワテクシを呼ばないなんて、一体どういうことかしら?」

「どうしてあなたがゲームのこと知ってるんですか?」

凰蓮はスマートホンを出した。液晶にはDJサガラのネットラジオが映っている。内容は、咲たちトップランカーのビートライダーズによる「新しいゲーム」について。

それはもうこれ以上ないくらいに、光実が呆れてしまうほどに、盛大に暴露されていた。

問答はあったが、結局は凰蓮もゲームに参加する運びとなった。

仕切り直してテイク2。

全員がそれぞれドライバ―を装着し、錠前を出し、バックルにセツトする。

『変身！』

ブドウ、バナナ、ドングリ、マツボックリ、ドリアン、ドラゴンフルーツのアームズが、空に開いたチャックから現れ、それぞれの装着者の頭に落ち、ビートライダーズを鎧った。

彼らの行動は速かった。即座に自分のロックビークルを展開し、バイクに変形したそれに跨り、エンジンを噴かす。

バロンが、ブラーボが、黒影とグリドンが次々に花型のチャックに突入して行く。

『咲ちゃん、後ろに乗って！』

『うん！　――えいや！』

月花が後部に跨るや、ローズアタッカーは走り出した。

バイクにも乗ったことがない月花は、予想以上のツイストランに堪らず龍玄の腰に強くしがみついた。

第30話 ヘルヘイムの森 絃汰&ヘキサ ①

絃汰もまた、光実たちが全員「森」に消えたことを確認してから、自らもサクラハリケーンにヘキサを乗せて「森」に突入した――が。

「大丈夫？ ヘキサちゃん」

「だいじょうぶ、です。ちょっと、香りが……でもだいぶ、なれましたから」

――森に入っすぐ、ヘキサは「甘い香りがしてきもちわるい」と訴えた。最初は訴えるだけだったが、森を進むにつれて徐々に顔色を悪くしていくヘキサを、絃汰はこれ以上歩かせたくなかった。

よって、足での探索から、待ち伏せに切り替えたのだ。

本当は樹の上に登ればよかったのだが、具合の悪いヘキサにそんな真似はさせられず、こうして、ちょうどよくあった岩と茂みの隙間に隠れている次第だ。

（ミッチから預かった、ミッチの大事な妹なんだ。ミッチの信頼に応える意味でも、俺が絶対この子を守らないと）

「！ 葛葉さんっ」

ヘキサに促された絃汰は、すばやく外を覗いた。同時に、地面にグリドンが倒れ込んだ。

尻餅を突いたまま後ずさるグリドンにサーベルを突きつけるのは、あの白いアーマードライダー。

「始まった——！」

グリドンが白いアーマードライダーによって昏倒させられる。すると兵士の格好をした人々がやってきて、気絶した城之内を囲んで散弾銃を構えた。

『クラックの外に連れ出して、放り出せ！』

兵士が気絶した城之内を引きずって行く。それを見送り、白いアーマードライダーは別の方向へ去って行った。

「ヘキサちゃん、一旦出よう。動ける？」

「はい、だいぶラクになりましたから」

まずは絃汰が岩の間から外にずりりと這い出す。次に、ヘキサの体を引っ張り上げた。

ヘキサは楽になったとの申告通り、先ほどよりは元気そうに動いて絃汰に付いて来た。

兵士たちを追って着いたのは、何かの調査隊のキャンプのような場所だった。

紘汰とヘキサは近くの木の幹に隠れて様子を窺った。

兵士の一部が城之内を引きずって、大きな裂け目から出て行った。今まで見たものよりずっと大きなチャックだ。

「裂け目のことを、クラックって呼んでんのか――」

「裂け目？」

「アレ。あそこのジッパーみたいなのが、この「森」と俺たちの世界との出入口なんだ」

紘汰はいかにも怪しげな白いテントを見やる。大体こういう場合、ああいった屋根のある場所にデータが集められているものだ。

問題はどうかやってテントに怪しまれず入るか。

悩んでいると、ヘキサが紘汰の服の裾をくいくい引っ張った。

「――わたしが出ます。さわぎになってる間に葛葉さんはテントに忍び込んでください」

「え！？ ……とと。ダメだ。ヘキサちゃんみたいな子に、そんな危ないことさせられないっ」

声を潜めながらも、紘汰はしゃがんでヘキサの両の二の腕を掴んだ。人命救助より証拠隠滅を推奨する連中だ。ヘキサのような弱い少女を放り込んだら何をするか分かったものではない。

「オトナの絃汰さんならあぶないかもしれませんが。でも、わたし、コドモですから。向こうもきっと何も分からないと思うはずです」

幼い外見とは裏腹にしっかり考えていたことにぽかんとさせられる間に、ヘキサはにっこり笑んで、木の幹から一人出て行ってしまった。

「誰だ！」

「何だ？ 子供？」

向こう側の兵士が即座に気づき、何人かでヘキサを取り囲んで銃を向けた。

（本当に大丈夫なのかよ、ヘキサちゃん）

絃汰は木の幹の陰でハラハラと見守るしかなかった。

さすがのヘキサも、いかにも兵士らしい職の人々に銃を向けられ、実は体全体が小刻みに震えていた。だがここで折れれば光実の計画は頓挫する。それを支えに笑顔を保った。

「おい！ お前、どこから入った！ 何者だ！」

「え、わたし、ヘンな裂け目みたいなのがあって、そこに入ったらここにいたんですけど。ここ、どこですか？」

幸いにも声は震えていなかった。

兵士の一人がどこかと通信するような仕草をする。その間も包囲は解かれない。

その内、何かの指示が出たのか、兵士が二人来てヘキサの両腕を乱暴に掴み上げた。

「いた…っ、何するんですか！」

わざと大袈裟に痛がって見せれば、周りの人々の目がヘキサに向いた。注目が最高値に達したのを、ダンサーならではの触覚で確信した。

「っ、あなたたち、ユグドラシル・コーポレーションでしよう？ いいんですか？ わたしは呉島貴虎の身内です。わたしにヘンなことしたら、貴虎がだまっていますよ」

前もって考えていた台詞を告げると、兵士と、加えて白衣や防護服の人々もざわめき始めた。

（光兄さんの考えてた通りだった。貴兄さんの名前に反応するなら、貴兄さんは確実に関係者）

兵士の腕の力が緩んだが、ふりほどくことはしなかった。ヘキサはただ兵士の応対を待った。

そうしていると、ヘキサを掴んだ兵士に通信が入った。入ったと分かったのは、先と違って至近距離で捕まっていたからだ。

《その子の言ってることは本当だよ》

「プロフェッサー・凌馬——」

《その子は真正正銘、貴虎の身内だ。せっかくのクリスマスだ。彼女を案内してあげたまえ。彼女は「特別」だからね》

通信が切れたようだった。防護服や白衣の人々が急にヘキサに礼を取った。我が兄ながら恐ろしいネームバリューである。

白衣の一人がヘキサをテントに案内すると申し出たので、ヘキサはにこにこを保ちながら付いて行った。

しばらくは呆気にとられていた絃汰だが、はっとした。

どう言ったかまでは聞き取れなかったが、ヘキサが作ってくれたチャンスだ。

絃汰はもう一つのテントの裏から回り込み、テントに入り込んだ。騒ぎのおかげで誰もいなかったので易々入れた。

テントの中にはラックと棚が一つずつと、テーブルの上にPCとディスプレイが2台あった。画面は2×2分割され、「森」のあちこちを映し出している。

絃汰はまずラックのファイルから検めることにした。

手始めに「ドライバー装着者リスト」というファイルを取ってその場でめくった。

1ページ目は絃汰の顔写真付きパーソナルデータだった。名前や生年月日はもちろん、住所、学歴と職歴、行動経過観察。

家族構成では両親が無いことや、姉・晶のデータも付記されている。

絃汰は戦慄し、次々とページをめくった。

自分だけではない。戒斗、初瀬、城之内、凰蓮、咲——ベルトを持つ人間のデータが全員分、詳細に記されていた。

（あれ？ 全員分？）

ファイルをめくり直す。めくり直す。――いない。ベルトの持ち主で一人だけ、光実の名がない。

（もしかして、ユグドラシルは知らないのか？　アーマードライダー龍玄がミッチだって）

だとしたらこれは大きなアドバンテージだ。光実だけなら、ユグドラシル・コーポレーションに察知されることなく動き回れるということだ。

（ああ！　でもミッチだけにそんな危ねえ役回りさせられねえし！　どーすりゃいいんだよ。俺、ミッチみてえに頭よくねえから分かんねえよ）

紘汰はひとしきり悶えたが、諦めて別のファイルを開いた。

第32話 知ってしまったこと

タイトルは「市民への二次感染発生時の対応策」とあった。

もしかしたら現実世界に出たインベスの対処法かもしれないと、
紘汰は息せき切ってページをめくった。

「……の情報を操作し、インベスゲームを頻繁に行うビートライ
ダーズに市民の目を向けることで、第一次パニックの規模を緩和。
インベスによる事件はビートライダーズのインベスゲームが原因で
あると告知し……」

「――は？」

どういうことだ、と思い、半ば分かっている予感を確実にするた
め、紘汰はファイルを手近なテーブルに置いて読み直そうとした。

その時、ちょうどファイルを置いたテーブルにある画面に、見慣
れた紫翠しすいがよぎって。紘汰はファイルから顔を上げた。

「ミッチ……!」

画面の中には、龍玄と、彼に近づく白いアーマードライダーがい
た。

頭に血が上った。紘汰は止まれなかった。弟分で親友の光実のピ
ンチである。居ても立ってもいられなかった。すぐさまドライバー

を取り出し、変身しようとした。

テントを飛び出した紘汰の目の前に、無数のインベスが人を襲う光景が広がっていないければ。

「あ、葛葉さん！　——きゃっ」

「へキサちゃん！」

こちらに来ようとしたへキサを狙ってコウモリインベスが飛んできた。紘汰はとっさにへキサを庇って地面に押し倒した。

紘汰はすぐ起き上がり、ドライバーとオレンジの錠前を取り出した。

「変身！」

《オレンジアームズ！　花道・オン・ステージ！》

変身した鎧武は、人間を襲うインベスを優先して斬りつけた。そして大橙丸を揮いインベスを退けながら、人々をクラックのほうへ逃がした。

へキサは戦う鎧武の背中を見ながら、その場に立ち尽くしていた。

クラックの向こう側に避難するにしても鎧武を――紘汰一人をここに置いてはいけない。白衣の一人が「主任」に応援要請を入れていたが、その人物がすぐに駆けつけるという保証はない。

鎧武が装着するロックシールドをオレンジからイチゴに変えて戦い始めた。

（いつも咲に戦わせてばかりのわたし。今も葛葉さんに戦わせてる。何か助けにはなれないの？）

ヘキサは周りを見回し、襲撃の混乱で散らばったロックシールドに目を留めた。

「スイカ……！」

前に鎧武はスイカの錠前を使って反則級の強さを発揮した。

ヘキサは急いでスイカの錠前が入ったケースを拾い上げ、ケースから錠前を出した。

「葛葉さん！！ 使ってください！！」

スイカの錠前を鎧武へと投げる。鎧武は気づき、しかと錠前をキヤッチした。

『サンキュー、ヘキサちゃん！』

鎧武が錠前をイチゴからスイカに交換し、出現した大玉スイカに飛び乗った。大玉スイカはクラックを超えて転がり、ヨロイモードになって塔の上へと飛んで行った。

（祈ることくらいしかできないけど……がんばってください、葛葉さん）

クラックの向こう側で白衣の女性が慌てたようにヘキサを手招いている。安全圏に入れ、との意味だろう。一応は「呉島」の名を使って入ったから。

「森」に留まっても不自然なので、ヘキサはやむなくクラックを抜けて研究員らしき人々に囲まれるままにされた。

第33話 ヘルヘイムの森 光実&咲 ①

ロックビークルが停まったと思ったら、月花たちは「森」に入っていた。

『咲ちゃん、大丈夫？』

『め、目が回りました〜』

まさかバイクであそこまでツイストするとは思いませんでした。

頭をくわんくわんさせていると、龍玄が先に降りて月花に両手を差し出した。月花は龍玄の両手に手を預けて、ぴよこんと後部座席から降りた。

『ありがと、ミッチくん』

『どういたしまして』

月花は手を離すと、少しだけ走って行って、「森」を見回した。

確かに外観こそ森だが、何か得体の知れない感じがする。まるでこの「森」そのものが生きていて、葉の一枚一枚が月花たちを見張っている気がした。

『ここがロックシードの生る森？』

『そうだよ。そのの果物、もいでごらん』

月花は龍玄に言われるまま手近な果実をもいだ。すると果実は月花の手の中でロックシードへと形を変えた。クルミのロックシード。レベルはC+だ。

『うわっ。ほんとだあ。すごい！ ロックシードってこんなふうにできるんだあ』

ファンタジーな現象に月花は龍玄の目も忘れてはしゃいだ。ロックシードでなくとも、知った品物がどういう製造過程を経て出来るかを見ては、はしゃぎたくなる。だがすぐ、いけないいけない、と頭を横に振って、自分の両頬を叩いた。

『それで、ミッチくん。あたし、何すればいいの？』

『とにかく白いアーマードライダーが出てきてからだね。できるだけ僕らで注意を引きつけるんだ』

『オトリ？』

『…平たく言えばそう。ごめんね』

『いいよ。ヘキサとミッチくん二人ともが気にしてるんじゃ、あたしだって気になるし』

月花は龍玄に笑った——といっても、マスクがあるので表情は互いに分からないのだが。

その場に留まってもその「白いアーマードライダー」に会える確率は低いので、二人は適当な方向に歩き出した。

『前々から思ってたけど、咲ちゃんって本当に碧沙と仲がいいんだ』

ね』

『うん。マブダチっ!』

いえー、と月花はVサイン。こういう小さい子ならではの所作にはほんわか機能が付いている、とはダンススクールの講師の談だ。少しでも光実の癒しになればいいのだが。何となく、このゲーム中の光実はピリピリしているようだったから。

『今回のこと、碧沙が出るから咲ちゃんも出てくれたんでしょ?』

『んー、まあ、そうなるのかな』

言葉を濁しはしたが、碧沙が危険に飛び込むのであれば、咲も一緒に行きたいというのは、室井咲の偽らざる想いだ。

『本当は僕と碧沙とで何とかしようと思ったんだけど、あの子、一度決めたらテコでも変えないから……やっぱり、ごめん。碧沙が行くんなら君も来てくれるんじゃないかって、心の底で計算してた部分も確かにあった』

『ん、ごめんて言うなら、ゆるしてあげる。この話はこれでイッケンラクチャク』

龍玄はほんの少し肩を竦めた。苦笑したのかもしれない。顔が見えないのはやはり不便だ。

歩いている内に、彼らは開けた場所に出た。今まで歩いていた森とは異なり、普通の山の中の川のような場所だった。

『こんな場所もあるんだ——！』

龍玄がブドウ龍砲を構えて、月花より前に出た。

3メートルとない正面に立っているのは、件の白いアーマードライダーだった。

第34話 知りたくなかったこと

『あれがヘキサとミツチくんのお兄さん、かもしれない人——？』

龍玄は無言で肯き、ブドウ龍砲を構えた。月花もDFバトンを両手に構えて腰を落とした。

『——行くぞ』

機先を制したのは龍玄だった。

龍玄はブドウ龍砲を白いアーマードライダーの足元に撃つ。本人を狙っていないのでもちろん白いアーマードライダーにダメージはない。

『どこを狙っている』

一気に距離を詰めてきた白いアーマードライダーの無双セイバーを、月花がDFバトンを交差して受け止めた。

もちろん幼女と男ではパワーからして違うので、DFバトンの防御はすぐに解かれて胴を狙われる。月花は腕の筋肉を総動員し、再びDFバトンでガードした。あえて後ろに飛ばされることでダメージを逃がした。

龍玄がその隙を活かして、今度は本人に向けてブドウ龍砲を撃った。だが白いアーマードライダーは盾であっさり防いでしまった。

(コーボーイッタイなんてズルイ!)

月花は龍玄に迫る白いアーマードライダーにバトンを振り被り飛びかかった。

月花のDFバトンを白いアーマードライダーがいなす間、龍玄はまた距離を取ってブドウ龍砲を撃つ。

徐々に彼らは、近接を月花、遠距離を龍玄で引き受けるようになっていった。

『ええい——小賢しい!』

白いアーマードライダーは無双セイバーをチャージし、撃った。龍玄の手からブドウ龍砲を弾かれ、本人も被弾した。

『くあっ!』

『ミッチくん!!』

龍玄に気を取られた隙を突かれた。白いアーマードライダーに、無防備になった頭を盾で殴られた。

よろめいた月花に追い打ちをかけるように、1度、2度と腹を蹴られ、月花は地面に転がった。

『咲ちゃん…!』

はっとする。龍玄がこちらに助けに来ようとしている。いけない。

白いアーマードライダーは立ち上がった龍玄に盾を投げた。盾はブーメランのように跳んで龍玄に直撃した。龍玄は再び倒れた。

月花は傷を押して、倒れ悶える龍玄の傍らへ這って行った。
起き上がり、龍玄を両手で揺さぶる。

『ミッチ：くん…! ミッチくんッ!』

影が差した。月花は顔を上げた。すぐ後ろに――白いアーマードライダーが立っていた。

『――あ』

『喚くな。耳障りだ』

白いアーマードライダーが剣を振り被った。このままでは自分も光実も殺される。

(ころされないためには、どうすればいい?)

その瞬間、月花は、白いアーマードライダーのから空きの懐に夕

ツクルした。両手に持てるだけの、DFボムを持って。

『——やあああああああっっ！』

『何、だと！？』

月花と白いアーマードライダー、二人を巻き込んで、手榴弾の果実が爆発した。

「かっは——！」

「ぐは…っ！」

月花は地面に転がり、その拍子に変身が解けて咲に戻った。

「う、く……ゲホッ」

自爆戦法。それしか白いアーマードライダーを退ける方法が思いつかなかった。我ながら神懸かったタイミングで懐に潜り込めた。

咲は未発育の胸と腹を押さえた。思った以上のダメージだ。

だが無駄ではなかった。咲と同じく胸部にダメージを受けた白いアーマードライダーもまた、その変身が解けていた。

戦極ドライバーを装着したスーツ姿の男が、その場でよろめいている。

「——兄、さん——」

龍玄が呆然と呟いた声は、男には届かなかっただらしい。男は数歩下がり、背中を向けてこの場を走り去った。

龍玄は脱力していた。何から考えていいか分からなかった。

貴虎だった。

確かに、貴虎だった。光実の兄だった。

「ミッチ、くん、だいじょうぶ…?」

『咲ちゃん…!』

龍玄は胸を押さえながら、ふらふらと咲の横に行って膝を突いた。彼からすれば小さきに過ぎる体を抱き起こす。

『ごめん、こんなケガさせて。兄さんが…:本当にごめんっ』

「ん:げんきなら、よかった:」

咲は、痛くて堪らないはずなのに、にこりと龍玄に笑んだ。

(碧沙と同じ歳の子に気を遣わせてどうするんだっ)

龍玄は咲の小さな体を抱き上げた。

「ミ、ミッチくん?」

『兄さんを追いかけてよう。それできつと拠点に出るはず。手当ての道具もあるだろうから、そこでケガの手当てをしよう』

「…:ごめんね。めいわくかけて」

首を横に振る。迷惑などではない。むしろこのゲームに参加させた時点で、光実のほうが咲に迷惑をかけている。

『なるべく揺らさないように歩くつもりだけど、痛かったらすぐ言っ
てね』

歩き出しながら、ふと龍玄は思いつく。

咲の行動は何を根として現れるものだろうか。

普通の小学生女子が、彼女よりは大人の闘争の場に立ち、一時のパートナーを守るために自爆までするものだろうか。光実なら絶対にしない。

最近の子供はゲーム脳だから、と身も蓋もない片付け方もできるが、咲はそうではない気がする。幼いからといってこのゲームの底流のデッドオアアライブを感じ取れないとは思えない。

もしかすると彼女も、他人のためなら我が身を省みない紘汰のよ
うな性格かもしれない。

そう思うと、龍玄は何が何でも咲を助けてやりたい気持ちに駆
られた。

兄を尾けて辿り着いたのは、夜襲でも受けたかのような有様のキャンプだった。

龍玄は咲を抱えたまま、幹の陰からキャンプを覗く。無人のようだ。

奥にある大きいクラックから見られないよう、龍玄は木の陰から陰を移動し、潰れたテントの一つに潜り込んだ。

『気分はどう？ 咲ちゃん。痛む？』

「ん…さっきよりマシ、かな」

龍玄はテントの崩落でもちようど潰れてなかった棚を開け、救急箱なり何なり置いていないか調べてみた。するとお誂え向きに、小さな救急医療セットを見つけられた。

光実は一度変身を解いて、医療セットを取り出した。中身は包帯や消毒液、湿布とソーイングセットが入っている。光実はその中からありったけの湿布を出した。

「骨や内臓にダメージがあったら僕にも手が出せないから、とりあえず痛み止めにしかならないけど」

鎮痛全般に効く錠剤を咲に渡し、光実は、トレーナーをめくった咲の肌に湿布を貼っていった。

下腹から鳩尾にかけて湿布を張り終わり、あとは胸部というところ、咲がトレーナーをめくる手を止めた。

「あ、あとは自分でやる、から」

「まだ痛いんでしょう？ 遠慮しないでいいんだよ」

「…よう…：けてない、の」

咲は耳まで赤くなって顔を逸らした。その顔は11歳とは思えないほど色めいて。

「今日…：ブラ、着けてないの」

「…あ…：ご、ごめんっ！」

光実は急いで咲に湿布を渡し、体ごと後ろを向いた。心なしか光実も暑くなってきた。冬なのに。

（碧沙も同い年だけど、その手の事情って聞いたことないな。ああでも知ってたらさすがに兄でもヤバイか。そういえばその辺、あの子どうしてたんだろう。まさか一人で買いに行ったりさせちゃったのかな。だったら可哀想なことしたなあもう！）

ただ背中を向けているだけでも居た堪れず、光実は立ち上がって倒れたテント周りの散策をすることにした。

第36話 貴虎の泣き所

倒れたテントの一つを回り込むと、光実の足先を固い物が掠めた。見下ろす。ガラスの立方体に詰められたロックシードが地面に散乱していた。

(そうだ、ランキング！ ここで負けて帰ったら舞さんに怒られる)

見回す。ロックシードはあちこちに落ちている。中にはアタッシユケース一箱にぎっしり詰まっているものもある。

それらの光景から、光実は閃いた。

.....

.....

...

貴虎は腹を抱えるようにして、ベースキャンプを目指して「森」を歩いていった。

(あの小さなアーマードライダー、碧沙と同じくらいの年頃の娘だった。今はあんな子供までカラーギャングの真似事をするものなのか。しかしあの思いきりの良さ、下手をすると内臓を持って行かれ

るところだった)

別に戦闘狂でもないのに、あんな少女に負けたことはしばらく忌まわしい記憶として忘れられそうもない。

やがてベースキャンプが見えてきた。無人だ。

避難が完了したからか、インベスに襲われたか――後者はあってほしくない貴虎だった。

小さなアーマードライダーから食らったダメージでずくずくと腹は未だ熱を持っている。だが、部下の前では毅然とした上司であらねばならない。

貴虎は精神力だけで痛みを無視し、前屈みだった背中をまっすぐに戻し――クラックを抜けた。

「呉島……主任？」

調査班の数名が訝しんだ。インベスがいない状況、開け放たれたタワー外へのシャフト。これらが示す答えは忌々しくも一つきり。

貴虎は頭上を見上げて奥歯を噛みしめた。

(まさかクズに部下を救われるとはな――！)

再び部下のほうを見やった。そして貴虎は、決してこんな場所で顔を合わせてはならない相手がそこにいることに気づいて、愕然とした。

調査班に守られるように、呉島碧沙が肩身狭そうに立っていた。

「兄さんっ！」

碧沙は貴虎を認めるなり、出てきて貴虎に抱きついた。衝撃に傷の痛みが戻った。

「ご、ごめんなさい。ケガしてたの？ イタイ？」

「へい、き、だ。それより、どういふことだ。どうしてお前がここにいる」

「貴兄さんがあぶないことをしてるんじゃないかって光兄さんが言ったの」

「光実が？」

「貴兄さんと同じ甘い香りがあつた。"森"でもした。"森"で貴兄さんに何かあったら思って思ったら、わたし、いてもたってもいられなくて。ビートライダーズのゲームの時、こっそりあの森に入ったの……ごめんなさい、貴兄さん」

碧沙はさめざめと泣き出した。さすがの呉島貴虎も妹の涙には怒れない。

貴虎は、しゃくり上げる碧沙の頭を、家出するように撫でてやった。尋ねたいことは山ほどあるが、今は忘れることにした。

「……分かった。泣くな。終わったら家まで送ってやるから」

碧沙はぱっと顔を輝かせた。

——自分も大概、これと光実には弱い。

第37話 ライダーズ・レジスタンス

「今、一番大事なものは、俺たちがインベスと手を切ることだと思うんだ」

チーム鎧武のガレージ。紘汰は拳を揮って熱弁した。

「インベスゲームの裏にそんな狙いがあったなんて……」

舞はもちろん、リカとチャッキーとラットも青ざめている。

——紘汰は先日、ヘルヘイムと呼ばれる森で知った事柄を、仲間に掻い摘んで話した。

光実のアドバイスもあったので、あくまで掻い摘んで、だ。重要なのは、自分たちビートライダーズ全てが大人の都合で利用されようとしているという部分なのだから、そこを強調して伝えた。

「このままだと、世間はインベスが起こした事件を全部、僕たちビートライダーズのせいだと思ひ込む。僕らがロックシードを使ったら、街の人たちに疑われる一方だよ。誰もステージに来てくれなくなる」

「その前に俺たちのほうでインベスゲームをやめて、他のチームも

そうしてもらえるように説得したいんだ。そのくらいしないと、きっと信じてもらえない」

完全に信じてもらうのは難しい。何せ自分たちは、社会からある種ドロップアウトした人間の集まりだ。そのマイナススタートを、ゲームをやめるといふ誠意で補うしかない。

「でもっ！ 実際あたしたちがゲームで使うインベスと、人を襲ったインベスは別物じゃないですか。あたしたち関係ないのに、そこまでしなきゃいけないんですか」

チャッキーが前に出て訴えた。後ろでリカとラットもうんうんと肯いている。

「誰もステージを観に来なくなったら、それこそおしまいだ。俺たちが踊る意味がなくなっちゃう。チャッキー、俺たちはダンサーだよな？」

「そう、ですけど……」

紘汰も、光実も舞も、チャッキーもリカもラットも、皆がダンサーだ。誰かに観てもらいたくて踊っている。楽しいのだと、みんなに伝えたくて踊り続けている。その前提は守り通さなければならぬ。

意図が伝わったらしく、3人は黙り込んだ。

「ダンサーなら、踊るための努力は惜しんじゃいけないと思う。今

はこうするのが、俺たちの踊る場所を守ることに繋がるって、俺は信じてる」

横で光実も肯いた。紘汰は舞たちを見据え、答えを待った。

「――紘汰とミッチがそこまで言うなら、きっとそういうことなんだよね」

「舞」

「舞さん……」

「分かった。あたしだって踊れなくなるのはイヤだもん。やろう。インベスゲームをやめてくれるように、他のチームを説得してみよう」

舞の賛同を皮切りに、残るメンバーも肯いてくれた。紘汰は光実と笑って顔を見合わせた。

第38話 光実の役得

光実がインベスゲームの秘密をチームに話そうと一大決心できたのは、実は妹のおかげだった。

最初にインベスゲームの裏の意図を聞いた光実は、このことは舞たちには伝えないでおこうとした。

だが、それを告げると、碧沙はきよとんと首を傾げた。

——「どうして？ 仲間なのに——」

話さないのはオカシイではないかと、どこまでも澄んだ瞳で見上げられて。

光実はそもそも認識が妹と前提から食い違っていたことに気づかされた。

それから光実は改めて考えた。

隠すのは何のためか？ チームのためだ。隠せばチームのためになるか？

ならない——と、答えを出した。事はビートライダーズ全員の行く末を左右するのだから。

そして、絃汰と話せる範囲を話し合って、舞たちに打ち明けるに至った。

（一度誰かを敵と定めて計画を始めた以上、勝ち負けははっきりさせなきゃいけない）

黒板に書いた図面——チーム名と、説得に応じたかを○×で示したそれを見上げる。

現時点では×しかない。これを○で埋め尽くした時、ビートライダーズはユグドラシル・コーポレーションに勝ったことになる。

秘密を話す上で、光実が考えたのは人海戦術だった。

秘密を知る人間の数が膨大なら、それはもはや秘密とは呼べない。その域にまで、インベスゲームの真相を知る人間を増やす。その上でシド辺りに告げれば貴虎、ひいてはユグドラシル・コーポレーションにも伝わるだろう。

増えた人数をもって、ユグドラシル側を牽制する。

もっとも簡単には行かない。まず他のチームが説得に応じようとしなかった。

（バロンは相変わらず聞く耳持たず。蒼天とPOPUPは碧沙たちが説得するって言ったけど、子供の言うことを聞くかは怪しいし、僕が行くことも考えないと。レイドワイルドはリーダーの初瀬が捕まらなくてまとまっていってというし、インヴィットはそもそもリーダーの城之内が不在で……）

「——ツチ、ミツチってば！」

「うわっ、はい！」

光実はようやく呼ばれたことに気づいてふり返った。

「ま、舞さんっ」

不覚だった。よりによって舞の呼び声に気づかないなど。

「お帰りなさい。今日はRED HOTでしたっけ」

「うん。もー、曾野村のバカが聞きやしないったら！ ——あ、外でチャッキー待たせてるから、すぐに出るんだけど」

様子見に帰ってきてくれただけでも嬉しい。さすがにストレートに過ぎるので言わないが。

「——ミツチ、疲れてる？」

「そんなことないですよ」

「うそ。目の下、クマ出来てる」

弁の立つ光実も、さすがに体に出る異変までは隠せない。光実は早々に降参した。

「……舞さんたちという時と、踊ってる時。それが、僕が“僕”でいられる大事な時間なんです。それを守るためだから、疲れくらいへっちゃらです」

「ミッチ……」

舞は痛ましげに目を伏せた。

光実はいさだけ悲しかった。舞にそんな顔をさせたいわけではないのに。光実はいつも空回ってしまう。

どうすれば舞の困り顔を解けるか悩んでいると、舞のほうが先に動いた。

舞はいつも腰に結んであるチームユニフォームのパーカーをほどき、光実の肩にかけたのだ。

「ここんとこ寒くなってきたでしょ。ここ、暖房の効き悪いから、あんまり棍詰めちゃだめだよ」

舞は光実ににこりと笑い、ガレージを出て行った。

（普通逆なんだけどな）

光実はいかーの袂を搔き寄せ、布地に擦り寄った。まだ彼女の体温が残っていた。

「あったかいなあ——」

第39話 デートinシャルモン

貴虎は妹を連れて「シャルモン」を訪れていた。

正面の席には、笑顔で、行儀作法は周囲の客負けに守って、フォンドアンショコラを食べ進める碧沙。

「ほんとおいしい……ココのケーキ、一度食べてみたかったの。うれしい。兄さん、大好き」

「――」

貴虎は答えずコーヒーに口をつける。――満更でもなかったからだとは、決して認めないのが呉島貴虎である。

――今回、一応は仕事にカテゴライズされる場面に妹を連れてきたのは、妹がヘルヘイムについて多くのことを知ってしまったからだ（これについてはベースキャンプの案内を許可した凌馬を、戦極ドライバー片手に脅しておいた）。

本来なら先に社会人になった光実に真実を教え、さらに後、全て終わった後に碧沙に顛末を語る予定だったのに。

今までのように知らぬ存ぜぬを通せないほどに碧沙は秘密を見てしまった。さらに。

「貴兄さんが教えてくれないなら、また自分で「森」へ調べに行く

わ”

……教えないことで妹を危険に曝すくらいなら、もうこの「仕事」についてはオープンで行こう、と貴虎はその時、腹を括ったのだ。そして、遠くない内に光実にも話そう、とも考えた。

「今度は光兄さんも一緒に、3人で来ましょうよ」

碧沙の誘いに、貴虎はそれが叶った時のことを想像してみた。

光実と碧沙を正面にして、「シャルモン」のケーキを「おいしい」と言い笑い合う弟妹を眺めつつ、自分はコーヒーを楽しむ――

「――そうだな。悪くない」

そんなありふれた兄妹団欒のためにも、余情はここで断ち切って、すべきことをしなければならぬ。

全てはより良い未来のため。その未来に生きる弟と妹のためだ。

貴虎は従業員を呼び止め、ケーキを作ったパティシエ――今日ここに来た目的の人物を呼び出させた。

「お待ちせいたしました。ワテクシがこちらのチーフパティシエですの。お味のほうはいかがでした？」

「さすがはルレ・デ・セーレに籍を置く菓子職人。見事なお手前だ」

ヘル Heim であつたこの男に関する諸々の不快は心の奥底に沈め、
ポーカーフェイスで美辞麗句を並べる。

「ホホホ。光栄ですわ」

「だが今日はパティシエではなく、歴戦の傭兵としての貴方に話を
聞いていただきたい。風蓮・ピエール・アルフォンゾ軍曹」

貴虎はテーブルに名刺を置いて風蓮に差し出した。風蓮の、貴虎
を見る目が鋭いものになつた。歴戦の傭兵、という下調べの内容
は真実だったらしい。

「――P a r d o n?」

ぱく。碧沙がちょうどケーキの最後の一口を食べ終えた。

第40話 小さな成果

コドモたちは今日もダンススクールの教室に続く階段をどやどや登る。

「ヘキサ、なんかキゲンいいなあ。イイことあった？」

「じ、じつは昨日、お兄さんとお茶しにいったの。兄さんいそがしくって、こんなことめったにないから」

ヘキサの言う「お兄さん」の片割れに危うく殺されかけた咲だが、ヘキサが上機嫌であれば話は別なのだ。

（ちょっとじえくらしく来ないわけじゃないけど。まあそんな女の子がよろこびそうなことすんのもってミツチくんのほうっぽいからいか）

「こんにちは」

咲たちリトルスターマインは、いつものガラス戸を開けて教室に入った。

入った途端、咲はいつも通りのはずの教室に違和感を抱いた。

「なんか、人少くない？」

「てか——いなくね？」

ナッツとモン太が、咲が抱いた違和感をそのまま口にした。

そう、生徒がいない。いつも咲たちはレッスン開始ぎりぎりにダンススクールに来る。だからリトルスターマイン以外の生徒がほぼ全員揃っているはずなのだ。

今日は事情があって早く来たが、それでも、このがらんとした教室はどうしたことか。

「お、よーやく来たか。へいらっしやい」

「センサー！」

ガラス戸に立つのはダンススクールの講師の女性だった。

「どうも閑古鳥が鳴いてらあな。今日はあんただけで練習だ」

「あの、センサー。もしかして生徒が来なくなったのって、あたしたちのせい……？」

ニュースで取り沙汰される、インベス事件負傷者の奇病。それを受けての、ビートライダーズへのバッシング。

今、チーム鎧武やチームバロンがどう過ごしているかは知らないが、ビートライダーズであれば一緒にたに攻撃的だ。ビートライダーズでインベスゲームをしなかったチームなど存在しないのだから。

なので念のため今日のステージを臨時休業して、直接ダンススク

ールに来たのだ。

「んあ？ まあ保護者の連絡は来たわな。ビートライダーズがいる教室に通わせてウチの子に何かあったらどうすんだ的な」

「あ……」

今のは胸に突き刺さった。自分の目尻に涙が込み上げるのが分かる。

咲は急いで目を袖でこすった。泣いてはいけない。一番迷惑しているのは生徒が離れた講師なのだ。

「なあに辛気臭いツラしてんだい。ガキの頃からそんなじゃこの先の人生楽しくないぞ？」

講師は咲の背中を豪快に叩いた。咲は軽く咳き込んだ。

「で、でも……あたしたち6人だけになっちゃって……スクールは」

「6人だけ？ 馬鹿言うんじゃないよ。6人もいるだろうが」

「――あ」

「知ってるぞー。あんたら、あのインベスゲームとかいうの、やめるように言って回ってんだって？ 悪いことを率先してやめられるのはいい子の証拠だ」

ニカッと笑った講師は、咲と、隣にいたヘキサの頭を両手でいっぺんにわしゃわしゃした。

「人数少ないからビシバシしごくぞー。ちゃんと付いて来なよ」

『ハイ!!!』

分かってくれた人がいる。それだけで心強くて、咲たちは顔を合
わせて明るく返事をした。

第41話 トモダチだから

「咲。ちょっといい?」

休憩に入るなり、ヘキサが咲に声をかけた。

答えると、ふたりきりで話したいと言われたので、出入口のガラ
ス戸の外に出た。建物の中とはいえ、階段は空気が冷たい。

「なに?」

「昨日のことなんだけど。上の兄さんが「シャルモン」に行ったの。
あのパティシエの人、カンユウしに」

「パティシエの人って……ブラーボの人? カンユウって?」

「兄さん以外のヒケンシャ……つまり咲たちのミガラを押さえるつ
もりなのよ、兄さんは。貴兄さんがよくせつ出向いてなんて。本
気、なんだと思う」

咲は光実と共に一度あのライダーと戦った。

紘汰が怯えるのも分かった、光実が慎重になるのも分かった。そ
れだけ白いアーマードライダーは強く、容赦がなかった。

咲がとっさに特攻しなければ自分も光実もあの森の屍だったかも
しれない。考えて、咲は知らず両肩を抱いた。

「ホンキであたしたちアーマードライダーをつぶしに来る——」
「咲……」

クリスマスゲームが終わってから、咲とヘキサ、それに紘汰と光実は多くの情報を共有した。

詰まる所、彼女たちは知りすぎた。

知らない所でファイリングされ管理されていた事実、ヘルヘイムの森、ユグドラシル・コーポレーションの暗躍――

正直、小学生には重すぎる話だから、咲とヘキサは降りていいと紘汰・光実からは言われた。

だが、咲たちは降りる気などみじんもなかった。こうも管理物扱いされては。咲にも小さいながらプライドがある。

「ヘキサ。いざって時は、あたしのことなんて知らないってお兄さんに言わなきゃダメよ。あの人、コドモ相手でも手かげんしなさそうだから」

「咲！ 何てこと言うの！」

ヘキサは咲の手を両手で掴んだ。

「貴虎兄さんが咲を傷つけるっていうなら、わたしは迷わず兄さんの前でユグドラシル・タワーからとびおりて死んでやるわ」

「ヘキサっ！！」

「本気よ！！ わたしだって、戦えなくても、命をかけるくらいはできるんだからっ……おねがいよ……無関係なフリなんて、フリでもつらいよお……！！」

泣き出したヘキサを、咲は恐々と抱き締めた。ヘキサは咲の肩に頭を押しつけてしゃくり上げた。

「そう、だね。あたしはヘキサの親友で、ヘキサはあたしの親友、だもんね。死ぬまでずっとトモダチだもんね」

「そう、よ。だから、わたし、ウソでも咲のこと『知らない』なんて言わない。それで貴兄さんがどんなに怒ったって」

「うん。ヘキサ、大好き」

「わたしも咲、大好きよ」

指を絡めて手を繋ぎ合い、二人の少女は向かい合わせに泣き笑いの顔を向け合った。

第42話 咲と初瀬 ①

初瀬亮二は追い詰められていた。

街のどこに行っても上級インベスがいる。初瀬を威嚇する。それらのインベスから初瀬は逃げ続けていた。戦極ドライバーを失った彼には抗するすべがなかった。

——そのインベスが本当にそこにいるモノだったかは、彼には与り知れぬことである。

(どうしてこうなったんだっけ?)

歩道橋の前まで来た初瀬は、膝に両手を突いて荒く呼吸する。

戦極ドライバーが壊れたせいで、チームバロンとのインベスゲームには負け、ステージを奪われ、チームの仲間には見放されて。

ダンスも仲間も居場所も失った彼が最後に頼ったのは力だった。

だが、「ドルーパーズ」に行っても錠前ディレイラーが来なくなっただけで、新しいロックシードを手に入れる術さえ失った。

初瀬亮二は追い詰められていた。

顔を上げる——正面の街路樹の陰から、白いアーマードライダーが見ている。

「うわああッ！」

歩道橋を駆け上がりとした——その歩道橋の上にアーマードライダーがいた。

「ああああッッ！」

初瀬はもつれた足でとにかく近くの高架下に駆け込んだ。

体感温度の低く、人のいない高架下は、初瀬の頭を冷やすには充分だった。

初瀬は鉄柱に背中を預けたままその場に座り込み、頭を抱え込んだ。

（ベルトがねえ、力がねえ俺じゃ、会った途端にやられる）

もはや自分の命すら自分のものではない。どうやって生きていいのかさえ見失いかけた時だった。

「——だいじょうぶ？」

頭に触れる小さな他人の体温。"敵"ではない。実家の弟妹が触

れた時と同じ感覚だった。初瀬は勢いよく体を起こした。

そこにいたのは、小さなビートルライダーズのリーダー、室井咲だった。

「えっと、だいじょうぶ？」

ダンススクールの帰り。重い報告で重くなった気分を変えたくて寄り道などしてみたら、レイドワイルドの初瀬亮二が走っている場面に行き会った。

追いかけると、初瀬はまるで怯えているようだったので、頭をなでてみた。前にヘキサがこうしてくれたことがあったのだ。

「こわいことがあったの？ だれかにいじめられた？」

「怖い、こと……？」

眩くや、初瀬は突然後ずさった。鉄柱に背中をぶつけたのに気にならないようだ。咲ではなく、咲の後ろを見ている。

咲はふり返ったが、高架下には誰もいない。

「ねえ、ほんとにどうしたの？ なにが」

近寄って再び手を伸べる。すると初瀬が急に咲の薄い両肩を掴ん

だ。

「何で…俺が怯えなきゃならねんだよ、あんな奴らに…！」

掴まれた肩は痛い。だが咲には振り解けなかった。体格的な理由ももちろんだが、まるで初瀬が泣き出しそうな幼児に見えたのだ。

「力さえ…もう一度あの力さえあれば…！」

「…初瀬、くん」

そこで初瀬は咲を突き飛ばした。咲が尻餅を突いた間に、初瀬は立ち上がり、ふらふらと危うい足取りで歩き出した。

「っ、待って。初瀬くん、初瀬くんっ」

初瀬はまるで咲などいないように歩いていく。咲はそれでも初瀬の後を追った。室井咲は無視されたくらいではめげないのだ。

第43話 咲と初瀬 ②

咲は初瀬を追ってずいぶん長い距離を歩いた。

大人の男と子供の咲では歩幅や体力が違いすぎる。足はすでにマラソン大会直後のような有様。

何度も膝に手を突いて荒い息をし、置いて行かれそうになりながら、それでも咲は初瀬を追いかけた。

彼を放っておくのも、彼に放っておかれるのも、我慢ならなかった。

「ねえ、初瀬くん。何でこんなところ来たの？ 何もないよ？」

「何、も……」

初瀬はまた怪しい足取りで工場の中に入っていく。ちょうど人がさっき入れ違いに出て行ったばかりのようだから、工場内に入っても人はいなかった。

「あっ」

咲は気づいた。工場内のカーゴ車に、ヘルヘイムの果実が絡みつき、車体を覆っていた。

「これ……あの「森」に生ってたヤツだよな」

「たぶんだけど、ここでヘルヘイムにつながる裂け目がひらいたん

だと思う。裂け目の近くにこの植物が生るって、紘汰くん言ったから——」

果実に触れることはしない。戦極ドライバーを持つ咲が触れたら、果実はロックシードになってしまう。インベスゲーム中止を訴える自分が新しいロックシードを持っているは、他のチームに示しがない。

何となしに蔦を軽くなぞっていた咲の手を、横から初瀬が掴んだ。

「は、初瀬、くん」

「……これ、ロックシードになんだろ？」

「そう、だけど」

「じゃあ取ってくれよ。俺に。俺にはロックシードが必要なんだ。力が必要なんだよ」

「だ、だめだよ。チカラなら——戦極ドライバーがあるじゃない」
「壊れた」

「え」

「壊れたちまったんだよ。俺のベルト。だからインベスが要るんだ。インベスが追っかけてくるから。あのブラーボとかいう奴も、白いアーマードライダーも、俺を狙ってやがる。ベルトがないんだよ俺は。インベスがいねえとやられちまうんだよ」

しゃべる内に初瀬の目の焦点が咲から外れていき、手を握る力が強くなっていく。

「おかしいだろ。俺だけあんな奴らにビクついて暮らすなんて。も

う一度あの力さえあれば俺はたすかるんだ。たすかるんだよ。だから、なあ、たすけるよ、おれのこと。なあ」

もう片方の手が咲に伸びる。殴られるのかと思って、咲はとっさに歯を噛みしめた。だが。

「たすけてくれよお……！」

初瀬は何もせず、咲の肩を掴んでその場に頽れた。

（オトナがこわがる所、はじめて見た。オトナにもこわいものがあるんだ）

咲はそっと、項垂れた初瀬の頭に手を置いた。初瀬の体はびくんと跳ねたが、振り解かれることはなかった。

咲はそのまま初瀬の頭を抱き込んだ。彼がひどく哀れに思えた。

『グオオオオ！！』

「！ インベス……！」

工場の外からセイリュウインベスが突っ込んで来ている。咲は初瀬を離して背に庇い、ベルトを装着した。

「初瀬くん、はなれてて。——変身！」

第44話 新たな脅威

「初瀬くん、はなれて。——変身！」

《ドラゴンフルーツアームズ！ Bomb Voyage！》

セイリュウインベスはこちらに攻撃してこず、跳び上がって上階の足場を逃げて行く。

月花も上階へ跳び上がり、セイリュウインベスを追って走った。

『待ちなさい！ そこお！』

D F バトンの片方をセイリュウインベスに投げつける。当たった。本当はD F ボムを投げたかったが、爆発で下にいる初瀬がケガをしては元も子もない。

残ったバトンで月花はセイリュウインベスを打ちにかかった。

『たッ、はっ、たりゃあ！！』

月花はセイリュウインベスを殴り、バトンで突く。このまま外へ吹き飛ばして外で爆破できれば——月花が勝算を見出した時だった。

横ざまに金色の矢が飛んできてセイリュウインベスに当たり、爆発した。

至近距離にいた月花も爆発の余波で近くの壁に叩きつけられた。頭を振って顔を上げる。そこにいたのは――

（白いアーマードライダー……ヘキサとミッチくんのお兄さん！）

月花はとっさに上階から飛び降り、カーゴ車の陰に隠れた。隠れてしまうくらいには、まだ体にあの日の恐怖が染みついていた。

（ヘキサの話ふつーに聞けたからヘイキだと思ったけど、いざホンモノを前にすると、ダメだ！）

見上げた白いアーマードライダーは、ヘルヘイムの森で戦った時と異なるバトルスーツに身を包み、手にはアーチェリーの弓を持っていた。

白いアーマードライダーがセイリュウインベスを圧倒する。前のように剣で斬るでもなく盾を投げるでもなく、弓から発するソニックアローだけで。

やがてセイリュウインベスは、その暴威的な力に敗れ、月花が隠れているカーゴ車の荷台に落ちた。

追って白いアーマードライダーが上から飛び降りてきた。

まずい。月花は急いで、初瀬がいる元の位置まで下がった。

『初瀬くん、頭下げてっ』

戸惑う初瀬に体を押しつけるようにして月花は初瀬を隠す。

「……あいつのせいで俺は……」

セイリュウインベスはカーゴ車を覆っていた蔦から果実をねじり取り、果実を食らった。するとセイリュウインベスが工場の屋根ほど大きなドラゴンのようなものに変異した。

ドラゴンインベスが工場内を縦横無尽に暴れ回る。しかし白いアーマードライダーは意に介したふうもなく、上手く資材から資材へ飛び移って攻撃を避け、ソニックアローを何本もドラゴンインベスに打ち込んだ。

『終わりだ』

白いアーマードライダーが、咲たちの物より透明なロックシードを外して弓にロックする。

身震いしそうなほどの膨大なエネルギーが発射口に集まっていく。

雌雄を決する一矢が放たれた。

ドラゴンインベスはソニックアローのエネルギー波でバラバラになり、爆散した。

第45話 魅惑の果実

（何て強さなの。ヘルヘイムの時でもあんなに強かったのに、今はそれ以上じゃない）

咲が怖いっていると、工場内に人が駆け込んできた。

危ないから出て、と言うために陰から出て、月花はそれが葛葉紘汰と駆紋戒斗であると気づいた。

「咲ちゃん!?!」

『紘汰くんっ』

月花は反射的に紘汰と戒斗の前へ駆け寄った。

「何で咲ちゃんがここに……」

『初瀬くんといっしょに来たの。なんか初瀬くん、ヘンだったから』
「初瀬?」

すぐに和やかに話し合っている場合ではなくなった。白いアイマードライダーが月花たちをふり返ったのだ。

『次はお前たちだ』

「! 戒斗!」

紘汰が戒斗はそれぞれロックシードを出して、鎧武とバロンに変身した。

月花は急いで鎧武、バロンと共に白いアーマードライダーと対峙した。

——この時、月花は気づいていなかった。自分が重大なミスをしたことに。

知り合いの紘汰たちが来たからといって、この時、初瀬のそばから離れてはいけなかった——後に室井咲はそれを悔恨と共に思い知る。

まるで幽鬼のような足取りで、資材の陰から出てきた初瀬は、葛から果実をもぎ取った。そして。

「もう一度俺に力をッ！」

初瀬は果実を貪り食った。

『やだっ、初瀬くん！？ なに食べてるの！』

『おい——吐き出せ！』

月花は初瀬に駆け寄ろうとして——足を途中で止めた。

初瀬を侵蝕するようにツタが生え、初瀬に絡みついた。そしてツタは食い尽くした、といわんばかりに散って。

中から、ヘキジャインベスが現れた。

前後の繋がりからして、初瀬が変容したモノとしか考えられなかった。

『え？ なに……なんで？』

『手遅れか——』

ふり返る。白いアーマードライダーがヘキジャインベスに弓の狙いを定めている。

『やめろ！』

鎧武が白いアーマードライダーの腕を掴んで矢の狙いを逸らさせた。すぐ横をソニックアローが飛んで、月花はつい身を竦めた。

『何をする』

『あんたこそっ。そんな武器で撃ったら初瀬が死んじまうだろ！』

『当然だ。殺さないでどうする』

『何言ってるんだ！ 人間だぞっ』

白いアーマードライダーが鎧武に掴まれた腕を振り解き、その勢いで鎧武を突き飛ばした。

『あれはもう人間じゃない。人を襲う怪物だ』

『決めつけんなよ！ あいつはまだ何もしてねえだろ！』

水掛け論を終わらせたのは鎧武でも白いアーマードライダーでもなく——バロンだった。

バロンがバナスピアで斬りかかったのを、白いアーマードライダー

「は弓で防ぐ。」

『こいつには俺も借りがある。ここは任せろっ』

『――分かった！』

鎧武が工場の外へ駆け出す。

月花はバロンと工場の外を見比べ、鎧武を追うことを決めて走り出した。

『ありがとね！』

後ろでバロンと白いアーマードライダーの戦いの音がする。だが月花はふり返らなかった。

第46話 悲劇へ向けて

月花が駆けつけた時、絃汰は変身を解いていた。

絃汰はヘキジャインベス——初瀬を説得しようとしている。そんな姿を見せられては、月花も攻撃をためらわざるをえない。

「な、初瀬。お前は今、病気だ。一緒に病院へ行こう」

『グウウ——』

「初瀬ッ！！」

絃汰の叫びが届いたのか。ヘキジャインベスは頭を抱えて悶え、近くの資材にぶつかって倒れた拍子に初瀬に戻った。

固唾を呑んで見守っていた月花は、胸を撫で下ろした。

絃汰も笑顔になり、蹲る初瀬に手を伸べる。

「な、病院へ行こう。きっと治してもらえる」

絃汰の手が初瀬の肩に触れた瞬間、初瀬は絃汰の首を掴み上げた。初瀬の右手は鉤爪化していた。初瀬はその爪で絃汰を斬りつけた。

「やめて！」

月花は初瀬の腰に飛びついて、初瀬を絃汰から引き剥がした。月花と初瀬はもつれあって砂利の上に倒れた。

「フウ！ ヴウウ！」

絃汰が来て、月花と一緒に初瀬を押さえ込む。傍目にはさながら暴れる患者を押さえつける看護師のような光景だっただろう。

だが、二人がかりで押さえようとしたのがまずかった。初瀬は再びヘキジャインベスに変容し、月花も絃汰も振り解いて逃げ出してしまった。

咲は倒れたままで急いで変身を解いて、スマートフォンを出し、逃げて行くヘキジャインベスの写真を撮った。

「絃汰くん、だいじょうぶ！？」

咲は倒れた絃汰に駆け寄って横にしゃがんだ。

「…はせ、が…」

「だいじょうぶ。みんなに探してもらおうよう、たのむから」

先ほど撮ったヘキジャインベスの写メを、リトルスターマインのチームメイト全員に一齐送信すればいい。事情がややこしいので、「このインベスを見かけたら、しらせて。あとにげて」とでも文を添えて。

「そんな危ないこと…」

「今は紘汰くんのがあぶないよ！ 病院に行こう？ ケガ、治してもらいに行こ？ ね？」

紘汰は弱々しく首を横に振った。

「病院は、だめだ。俺たちは、ビートルライダーズだ。行ってもきつと……」

「あ……」

インベス事件の奇病で病院はどこもパンク状態。そして市民のバッシングはビートルライダーズに向かっている。そんな中で病院に行つては、患者の身内に何をされるか分からない。世間が擁護派と反発派に割れようが、病院はほとんど反発派だろう。

「俺のことより：初瀬を、探さねえと……」

紘汰は立ち上がる。肩を貸したくとも、小学生の咲では身長が届かない。自分がコドモであることをこんなにも許せないと思ったのは初めてだった。

歯を食い縛って立ち上がり、スマートホンのメール画面を立ち上げる。インベス探しを頼むメールをチームメイトに送信してから、咲は前をふらつきながらも行く紘汰を追いかけた。

第47話 あなたはどこに？

紘汰と一緒に一晩かけて街を探したが、初瀬の姿はどこにもなかった。

夜になってから紘汰に、さすがに帰ったほうがいいと言われたが、咲は譲らなかつた。咲がいない間に紘汰だけが初瀬を見つけて、最悪の事態になることを恐れたからだ。

紘汰も傷の痛みで判断力が鈍っていたせいか、途中から何も言わなくなった。

もっとも咲にできたことなど、紘汰が立ち上がる時に肩を貸した程度だったが。

補導されなかったのが不思議なくらいの一夜だった。

紘汰はガレージのチームメイトと話しに行っている。咲はチーム鎧武のガレージの外で、家に電話していた。

「ごめん、お母さん。トモダチ……探してたの。———。ケーサツじゃだめ。あたしたちが見つけてあげないと。———。あたしが行かなきゃいけないの！ いなくなったの、あたしのせい、だから。ごめん、だから昨日帰れな———今日も帰れない。どうして

も今はやめちゃだめなの！　——。もういいよ！　お母さんのばか！」

咲は電話の向こうの声を無視してOFFボタンをタッチした。心臓が飛び出しそうだ。堪らずしゃがんで膝に顔をうずめた。

「初瀬くん……もうっ、どこにいるのお……」

彼がどこかで人を襲っているかもしれない。あるいはまた人間に戻って、ビートライダーズバッシングの的にされているかもしれない。今度は心配で胸が潰れそうだ。

（あたしがあの時、初瀬くんのそばを離れちゃったから。近くにいれば止められたのに！）

後悔に暮れていると、ガレージのドアが開いて絃汰が降りてきた。咲は立ち上がって絃汰に駆け寄った。

「どうだった？」

「だめだ……みんな知らねえって。ミッチも来てなかった」

「そ、か……あたしのほうも、返事、来てない」

二人の間に気まずい沈黙が流れる。

「——ね、絃汰くん。もし初瀬くんが見つかったら、どうするの」

見上げた絃汰は、爪が食い込まないか心配になるほど強く拳を握

りしめていた。

「あいつにもし、人の心が残ってるなら、早くこんなことはやめさせてやりてえ。けど、このまま人を襲い続けるっていうなら……：……それはもう初瀬じゃねえ——！」

血を吐くような、喉を裂くような、叫びだった。

咲は堪らず、絃汰の拳を両手で掴んだ。

「それでも一度は絃汰くんの声に答えたよ。まだ間に合う。初瀬くんを助けてあげられるの、きっと絃汰くんだけだよ」

絃汰は一瞬だけ泣きそうな顔で咲を見下ろし、咲の手を握り返した。痛いくらい、強く。

その時だった。咲のスマートフォンに着信が入ったのは。

第48話 どうしてもできない

咲のスマートフォンに着信が入った。液晶に映った名前はモン太。咲は急いで電話に出た。

「もしもし、モン太？」

《咲、咲！ 出た！ 見つけたぜ、写メのインベス！》

紘汰にも聞こえたらしい。咲は顔を上げ、紘汰と顔を見合わせた。

「モン太、今どこにいる？」

《公園。ほら、あれ、噴水の階段と池があるとこ！》

「わかった。あたしと紘汰くんで行くから、モン太はすぐそこからにげて」

《おうっ》

電話を切り、咲は紘汰を見上げる。肯き返してくれると思いきや、紘汰は硬い表情で拳を握っている。

「咲ちゃんはここで待っていてくれ。俺の仲間がガレージにいるから。舞に言えば待たせてもらえるはずだ」

「な、何で？ あたしもいっしょに」

「ダメだ！！」

声の限りに拒絶された。

涙が、咲の意思とは関係なく溜まって、零れた。
いつも明るく優しい紘汰に、拒絶、された。

「っ…ご、ごめん…でも、俺、咲ちゃんにはこんなことしてほしくないんだ…」

紘汰が咲の頬を両手で包み、親指で目尻の涙を拭う。何て温かい指だろう。

「あ、たし…でも、あたしい…ヒツぐ…うえっ」

「ほんと、ごめん。俺、一人でちゃんとやるから。だから——頼むよ」

咲は泣いた。なのに紘汰は、咲が落ち着くまでずっと頬から手を離さないでくれた。

咲は、紘汰が頬に添える両手に、自分の両手を重ねた。

「っぐ…わか、た。紘汰くん…おねがい、する。でも、あたしも行く。何もしないから、見届け、させて」

「咲ちゃん」

「あたし、も、アーマードライダー、だから。ベルトの持ち主、だから」

「——分かった」

………

………

…

咲と紘汰は目撃情報が入った公園へ急行した。

そこには暴れるヘキジャインベスと逃げ惑う人々がいた。

紘汰がすぐさまヘキジャインベスに体当たりし、咲は襲われかけた親子に手を貸し、逃げるように伝えた。

やがて公園には紘汰と咲、そしてヘキジャインベスしかいなかった。

紘汰が咲を顧みた。咲は肯き、公園の階段の上に避難した。

紘汰が戦極ドライバーとオレンジの錠前を出して、鎧武に変身した。

鎧武は大橙丸を手に、ヘキジャインベスに斬りかかった。だが途中から、何故か鎧武は大橙丸を投げ捨て、素手でヘキジャインベスに殴りかかった。

『おお——ッ！ おおおおおッ！』

まるで泣いているような咆哮。咲はとっさに顔を横に逸らして——そうした自分に対し、愕然とした。

（見届けさせて、なんてえらそうなこと言って。けっきょく怖かっ

ただけだ、あたし)

事態に置いて行かれるのが怖かった。インベスになった初瀬を放って後戻りすることで損なわれる何かがあるということだけは予感していたから。

逃げ出すことも進むことも怖くて、こうして紘汰に押しつけて立ち尽くしているだけ。

咲はしゃくり上げる。自分の情けなさ、その役目を負ってくれた紘汰への罪の念で。

何度も袖で目元をこすり、せめてちゃんと紘汰と初瀬の結果を目に焼きつけようとした。

鎧武が水路の階段でヘキジャインベスを追い詰める。無双セイバーを構える。トドメの構えだ。咲は祈るように手を組み合わせた。

だが、鎧武は無双セイバーを放り捨て、その場に膝を屈した。拳を水面に打ちつけた。

『できるわけないだろ！！ こいつは初瀬だ！！ 初瀬なんだ…！！』

それを聞いた咲は、堪らず水路に飛び込み、泣き伏す鎧武に抱きついた。

「紘汰くんっ！」

『頼む……っ、目を覚ましてくれよ、初瀬！　こんなのはイヤだッ！
初瀬え！』

「もういい！　もういいよ、紘汰くん！　もういいんだよお！」
『うあ、あ……うおお……うあああ……っ！』

——その時、悲憤に暮れる咲と紘汰には気づく由もなかった。
音もなく現れた4人の男女が、アーマードライダーに変身し、彼
女たちを狙撃しようとしていたなど。

第49話 新世代ライダー

“それ”に先に気づいたのは鎧武だった。

『！ 咲ちゃん！』

金色の矢が咲たちを狙い撃った。

鎧武が咲を抱え込んで光矢に背を向けた。

矢は鎧武の背中に刺さり、爆ぜた。衝撃で鎧武の変身は解け、紘汰は水路の段差を濡れながら転がり落ちて行った。

「紘汰くんッ！——だれ！？」

咲は矢が飛んできたほうを見上げ、——戦慄した。

白いアーマードライダーだけでも脅威だというのに、そこに立っていたのは、白いアーマードライダーと同じ型と思しき3人のアーマードライダー。チェリー、レモン、ピーチの意匠。全員がアーチエリーの弓を持っている。

（この人たちの中のだれかが、あれで、紘汰くんを撃ったんだ）

『お前の悪ふざけが招いた結果だ。後始末くらいしたらどうだ』

『はいはい、っと』

4人の内、チェリーの鎧をまとった銀のアーマードライダーが降り立った。

銀のアーマードライダーは、向かって来たヘキジャインベスに弓で斬りつけた。

倒れたヘキジャインベスを踏みつける。踏みつけ、立たせ、斬りつける。そのくり返し。

ブラーボが黒影とグリドンを痛めつけた時はひたすら気分が悪かったが、この銀のアーマードライダーは違う。大きく違っている。

これは暴力ですらない、ただの「始末」だ。

「やめろ！ やめてくれ！ そいつは人間だ、俺たちの仲間なんだッ！！！」

銀のアーマードライダーが逃亡しようとしたヘキジャインベスにソニックアローを放った。光の矢はヘキジャインベスに着弾するや爆発した。

「やめてえええええ！！！」

これ以上は見たくない。傷つく初瀬も、初瀬を見て叫ぶ紘汰も。

咲はドライバーとロックシードをセットして、銀のアーマードライダーに向かって駆け出した。

《カモン！ ドラゴンフルーツ！》

かけ声も惜しみ、アームズ装着の間も惜しみ、月花は変身しながら銀のアーマードライダーに殴りかかった。

しかし銀のアーマードライダーはひらりと月花を躲すと、腹に一閃、月花が屈んだところで背中に一閃、弓で斬りつけた。

月花は膝を屈したが、せめてもの抵抗にDFボムを投げつけた。だがそれさえも、銀のアーマードライダーは弓から放った一矢だけで誘爆させ、続く矢を月花に向けて放った。鎧武の時同様、矢は着弾するや爆ぜた。

『きゃああっ！』

月花もまた噴水に飛ばされ、水面にぶつかったところで変身が解けた。

銀のアーマードライダーは何事もなかったかのように、ヘキジャインベスの「後始末」に戻って行く。

咲より下の段にいる紘汰が何か叫んでいる。

(紘汰くん、初瀬くん……ごめ、ん……)

手を上げてても銀のアーマードライダーを止められるはずもなく、落ちた手が水面を叩いた——咲は気を失った。

第50話 戦極凌馬

咲は手錠をかけられ、量産型黒影に腕を掴まれた状態でエレベーターに乗っていた。隣には、咲と同じ拘束をされた紘汰。

——あれから、気づいたら紘汰ともども病室らしき場所にいた。病室だと部屋の様子から咲は判断したが、そんな易しい展開ではなかった。

咲と紘汰はユグドラシル・コーポレーションに拉致されていたのだ。

咲たちが一応の治療を受けて寝かされていたのは、ユグドラシル・タワーの上層階の医務室。

彼女らは目が覚めるなり、計ったように部屋に入ってきた量産型黒影に脅され、着替え、こうして連行されている。

「紘汰くん、だいじょうぶ？」

「——」。あ！ ごめん、うん、大丈夫」

「ほんとに？ 顔色悪いよ」

互いにあんなにも噴水で濡れたのだ。この冬の真っ只中に。子供は風の子というだけあって咲は平気だったが、紘汰は受け答えのテ

ンポも悪いし、元気がない。体調を崩しているかもしれない。

「本当に大丈夫。ありがとう、心配してくれて」

紘汰は笑ったが、その笑みはやはり精彩を欠いていた。

「ねえ、この人だけいいからちょっと待ってあげて。具合悪いみたいなの。おねがい、ねえってば」

「咲ちゃん、いいから」

エレベーターが開いた。降ろしてもらえるのかと咲は喜んだが、エレベーターの外から、戒斗が量産型黒影に連行されてエレベーターに乗り込んできただけだった。

「戒斗……」

「お前らもか」

「あ」

エレベーターが無慈悲に閉じ、動き始めた。ぬか喜びだった。咲は消沈した。

またエレベーターが停まる。今度は咲たち全員が外に連行された。腕を乱暴に引かれて痛かったが、幼女が大の男に抵抗することもできず、咲はされるがまま歩いた。

量産型黒影に連れられて辿り着いたのは、広大なオフィスフロアだった。

一人で使うには広すぎるそこには、一人分のデスクがあり、一人の白衣の男と、ショートヘアのミニスカスーツ女がいた。

咲たちは量産型黒影によって手錠を外され、デスクより離れたところに置かれたパイプ椅子に強引に座らされた。それで役目は終わったのか、量産型黒影はオフィスを出て行った。

「仲間が手荒な真似をしてすまない。こうしてキミたちと落ち着いて話をするためには仕方なかったんだ」

デスクに座ったままふり返りもせず、男が言った。

「あんた誰だ」

「私は戦極凌馬。キミたちが使った戦極ドライバーの設計者だ」

咲は驚いて紘汰と顔を見合わせた。この、いかにもデスクワーカーの男が。咲たちを踊らせ、利用し、争うように仕向けた本人。とても見えなかった。

第51話 非力な両手

「じゃあ『花道・オン・ステージ』ってのは」

「『Knight of Spear』ってのも」

「私の趣味だ。いいだろう？」

凌馬はやっとふり返り、咲と同級生の男子とそう変わらない笑みを浮かべた。

（いいだろ、と言われても……正直変身する時って大体必死だったから音気にしたことなかった）

正直に告げると凌馬の機嫌を損ねて紘汰たちへの対応も変わるかもしれないから、言わないが。

「それじゃ、あたしたちのことを実験体扱いしてきたのも、あなただったのね」

「実験体？」

これについて知らない戒斗は訝しげにくり返す。

「黒影が量産できたのも、白いアーマードライダーが強くなったのも、俺たちから集めたデータのせいだ」

「本当に何もかも仕組まれていたのか——ふざけるな！」

戒斗がパイプ椅子を蹴って立ち上がり、凌馬に掴みかかろうとし

た。

だがそれより速く、凌馬と咲たちのちょうど間に控えていた女が、戒斗の顔面に後ろ回し蹴りを食らわせた。その上、戒斗に駆け寄ろうとした絃汰の腿を蹴り、その場に膝を突かせて腕を後ろ手にねじり上げた。

「やめてやめて！ 二人ともケガしてるのに！」

咲は女の腕に掴みかかり、ぶら下がった。

「どきなさい」

「やだ！」

女は溜息をつくくと、咲がしがみついた腕を思いきり振った。反動で咲は投げ出され、戒斗と絃汰の間に尻餅を突いた。

「湊君。お手柔らかにね」

「はい。プロフェッサー凌馬」

女はにこやかに答え、元の立ち位置に戻って行った。

（高くて、女の子みみたいな声。このプロフェッサーって人と同じで、なんかどっちとも……幼い？ 感じだ）

「あんたの実験に巻き込まれたせいで、初瀬はあんな姿になって――！」

「まず誤解があるようだが！」

紘汰の語尾に被せるように凌馬は声を上げた。

「私の担当はベルト開発だけだ。そのためのデータ収集はうちの主任が考えたことだよ。それと初瀬……亮二君？ 彼については、不幸な事故だったとしか言い様がないな。果実を口にした時点で人間としての彼は死んでいた。果実に体に乗っ取られ、モンスターになっていた」

どこで読点を打っているのか分からないしゃべり方をする凌馬に、今度は紘汰が殴りかかろうとした。

それを止めたのは戒斗だ。

「今はこいつにしゃべらせろ」

「くっくっ戒斗！」

「俺たちは知る必要がある！ あの力の正体を。使い方を。倒すべき敵を倒すためにな」

戒斗がパイプ椅子に座り直した。

紘汰は一度唇を噛みしめ、パイプ椅子に戻った。咲も内心慌てて紘汰に続いてパイプ椅子に座った。

第52話 DJサガラの訪問

刑事もののドラマで見るような独房に連れて来られた咲は、ベッドの隅で枕を抱え蹲っていた。

インベスになった初瀬、戦極凌馬が語ったヘルヘイムの果実の効能と、戦極ドライバー開発の経緯、次のドライバー開発への協力――次々に頭に浮かんで沈む。考えがまとまらない。

そんな時だった。陽気な声が飛び込んだのは。

「ハロー、Super Girl!」

「ひゃっ! ……え? DJサガラ!? なんでっ?」

サガラはまるで学校帰りに遊びにきた友人のように気さくに、あっさりと、独房の中に入って来た。彼の手には、ユグドラシル・コーポレーションのロゴが入ったカード。咲もようやく気づいた。

「ユグドラシルの…人だったのね」

「Yes, that's right! アーマードライダー月

花っ」

「そう」

「ん、んー? 意外と驚かないねえ」

「今は、そんなユウーないから。――ねえ」

「何かな」

「初瀬くんは——死んだの？」

戒斗に初瀬のことを問われた時、紘汰は何も答えなかった。薄々、最悪の結末になったのだらうと分かっている、聞かずにはおれなかった。

「ああ、死んだ。こっち側のアーマードライダー、シグルドが手を下してな」

「銀色でサ克蘭ボのアーマードライダー？」

「ああ。シド、といったほうが分かりやすいか」

「錠前ディーラーが……」

心臓に流れ込む血が一気に冷えた心地がした。どくどくという音が耳の奥まで響いてきて、吐きそうだ。咲は強く枕を抱き締めた。

（今までインベスが死んでこんな気持ちになることなんてなかったのに）

当然だ。その時の咲はインベスの正体を知らなかった。今は知っている。

「ここでやめちまうのかい？」

サガラがベッドの、咲から離れた位置に腰を下ろす。

「知ってるぜ。戦極凌馬から新しいドライバーのテストに誘われてるんだってな」

咲は答えなかった。率直な考えを述べるなら断じて否である。インベス退治はヒト殺しだと知ってしまった。

もう咲はインベスを倒せない。いや、もう変身することさえ恐ろしかった。

咲とサガラの間には沈黙が降りた。

破ったのはサガラのほうだった。

「あいつは刹那の人生で輝こうとしてる」

「あいつ？」

「葛葉紘汰。アーマードライダー鎧武。奴はこの沢芽シティをインベスから守るために力を使うと言った」

「紘汰くんが……」

それは初瀬のようにヒトから変容したインベスさえ殺すということだ。紘汰はあんなにイヤだと叫んでいたのに。彼は優しすぎるのに。自ら荊の道を往く気なのだろうか。

「……きないよ。あたし、紘汰くんみたいにはできないよ……!」

咲は枕を抱え、頭を押しつけた。込み上げてくる嗚咽をサガラに見せまいと。

何もかもが怖い。罪にまみれた自分では、もうチームの下にも、ダンススクールにも学校にも家にも帰れない。そんな気がした。

ドアの開閉音がした。こっそり顔を上げると、すでにサガラはいなかった。

咲は再び膝を抱え、今度こそ声を上げて泣いた。

第53話 一人はみんなのために

「インベスゲームをやめるって？」

声を上げたのは、チームバロンのNo.2、ザックだ。

「そう。前から言ってるでしょ。わたしたちがロックシードを使ったら、街の人たちは怯える一方よ。誰もステージに来てくれなくなる。あのインベスがわたしたちと無関係だって証明しなきゃ」

リーダーの裕也はいない。頼みの綱である紘汰も光実もガレージに来なくなった。世間の風評は酷くなる一方だ。

だから舞なりに必死で考えて、彼らがいらない今、自分でもできることをしようと、こうしてトップランカーに集合をかけたのだ。

バロンからはザックとペコ。インヴェットは城之内に近い女子二人。レイドワイルドは初瀬に近い男二人。リトルスターマインは全員で。この会合に集まった。

なのに――

「そういう綺麗事言えるのってさあ、やっぱりランキング首位の余裕ってわけ？」

インヴィットの女子には考えてもいなかった部分を穿たれ。

「大体さあ、この会合、リーダー一人も来てねえじゃん。何でリーダーでもない奴が仕切るような真似してんだよ」

ペコからはできれば省みずにいたかった現実を突きつけられ。

決裂の空気が色濃く流れ始める。舞は俯き、諦めかけた。

――だが。

「さっきから聞いてりゃ、ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ。オトナのくせにあたしより、あったま悪っ」

立ち上がったのは、リトルスターマインのナッツだ。

「そもそも。リーダーいなきゃ、あんたたち何も決められないの？」

「……ガキのおれたちよりガキ」

「何のためのNo.2なんだか」

リーダー不在発言の主、ペコがむっとした色を呈した。

「リーダーいないんならさ、むしろリーダーが帰ってきた時のために、ちょっとでも踊りやすいステージ用意してやりてえもんじゃねえの。そのためにインベスゲームやめなきゃいけないなら、おれらはやめるよ」

モン太が舞を見上げて、ぼんと腕を叩いた。

「だいじょーぶだって、舞ねーさん。おれたち、最初のカイトとのバトル以来、インベスゲームしてねえもん」

「え、そうなの？」

そういえばチームバロンに勝ったはずなのに、リトルスターマインは相変わらずランキング外扱いされていた。

——舞たちの抛り所でもあった“ビートライダーズホットライン”も今となっては放送されなくなったので、もうランキングがどうだの言えなくなったが。

それでも他のチームがランキングに固執するのは、いずれまた何もなかった日常に戻れると、どこかで信じじているからか。

「うん。もともと、おれらがステージにしてるところってあんま目立たないし、人来ねえし」

「……来るのは近くの小学生とか、もっと小さい子だけ」

「つまりそれってランキングも場所取りも関係ないからどうでもいいってことじゃん」

「ことじゃん」

またインヴィットの女子二人がイヤな穿ち方をしてきたが、これにもヘキサが平然と答える。

「場所取りの勝負なら、あれ以来よく、いどまれましたよ？」

「こいつらに勝って有名になってからしばらくは、うるさかったわね。ダンスのウデでバトってたの」

こいつら、とナッツはザックとペコを親指で差した。

「ダンス？」

「うん。その場でダンスして、拍手多かったほうの勝ちって。なー」
「「ねー」」

カルチャーショック。まさに舞を襲った感覚はそれだった。舞だけでなく、ザックやペコ、他2チームのメンバーもまじまじと子供たちに注目した。

ビートライダーズはそもそもストリートダンサーが徒党を組んだものだ。ここ数ヶ月でインベスゲームにライダーバトルと新しい様式が次々出てきたから忘れていたが、舞たちは本来ダンサーだ。ダンスで戦うのはしごく真っ当だ。

（あたしたち、今まで何やってたんだろ……）

インベスゲームで勝つこと、アーマードライダーとなった紘汰と光実に勝ってもらうこと、いつしかそれらが舞の中で当たり前になっていたことに、舞はようやく気づいた。

「ねえ、チームバロンさん」

ヘキサがザックとペコの前に回り込んで彼らを見上げた。

「ずっと上を目指すバロンの人たちのシセイ、とてもステキだっと思っています。でも、だれも観に来ない『一番』は本当に『一番』なん

でしょうか？」

言うだけ言って、ヘキサは輪の中心に戻ってきた。

「じゃあ何だよっ。お前らリーダー無視してチームの方針決めんのかよ！」

「それがわたしたちのチームのため、わたしたちビートライダーズみんなのためになることなら、リーダーは帰ってきてても絶対反対しません。わたしたちが咲を信じるように、咲もわたしたちを信じてくれますから。信じてもらえたわたしたちは、よいよいと思える判断をみんなで下しただけです」

誰もが呆気にとられる中、ヘキサを中心に、リトルスターマインの全員が力強く笑んだ。

第54話 脱出① 独房から出るまで

咲がベッドで枕を抱いて蹲っていると、乱暴な音と共にドアが開けられた。

またサガラだろうか顔を上げ、驚いた。

——ドアを開けたのは、紘汰と戒斗、それに光実だったから。

「みんな、何で」

「話は後だ。逃げよう、咲ちゃん」

独房に入ってきた紘汰が咲の手を掴んだ。咲はその時、反射的に紘汰の手を振り解いていた。

「咲、ちゃん？」

「あ……ごめん、なさい。あたしのことは……ほっといて。先に行つて」

「な、何言ってるんだよ！ 咲ちゃんを置いていけるわけねえだろ」

両肩を掴まれたことで咲はさらに身を竦めた。紘汰も気づいたらしい。気まづげに手を外した。

「——インベスは、人間だったんでしょ？ あたし、インベスを殺した。人を……殺しちゃったんだよ？ もう、どこにも帰れないよっ」

「っ、それ、は——」

咲は涙を散らす勢いで顔を上げ、絃汰の胸に縋った。

「人殺し、しちゃったんだよ!? 今まで殺したインベスも、だれかのお父さんでお母さんで、きょうだいで、コドモで、トモダチだったかもしれないんだよ!? それを殺しちゃったんだよ!? やだよ……あたし、やだよお……」

縋った手がずるずると滑り落ちる。咲はベッドに両手を突いて泣いた。

重かった。ひたすら、刈った命が重かった。

「泣いていたってどうにもならないぞ」

冷たく言い放ったのは戒斗だった。

「戒斗、お前! 咲ちゃんは傷ついてんのに……っ」

「俺の知ったことじゃない。——どうする、小娘。ここに留まって泣き暮れるか、ここから出て現実に立ち向かうか。二つに一つだ」

「あたし、は……もう」

「二度とチームの奴らに会えなくなってもいいのか?」

咲は、はっとした。仲間。モン太、チューやん、ナッツ、トモ——ヘキサ。彼らの笑顔が、呼ぶ声が、咲の中にリフレインする。

ただ、それだけ。それだけの、咲にとっては世界で一番大事なものの。

「二度と踊れなくなってもいいのか!？」
「やだ!！」

咲はソファーから立ち上がり、戒斗の手をがっちり取った。

戒斗は咲の手を握り返し、目線の高さを合わせるようにしゃがんだ。

「それでいい。覚えておけ。いつだって最後に頼りになるのは、自分自身の強さだ」

「うん——！」

歯を食い縛った。ここから先はもう泣かない。そんな決意を込めて。

例え血で汚れてしまった自分でも、ヘキサは、彼らは受け入れる。

だから咲は泣いて蹲っていないで、帰るのだ。仲間の下へ。あの野外劇場へ。

「よし、行くぞ」

戒斗たちに付いて咲も、自分一人の足で走り出した。

第55話 脱出② ドライバー奪還

咲たちはビルを出る前に戦極凌馬のオフィスへ向かった。目的は自分たちの戦極ドライバーを取り戻すこと。

幸いにもオフィスには凌馬も湊もいなかった。

自分のドライバーとロックシードを取る紘汰と戒斗に倣い、咲もドライバー、そしてドラゴンフルーツとヒマワリの錠前を取り返した。

「おい。お前、どうしてDクラスの錠前を持っている。インベス用か？」

「べつに。ただ、なんとなく、いつか使えたらなって思っただけ」

数あるロックシードの中で、これ一つだけが実をつけない花の種類。自分の名前が「咲」だからか、花であるこのロックシードに親近感を持っていた。

（光にまっすぐ向かう花。ロックシードの中では確かに最低ランク。でも、小学生のあたしたちでさえビートライダースになれたんだもん。いつかこれだって咲くかもしれないから）

けたたましい警告音が鳴り響いた。咲は思案をやめて顔を上げた。

「バレた！？」

「急ぐぞ！」

「でも今の画像、裕也が…！」

「仕方ないです！ 行きましょう！」

戒斗が走り出し、光実が絃汰を乱暴に引っ張って行った。

咲は慌てて彼ら殿しんがりにつく形で、オフィスを脱出しようとした。

「本当にそれでいいの？」

言葉のはずなのに、それはまるで上質な鉄琴の音のように咲の鼓膜を震わせた。

ふり返る。白い裳裾をなびかせて、一人の女が咲の後ろに立っていた。

「え…：舞、さん？ 何で舞さんがここに――」

「あなたは今 運命を選ぼうとしている」

黒と赤のオッドアイが、ひた、と咲を見据える。

「その花を咲かせてしまえば もう二度と後戻りはできない

」

花を咲かせる。咲はとっさにヒマワリの錠前を見下ろした。これを、咲かせる？

「――それでもあたしは、帰るって決めたんだ」

どれだけ闘争の巷に踏み込もうと、血に汚れようと。仲間の下へ帰るために戦うと決めたのだ。

その道のりの中でこのロックシードを使わねば戦えない時が来たなら、咲は迷わずヒマワリロックシードをバツクルにセットするだろう。

その想いを伝えようと顔を上げた時、――白い女はすでにいなかった。

（な……んだったの、今の。幻覚？ はくちゅうむ、ってやつ？ 舞さんがこんなところにいるわけないし。でもあんなそっくりで、てか同じ顔で）

「おいガキ！ 早くしろ！」

「ご、ごめんなさいっ」

考えは一度捨てて、咲は先に行った彼らを追って走り出した。

咲たちはエレベーターで降りられるだけの階数を降り、タワー地下のどこかの廊下を走っていた。

初瀬の時と同じで、紘汰たちと咲では歩幅に差が大きい。だがそんなことを言っている場合ではない。

咲はぜいぜい息を鳴らしながら紘汰らと離れまいと走り続けた。

「地下にヘルヘイムに繋がるクラックがあります。一旦そこから脱け出してロックビークルを使いましょう」

「分かった……おわ!？」

咲たちの行く手を阻んだのは、前後からやってきた黒影トルーパー部隊だった。

「すんなり通れるはずもないか——」

黒影トルーパーが向かってくる。咲は壁を背にして避けた。

変身したならともかく、生身の咲がアーマードライダーの兵士に勝てる道理はない。せめて応戦する3人の邪魔にならないようにしているしかない。

「僕は別ルートを探します！」

「気を付けろよ！」

だがそんな咲に黒影トルーパーの一人が槍を向けて来た。避けようと屈んだ咲の頭上で、紘汰が壁走りをかまして黒影トルーパーを吹き飛ばした。

紘汰が咲の手を取って立たせる。

「戒斗行くぞ！」

「ただ逃げるってのは性に合わない！ お前らは先に行け！」

戒斗は戦極ドライバーとバナナロックシードを取り出していた。

「無茶はするなよ！ ——咲ちゃんっ」

紘汰が走り出そうとする。咲は、バロンに変身した戒斗を顧みて――紘汰の手を振り解いた。

「咲ちゃん!？」

「行って!!！」

咲は返事を聞かず戦極ドライバーとドラゴンフルーツの錠前を装着し、月花に変身した。

DFバトンを繋ぎ合わせてロッドにする。大橙丸と無双セイバーを繋いで武器にした鎧武を見て思いついた、DFバトンの応用法だ。

『やああ!』

月花はDFロッドを振り、バロンと戦っていた黒影トルーパーの一人を殴りつけて沈黙させた。

『お前…!!』

『足手まといにはならないから!』

背後から襲ってきた黒影トルーパーの腹に全力でロッドの一突きを入れ、撃沈させる。それを見届けたバロンが、前に向き直った。

『――付いて来い!』

『はい!』

バロンと月花は背中合わせになり、それぞれ向かって来る敵をバ

ナスピアで、DFロッドで撃退した。

10分も経つ頃には、その場の黒影トルーパーは全員が床に倒れる結果となった。

勝利を喜んでいる暇はない。バロンと月花は変身を解除せず、絃汰に追いつくべく走り出した。

………

………

…

独りになってしまいなながらも、絃汰は何か、光実が言っていた地下のクラックに辿り着けた。

戒斗も咲も光実もないが、彼らは彼らできっと脱出できたと、今は信じるしかない。

だがそう易々と逃げられるわけもなかった。

クラックのあるラボで絃汰はシドに鉢合わせ、二人はアーマードライダーに変身して戦うこととなった。

銀とオレンジ、二人のアーマードライダーがヘルヘイムに転がり出た。

『この街を守るだと？ 笑わせんじゃねえ！』

銀のアーマードライダーは段違いの力で鎧武に斬りつけ、蹴り飛ばす。

『初瀬を仕留め損なった奴がどの口でほざくかねえ。おめえが奴を逃がしたせいで、よけいな犠牲が出たんだぜ？ 忘れたのか』

頭を持ち上げられ、地面に投げ飛ばされる鎧武。

耳の奥にリフレインする、公園で逃げ惑った人々の悲鳴と泣き声。

『それでも俺は――』

思い描くのは、たったさっきの咲の慟哭。

咲は、自分のことで泣いていた。あの強気な咲が、仲間のためにしか泣かないあの子が泣くほどに苦しいものなのだ。

『あの子みたいに純粋な子を泣かせて平気でいられる、そんな奴を正義とは認めねえ！』

気炎を吐いても実力差は覆らない。銀のアーマードライダーのソニックアローが鎧武を容赦なく抉った。

倒れた鎧武に、銀のアーマードライダーは笑い声を上げながら迫ってくる。終わりか、いや、まだ負けられない――そう思った瞬間だった。

クラックを超えて飛び込んできたローズアタッカーが、銀のアイ
マードライダーを退けた。

ローズアタッカーに乗っていたのは、バロンと月花だった。

第57話 vs シグルド！ 命がけの大逃亡

『戒斗！ 咲ちゃんっ』

ローズアタッカーは鎧武の前に着地した。着地の衝撃に月花はいバロンにしがみついたが、すぐ立て直した。

『ごめんね、紘汰くん。勝手なことしちゃって』

『いいんだよ。よかった、二人とも無事で』

『フン』

鎧武もまたロックビークル、サクラハリケーンを展開してそれに跨り、エンジンを噴かした。

『ハッ、面白いじゃねえか』

シグルドがソニックアローを立て続けに二矢放った。これには月花が、DFボムを2個投げて、爆発により矢を相殺した上で、煙幕を作り出した。

鎧武に顧みられ、月花は、しかと肯いた。

『ここからは俺たちのステージだ！！』

鎧武とバロンは同時にロックビークルを走らせた。

2台のロックビークルでシグルドを囲むように走ることで、鎧武

とバロンはシグルドの矢を躲す。それでも矢がどちらかに当たりそうになれば、月花はDFボムを投げてソニックアローを相殺した。

『なめるなよ。俺たちはいつだって本気だった』

『あたしたちを観察してただけのあんたたちとちがって、本気で全てに向き合ってきたの！』

『全てあんたの嘘に踊らされながら身につけた力だ、思い知れ！』

バロンが、鎧武が、ロックビークルにツイストをかける。月花は振り落とされないようバロンの腰にしがみついた。

鎧武とバロンの一糸乱れぬWツイストランで、シグルドは派手にダメージを食らい地面に倒れた。

シグルドは忌々しげに（顔は視えないが月花はそう感じた）大弓にエネルギーアローを番える。

『紘汰くん、必殺技っぼいの来る！』

『ここは退くぞっ』

『分かった！』

ロックビークルが急発進する衝撃に耐え、月花は後ろを顧みた。シグルドは確かに矢を放ったはずなのに、何故か月花たちをソニックアローが襲うことはなかった。

だが代わりに、森をひた走る月花たちを、飛行型ビークルに乗っ

た黒影トルーパーが追跡してきた。

『構うな！ スピードを上げる！』

バロン、そして鎧武もアクセルをひねる。

『二人は運転に集中して！』

月花はDFボムを右手に持てるだけ持ち、後ろに付いた飛行型ビークル隊に投げた。後方で爆発が起き、2機ほど墜落した。威力の低い小さな果実になるよう調整したから死にはしないはずだ。

それでも飛行型ビークルを寄せて攻撃してくる黒影トルーパーに対しては、DFロッドで槍を弾いた。

最後に月花はビークルの上で立ち上がり、大ジャンプして前に回り込んだ黒影トルーパー2機をすれ違いざまに討った。

そして、飛行型ビークルの爆発の衝撃を利用し、再びバロンのロズアタッカーに着地した。

『無茶をする奴だーっ』

『これでもジャンプ系のダンス、とくいなのよ？』

そしてバロン、鎧武、月花はビークルによって“森”を脱出し遂げた。

第58話 おこりんぼ咲

家に帰った咲は無断連泊を両親に散々責められ、泣かれた。

ダンススクール以外の寄り道禁止を言い渡されたが、咲は大人しく従った。それだけ心配させてしまったという自覚はあったから。

そして今日、ようやく母の許しが出て、久しぶりにチームメイトに会いに野外劇場に向かっていた。

その途中、前から走ってきたモノを見て、咲はその場に棒立ちになった。

（インベス！？　なんでインベスが宝石なんか持っていてにげてるの？）

街中で変身できず、とっさに進路を避けた咲に、今度は人間がぶつかってきた。咲は派手に前のめりにコケた。

「うー、いだあ……舞さんっ」

「咲ちゃんっ。ごめん、大丈夫？」

舞は咲を立たせ、服から埃を払ってくれた。

「ひよっと舞さん、あのインベス追いかけてる？」

「こっちに来たの！？」

「うん。あっち行ったよ。行くならあたしも連れてって。あたしがいないとインベスと戦えないでしょ？」

舞は迷う様子を見せたが、インベスを見失うことを恐れてかすぐに肯いた。咲は舞と一緒に走り出した。

インベスが向かったのは、湾を跨ぐ大橋の下の埠頭だった。

そこには信じたくない光景が広がっていた。

赤を基調にした格好の男が4人、金銀宝石を手にはしゃいでいる。その傍らには忠犬のように座って動かないインベス。

「曾野村——！」

「なあんだ。誰かと思ったらチーム鎧武の連中か」

「あんたたち……まさか、インベスを使って強盗を!？」

「どうせビートライダーズは、怪物使いの悪役ってことになってんだろ？俺たちはロックシードで好き放題やってやる。もう怖いもんなんかねえぜえ！」

男たちから下卑た笑い声と快哉が上がる。

「バカ!! あんたたち、何のためにステージで踊ってきたのよ」
「目立ちてえ、暴れてえ。ただそれだけのことだったのさ」

咲の中で何かに大きく亀裂が入る音がした、気がした。

（鎧武みたいに楽しんでもらうためじゃない。バロンみたいに強さを示すためでもない。こいつらは本当にダンスなんてどうでもいいやつらなんだ）

咲は舞を後ろに押しやり、戦極ドライバーとドラゴンフルーツの錠前を取り出した。

レッドホットの男たちが怯んで下がる。

「どうしたのよ。出してみなさいよ。ジマンのインベスであたしのこと好きホーダイしてみなさいよ。爆破してやる。あんたたちごと」

咲の我慢はとうに臨界値を超えている。――もう泣かないと決めたが、もう怒らないとは決めてない。むしろ、泣かない分の感情が怒りに加算されて、これ以上ないほど凶暴な気分だった。

いざドライバーを装着しようとした時だった。

横からレッドホットのものは別のインベスが現れ、レッドホットのインベスを殴り、海へと放り捨てた。

それを見た曾野村たちは、先の威勢のよさが嘘のように遁走した。

「呆れたもんだな。お前、本当に状況分かってねえんだな」

声がして、ロックシードを施錠する時特有の音がした。インベス

がクラックからヘルヘイムへ還っていった。

咲は音源を見やった。

チームバロンの戒斗とザックがそこにいた。

第59話 咲と舞とチームバロン

咲たちは場所を改め、「ドルーパーズ」のボックス席に来た。

「よそのチームはみんな曾野村みたいな連中ばかりだ。みんなリミッターカットの裏技を見つけたからな。簡単な改造だけで、実体化したインベスを呼び出すことができる」

言って、戒斗は紅茶に口を付けた。

「……その裏ワザ流したのって、錠前ディーラー？」

咲は店の一番奥の個室席に視線を流した。タイミングが悪いことに、誰も座っていない。

「さあな。どこかの誰かが、ネットに流れた情報を元にやってみたらできたって感じた。誰が流したかなんて分かりやしない」

「じゃあ、街で暴れてるインベスはっ」

「騒ぎの何割かは、便乗して悪さしているビートライダーズの仕業だ」

ザックはポケットからクルミの錠前を出しながら、アイスコーヒーをストローで吸い上げた。

「俺たちだって護身用の錠前が手放せない。ウチのチームは恨みを買ってるからな」

「確かに買ってそう」

「ド突くぞクソチビ」

咲はぷい、とよそを向いたが、すぐに俯き、ドラゴンフルーツとヒマワリの錠前を取り出した。

こんな物があるせいで――

「……い」

舞が掠れた声を零した。

「舞さん」

「ひどい、どうして……っ、これじゃもう、誰もあたしたちを信じてくれないじゃない……っ」

舞の黒々とした瞳から、涙が一粒、二粒と落ちた。

戒斗は何も言わなかった。咲も何も言えず、舞の膝の上の拳をさすってあげるしかなかった。

「――あんた、前に集まった時言ったな。街で暴れてるインベスが自分たちと無関係だって証明しないと、って。これでもう証明できなくなっちまったな」

ザックの言葉は皮肉より同情、あるいは同病相哀れむ色のほうが濃かった。

（こんなことにならないために説得して回ってたのに。あたしたち

がしたこことってなんだったのよ！)

咲はダンススクールの講師を思い出す。信じてくれる人も現れ始めていた。やっところさ築いた信頼に、レッドホットは、他の多くのチームは、あっさり泥を塗ったのだ。

「先走るなよ」

咲と舞は同時に顔を上げて戒斗を見返した。

「お前のほうだ、ガキ。さっきみたいに後先構わず変身してビートライダーズを襲うような真似はするなと言っててるんだ」

「なんであたしが、そんなことしなきゃいけないの」

「言ってみないなら力づくで。さっきのお前はまさにそんな空気だった。俺が止めなければ、大方、曾野村たちをタコ殴りにして口ツクシードを根こそぎ取り上げようとしたんじゃないか？」

言い返せなかった。曾野村と話した直後の咲の怒りはそれをやってもおかしくない値まで上がっていた。

戒斗は溜息をついて席を立った。隣のザックも戒斗に続く。

「争わずに話し合いで解決しようと言いだした奴がこの体たらくか。——お前や葛葉の言うように、インベスゲームはやめてやってもいい。もはやインベスゲームどうこうの次元じゃないからな。だが護身用のロックシードはこれからも持ち歩く。それについて文句は聞かん」

戒斗たちはボックス席を出ると、勘定をすませて「ドルーパーズ」を出て行った。

咲は唇を噛んで、チームユニフォームをシワが寄るほど握りしめた。

第60話 眠りの前のひと時

仕事を終えて帰った自宅はいつも暗い。貴虎にとっては、灯りが
燈っていない家は自然な光景である。

いつものように、一人で軽めの食事を取り、一人でシャワーを浴
び、一人で自室にて寝る前の読書をしていた。

控えめなノックがあった。

プライベートの時間に貴虎を訪ねるのは、家族しかない。特に
この時間帯であれば、部屋に来るのは一人だけだ。

「入れ」

「おじゃまします……」

こっそり、という擬態語が似合う様子で、ネグリジェ姿の碧沙が
ドアを開けて入ってきた。

「どうした」

「あのね、兄さん。今日、いっしょにねても……いい？」

貴虎は面食らったが、すぐにベッドの中央を避けてスペースを作
った。

「おいで」

碧沙はぱっと顔を輝かせ、部屋の中に入って笑顔でパタパタとやってきた。碧沙はベッドに潜り込み、貴虎に笑いかけた。

「怖い夢でも見たか？」

「ううん。今日は、ひさしぶりに、貴兄さんといっしょにねたかったの」

貴虎は猫のように手に擦り寄る妹の、ミディアムロングの髪を梳いた。

「――兄さん、光兄さんを連れてどこへ行ってたの？」

「碧沙？」

「貴兄さんからも光兄さんからも同じ香りがするわ。ヘルヘイムのくだものの香り……しかも今までで一番強い」

貴虎は軽く目を瞠った。妹が鼻が利くのは知っていたが、ここまで嗅ぎ当てられるとは思わなかった。

「――今日はヘルヘイムの一番深い場所へ行ったんだ。光実も一緒に。そのせいだろう」

「一番深い、場所」

それっきり碧沙は黙り込んだ。

碧沙が言葉を発さない間、貴虎は碧沙の髪を撫でていた。

「今まで」

ぽつ、と碧沙が声を零し始める。

「貴兄さんはどうして教えてくれないんだろうって、思った。一人だけ全部知ってて、ズルイって。わたしたちに何も言ってくれないの、さびしい、って。今までずっとカクシゴトされるのが悲しかった」

碧沙は体を転がし、寝そべった状態から貴虎をまっすぐ見上げた。

「でも、今日帰ってきた光兄さん、すごくこわがってて、真っ青だった。だからわかったの。すごく重くて辛いこと、わたしたちの分も、貴兄さんが抱えててくれたんだって」

小さくふよふよした掌が、髪を撫でていた手を掴んだ。大の男の貴虎からすれば脆すぎる力加減。

「3人分も重かったよね？ つらかったよね？ ごめんなさい。かくしてくれて、ありがとう、貴虎兄さん」

命を賭しても守るべき存在がいる。そんな自分は幸せ者だと貴虎は思う。

弟を、妹を見るにつけ、その想いは増す。

ついに今日、弟にヘルヘイムの真実を見せた。

なまじの事では動じない光実が、膝を突いて震えていた。その姿があまりに可哀想で、それを素直に示せるほど貴虎はもう若くもなくて。ただ手を差し出すしかなかった。

震える手で握り返した光実は、どんな想いでいたのだろう。

そして、傍らですやすや眠る小さな妹。

いつかこの子にもあの真実を見せるべき日が来る。それは待ち遠しくもあり、同時に恐ろしくもあった。

「おやすみ、碧沙。よい夢を」

すでに眠る碧沙の頭をそっと撫でてやる。こう言ってやると、何故か碧沙はひどく喜ぶ。だから貴虎も光実も、碧沙には寝る前にこれを言う癖がついた。

貴虎は神など信じない。だが、せめて小さな妹が眠りの中でも健やかであると祈ることは、やめられなかった。

第61話 味方がいる

取り返しがつかない道に踏み込もうとしている予感があった。

——「葛葉紘汰の持つ戦極ドライバーを奪還しろ」——

保身を優先した作戦内容は我ながら悪質だ。仮に事が露呈せず「ミッチ」を続けられるとしても、その裏で呉島光実が確実に大事なものを損ねるだろう。

（それでもやるしかない。やるしかないんだ）

機材とドライバーを詰めたシヨルダーバッグを持って、光実は屋敷を出た。

今日使う場所までは湊の車で送ってもらおう手筈になっている。彼女はすでに玄関に車を横付けして光実を待っていた。

「兄さん」

はっとし、ふり返る。いつからいたのか、後ろに碧沙が立っていた。

「今日は学校行かないの？」

「うん。ちょっとね。やることあるんだ」

「そう」

呟いたきり、碧沙は俯いた。今の光実には碧沙に構うだけの余裕はない。話が続かないならばと光実は車に乗り込もうとした。それを引き留めるかのように。

「あのね、兄さん。たとえば兄さんがどんなヒドイこととしても、わたしは兄さんの味方だから」

まるで光実が今からしようとしていることを知っているような言い方。光実の心臓がいやな律で鳴り始める。

「いきなりどうしたの」

「なんとなく、今言わなくちゃいけない気がしたの」

碧沙は光実の手を取ると、彼女自身の頬に当てがった。

「わすれないでね。光兄さんには、貴兄さんもわたしもいるから。いつだって、ひとりでかかえこまないでいいからね」

仲間でしょ、俺たち——いつかラットが紘汰に告げた言葉がリフレインする。

仲間になら打ち明けられるのか。この胸の内を。兄にも仲間にも好かれたままでもいいという、この貪欲さを。

打ち明けられるわけがなかった。それを分かってくれたのは、この妹だけだった。

光実が碧沙の細い体を抱き寄せ、目一杯、抱き締めた。

「紘汰さんと舞さんに嫌われたくない」

「うん」

「兄さんから見放されたくない」

「うん」

「ひとりぼっちに、なりたくない——っ」

「——だいじょうぶ」

碧沙が光実の頭をやわらかく撫でた。

「光兄さんがどっちを取っても、わたしは味方するわ。はなれたって、わたしが兄さんを想ってること、わすれないで。これで光兄さんは、ひとりぼっちじゃないよ」

「碧沙……っ」

かつてこれほどまで人生で「呉島光実」を肯定されたことがあっただろうか。抱きついた碧沙が背中を一定のリズムで撫でる感触が心地いい。

いっそのそのまま碧沙を連れて部屋に引き籠もれたら。光実に優しい言葉だけを紡ぐ妹と二人だけで世界が閉ざせたら。

——だがそんなことを許すほど現実には甘くない。

光実は、心地よければかりの妹の抱擁から離れ、碧沙の目をしっかりと見た。

「ありがとう。もう——行くよ」

「気をつけてね。いってらっしゃい、光実兄さん」
「行ってきます」

光実はついに車の助手席に乗り込んだ。

運転席にいた湊が車を発進させる。

「妹さん？　かわいい子ね」

「妙なちょっかいかけないでくださいよ」

「それは、プロフェッサー次第」

碧沙は見えなくなるまでずっと手を振ってくれていた。

第62話 碧沙と凌馬 ①

光実が家を出てから程なく、呉島邸の前に一台の車が横付けされた。

まだ屋敷の中に入ってなかった碧沙の前で、その車の運転手が降りた。碧沙にとってはよく見る、黒スーツに黒サングラス姿。

「呉島碧沙さんですか」

「は、はい」

「ユグドラシル・コーポレーション研究開発部門の者です。プロフェッサー凌馬よりあなたを迎えに上がるよう指示を受けています」

「——このこと、兄たちは知っているんですか」

「いえ。呉島主任は別の仕事で動いておいでです」

碧沙は予感した。今日光実が深刻な顔で出かけて行ったことも、貴虎の「別の仕事」ときっと無関係ではない。今の自分のように、長兄から何らかの働きかけがあったのだ。

「そうですか——分かりました。したくしてきますので、少し待ってください」

碧沙は屋敷へ取って返した。

自室へ小走りに戻り、部屋着（それでも外に着て出られる上等な物）から小学校の制服に着替えた。未成年のオフィシャルは制服、

といつか貴虎が言っていたからだ。

碧沙は再び屋敷を出た。待っていた運転手が車の後部座席を開ける。碧沙はそのまま乗り込み、シートベルトを締めた。

（このタイミングでユグドラシル側からわたしにコンタクトしてくるなんて、ヘルヘイム関係しかありえない。何か兄さんたちの力になれるかもしれない）

運転中、碧沙は無駄口を利かなかった。緊張していたから、というもある。

ユグドラシル・タワーに着くと、碧沙はすぐさま連れられてエレベーターに乗り、何階かも分からない上層フロアまで連れて行かれた。

そこはコの字にテーブルとイスが配置された会議室で、正面窓際の席に一人の白衣の男が座っていた。

「プロフェッサー・凌馬。呉島主任の妹さんをお連れしました」

白衣の男はタブレットの画面から顔を上げた。

「――ようこそ。貴虎の妹君」

「兄をご存じなんですか？」

「君の上の兄さんとは同じ研究部署だね。私は開発担当で戦極凌馬という。よろしく」

「あ：呉島碧沙、です。兄がお世話になってます」

凌馬から近くに座るよう言われ、とりあえずイス一脚を間にして座ると、「隣に」と言われた。碧沙は凌馬の至近距離のイスに座り直した。凌馬は満足げな笑みを浮かべた。

「さて。今日キミを呼び立てたのは他でもない。キミの兄さんの手伝いをしてほしいからだ」

「わたしが、兄の力になれることがあるんですか？」

「あるとも。むしろこの任務はキミにしかできない」

「教えてください。それで兄さんの力になれるならっ」

凌馬は我が意を得たりというふうに笑んだ。

「キミの友人、室井咲君のドライバーを回収してほしいんだ」

第63話 碧沙と凌馬 ②

「わたしが、咲からですか」

「ああ。私たちだって無闇に争いたくはない。友人のキミが説得したほうが平和的な解決が見込まれるからね。だからもう一人、葛葉絃汰君のドライバー回収はキミの下のお兄さんをお願いしてあるんだ。彼は了承したよ」

やはり。心の中で碧沙は思った。貴虎が何かを光実に見かしてから、光実はユグドラシル側だという気がしていた。

「わたしなんか…そんなことできるんでしょうか」

「それについては心配要らない」

凌馬はある物を碧沙の前に置いた。それは咲たちが使っていた戦極ドライバーと寸分違わぬ物だった。

「これ……」

「量産型だからキミでも使える。錠前はお兄さんのお下がりだけど」

碧沙は量産型ドライバーとメロンの錠前を持ち上げた。重い。大きい。咲や兄たちは今日までこんな物を負って戦ってきたのかと思うと、泣きたい気持ちになった。

「キミに貸してあげよう。室井咲君がドライバーの引き渡しを渋るならこれを使ってくれ」

「それはわたしに、咲と戦えとおっしゃってるんですか？」

「そう聞こえたならそうなんだろうね」

咲から戦極ドライバーを奪う。

咲から、力を奪う。

力がなくなった咲はインベスともアーマードライダーとも戦えなくなる。

どこかで一度は望んだことだった。戦いのない日常で、ごっこ遊びのビートライダーズに戻って、また踊り始める――

碧沙は大きく息を吸い、吐いた。

「申し訳ありませんけど、こちらはお返しします」

碧沙は量産型ドライバーとメロンロックシードを凌馬に差し返した。

「――何故だい？ キミは兄さんの力になりたいんだろう。それさえあればキミは貴虎たちと同じ所に並び立てるんだよ？」

「それでも、きっとこれはわたしが着けちゃいけない物ですから」

「確かに貴虎は家族を大切にする男だから、キミがこれを使ったら心配するだろうが」

「それもありますけど、もっと根本的なことなんです」

碧沙は凌馬をまっすぐ見上げた。

「大事な人がキズつくよりは、自分がキズついたほうがいい。わた

し而知ってる貴虎兄さんは、そういう人です。何でか呉島の男の人ってそうなんです。貴兄さんも、光兄さんも」

本当にしようがない、と。呉島碧沙は輝かんばかりの笑顔を浮かべた。だってそんなところさえ、碧沙には愛しくてならない兄たちなのだ。

「いちばん最初にベルトの被験者になったのも、一人で戦ってたのも、だからだと思います。これにたよったら、貴兄さんが守ろうとしてくれたもの、全部ふみにじっちゃいます。だからこれは頂けません。ごめんなさい」

碧沙はぺこりと凌馬に向けて頭を下げた。

「……そうか。ではキミはどうやって室井咲から戦極ドライバーを回収してくるのかな？」

「話します。正直に。それが一番咲には効きますから。わたしたちの間には、わたしたちだけの言葉があるんですもの」

第64話　へキサの「おねがい」

咲がスクールのレッスンを終えて片づけをしていると、後ろからへキサが声をかけてきた。

「ひさびさに野外劇場に行かない？」

現在、リトルスターメインは他のスクール生より早いコマでレッスンを受けている。講師がクレームをつける保護者へ示した妥協案だ。リトルスターメインだけ他の生徒とはちがう時間帯で練習させると。なので少し前まではステージに当てていた時間で、咲たちはダンスのレッスンを受けている。

「いいよ。どーせ早く帰ってもお説教されるだけだし」

「ありがとう」

咲はランドセルとユニフォーム袋を担ぎ、教室を出て行くへキサに続いた。

何週間かぶりに訪れた野外劇場は、無人であること以外は、最後に踊った日から何も変わっていなかった。

咲とヘキサは客席のベンチの一つに並んで座った。

「咲、おねがいがあるの」

ヘキサは世間話もおしゃべりもなく告げた。

「どんなこと？」

「咲が持つてる戦極ドライバーを、ユグドラシル・コーポレーションに返してほしいの」

咲は言葉を失った。ショックだったわけでも、傷ついたわけでもない。ただ、驚いた。ユグドラシル・コーポレーションはもっと強硬なやり方で咲からベルトを取り上げるものと思い込んでいた。それがこんな平和的な相手と手段で来るとは。

「だめ？」

「えーと……」

咲はランドセルから戦極ドライバーを取り出し、膝の上に置いた。これを手に入れてから様々なことがあった。これを捨てたいと思った時もあった。――けれど。

「ヘキサ。これ買う時、みんなでお金出したの、覚えてる？」

「わすれるわけないわ」

「これがあたしだけのお金か、ヘキサだけのお金で買った物なら、あたし、返せた。でもこれはちがう。あたしのもので、ヘキサのものだけど、それ以上にリトルスターマインみんなのもの。だからこ

れをユグドラシルに返す時は、みんなが全員いいよって言った時だけ」

このベルトはチームのために買った、チームの所有物だ。

一番初めの前提を、咲は忘れていなかった。

「――わたしが返してって『おねがい』しても、だめなのね」

ヘキサは寂しげに笑んだ。

「それはみんな次第だけど。――とりあえず今はだめ。みんなの意見を聞かない内は、あたし、これ、ヘキサのお兄さんにだって渡すつもりないから」

ヘキサの長兄は恐ろしい実力の持ち主だと、分かった上で口にした。

「……とまあ、これがあたしの意見だけど。ベルト返さないとヘキサはこまるのよね？」

「うん。今は貴兄さんも光兄さんも不安定だから。わたしはちゃんと一人でもできるよ、って伝えて安心させてあげたい」

咲はベンチを立ち上がった。

「じゃあやっぱり、あたしたちだけでなやんでないで、みんなに相談しよっか」

「話してだいじょうぶかしら」

「あたしとヘキサのダブルでコンボよ？ みんなが信じないわけないじゃない。こまった時はナカマに相談する。これ、人生の大鉄則よ」

咲はヘキサに手を伸べた。ヘキサははにかみ、咲の手を握り返して立ち上がった。

いつだってヘキサのこのぬくもりが、室井咲をまっすぐに支えてくれる。

第65話 賭け

次の日。咲とヘキサはリトルスターマインの仲間を野外劇場に集めて、どうすればヘキサが兄との関係を壊さず、咲が戦極ドライバーを手放さずにすむか、話し合いの場を持った。

「ロックシードが生る森だけでもヒジョーシキなのに、そのベルト造ったのが天下のユグドラシルとか……どこまでヒニチジョーを突っ走るのよあんたたち」

ベルトの詳細について伝えたナッツの第一声である。

「ごめんね、ナッツ。どーもあたしたち、そういう星の下に産まれたみたいで」

「こういう時、下手に常識から物事を否定しないコドモの感性はいい。」

「ヘキサがユグ社のエライ人の妹って違和感ねーな。な、チューヤん」

「……むしろしっくり」

「そんなにわたし、おかしかった？」

「おかしかったってゆーか」

「……にじみ出てた」

「とりあえず今は、そのベルトのこと話し合う集まりってことでおk?」

「オーケーよ、トモ。じゃんじゃん案ちょーだい」

コドモたちは一斉に頭をひねった。

「いっぺん返して盗み出す……のはそもそも返したベルトがどこにあるのか分かんないもんねえ」

「ハイ！ 粘土でニセモノ作るっ」

「モン太それさすがにムリあるっしょー」

「……でもニセモノはいい案じゃ？」

「バレた時へキサが責められるから却下」

「あー、へキサが返す、って部分は守らなきゃなのかあ。返した上で――」

「返した上で向こうがこっちに自主的に送り返してくれたらいい――ってこと？」

「それいいっ。どうすれば向こうをその気にさせられっかだな」

話し合いの結果――いざドライバーを返す日になって、咲たちがしたのは、返す戦極ドライバーに手紙を添える、それだけだった。

手紙は戦極凌馬宛て。内容はシンプルに「もっとドライバーの力を使いたいからもう一度ベルトを貸してください」というものにした。この文面を考え出すまでにリトルスターマインは1時間ディスプレイカッションした。

そして、硬筆が得意なトモの書いた下書きを、サインペンで咲がなぞって完成させた。

百均で買ったプレゼントパックに、戦極ドライバーと、ヒマワリとドラゴンフルーツの錠前を納めて蓋を閉じる。

このドライバー入りの箱をヘキサが貴虎に渡し、貴虎から凌馬が受け取る。これで「ヘキサがベルトを取り返した」という点はクリアだ。

そこから先こそが賭け。

もしもドライバーに添えた手紙が凌馬に届かなければ。届いても凌馬が相手にしなければ。戦極ドライバーは二度と咲の手に戻って来ない。

だがもしも、貴虎や湊が手紙を握り潰さず確かに凌馬に届け、凌馬が咲の手紙に興味を持ってくれるなら――

その日の咲はダンススクールでのレッスンを終えるや、ステージは臨時休業で、自宅に急いだ。

「ただいまっ」

どこにでもある一軒家の自宅玄関から居間へ一直線。居間のテーブルの上には様々な郵送品が並んでいる。

咲はその中から、数日前に送ったのと同じ箱を見つけて、引っ掴んで自分の部屋に駆け込んだ。

宛先は咲個人。差出人は空欄。咲はベリベリと封を破って箱を開け——その顔に笑みが広がるのを抑えきれなかった。

箱にはていねいに梱包された咲用の戦極ドライバーと、いくつかの錠前が入っていた。錠前はヒマワリとドラゴンフルーツの他にもあったので、言外に咲に被験者になれとでも伝えているのだろう。

ともあれ、戦極ドライバーは咲の下に戻ってきた。

——咲たちは賭けに勝ったのだ。

第66話 Q・背負う？

「とゆーわけで、アーマードライダー月花、大・復・活！」

わー、とヘキサとモン太が拍手をくれた。

ちなみに咲は変身していない。ベルトを装着してポーズを取っているだけだ。

「んできあ、ドライバーといっしょにこんなん入ってたんだけど」

咲は野外劇場のステージを降りて仲間の輪に戻り、新しい二つの錠前を見やすいように輪の中心に置いた。

「ランクBとCか。パッと見、パッションフルーツとなんかの豆って感じだな」

「豆ってくだものだっけ？」

「莢果って分類だからくだものでいいんじゃない？ こっちなにかしら。大豆？」

「……ソイジ〇イ」

「チューやん、アウト」

ひとしきり笑ってから、咲は劇場の客席を見回した。

一人もいない。ここのところ忙しく「りんじきゅうぎょう」ばかりだったから、しばらくはステージがないと思われたか。あるいは

装着済みのベルトになじんだドラゴンフルーツの錠前をセットし、カットする。頭上から落ちたドラゴンフルーツのアームズが咲を鎧い、月花へと変えた。

《ドラゴンフルーツアームズ Bomb Voyage》

『だっ、りゃあ!!』

まずはインベスに体当たりし、インベスをランドセルの女子から遠ざけた。その隙に、体格が一番大きいチューやんが女子たちを両腕で抱え上げてチームメイトの下に戻った。

(この時間、下校した児童はまだいっぱい来る。早めに終わらせないと)

インベスが長い爪を揮ってきたので、DFバトンで爪を受け流しつつ、ヘキサたちから距離を取っていく。

(このインベスも、初瀬くんみたいにヘルヘイムの果実を食べた人間なのかな?)

ふいに浮かんだ疑問で、手が停まった。

「咲っ！」

へキサの呼び声ではっとしたが、遅かった。インベスの鋭い爪が
月花の腹を抉り飛ばした。

第67話 A・背負う

インベスによって吹き飛ばされ転がる月花。

『だっ、うびゃー!?』

月花はイチョウの葉の上をざざざあっと滑って、体の上下がひっくり返り、木にぶつかって止まった。

腹がずくずくと痛んだが、バトルスーツのおかげで咲本体は無事だ。

（お父さんかな。お母さんかな。おじいちゃんかな。おばあちゃんかな。女の子かな、男の子かな。歳は、トモダチは、ガッコーは）

——このインベスはヘルヘイムの森に棲んでいたモノか、人間が果実を食べたモノか——

人間がインベスになりうることはヘキサにも、チームの誰にも伝えていない。仲間に隠し事はしない、がモットーの咲の、たった一つのカクシゴト。

インベスが月花へ迫ってくる。月花は地面に両手を突いて前転で起き上がり、さらに回転してインベスを蹴って退けた。

『ヘキサ、錠前！ どれでもいいから！』

「う、うん！」

ヘキサが投げたパインの錠前をキャッチーする寸前、錠前と月花の間にインベスが割って入り、そのままパインロックシードをぱくりと飲み込んでしまった。

『んな…っ！』

「そんなんっ」

『こなくそお！』

インベスがジャッコインベスへと変容した。後ろで悲鳴が上がる。月花はイチヨウの葉の上を滑るように仲間の下へ戻った。

「ごめん咲！ これ！」

『オツケー！』

ジャッコインベスが向かってくる。月花はDFボムを投げてその突進を阻み、その隙にドラゴンフルーツの錠前を外し、改めて受け取った錠前をバツクルに嵌めた。

《パッションフルーツアームズ！ Time on the Bladedance!》

炎の果実の鎧が消え、黄熟した果実のアームズが月花を鎧う。

時計草のモチーフをあしらったライドウェア。両手には時計塔の長針と短針をそのまま持ってきたかのような双刃。

（前はマスクって顔見えなくてジャマって思ったけど、今は、あつ

てよかったな。どんな顔しちゃうか分かったもんじゃないもん)

ビャッコインベスへと走る。走った勢いのまま、月花は双刃でビャッコインベスを斬りつけた。

要領はバトンを操る時と変わらない。踊るように回って連撃する。

一度ビャッコインベスから離れた月花は、双刃を繋げてダブルセイバーにし、カッティングブレードを二度叩き下ろす。

《パッションフルーツスカッシュュ！ パッションバースト！》

月花は高くジャンプし、インベスの真上に達したところで、ダブルセイバーを振り被った。

(初瀬くんの時止めてあげることさえできなかった。これからはそんなことしない。どんなに悲しくなっても、最後まで)

『せやあああああッッ！！』

振り下ろしたダブルセイバーの軌道を黄色いソニックウェーブが描く。ソニックウェーブはインベスに着火し、爆散させた。

着地した月花はそれを見届け、ロックシードを閉じて変身を解除した。

朦々と上がる煙を、咲は燃え尽きるまで見つめ。そんな咲の背を、仲間たちが見つめていた。

第68話 悪者はだれ？

咲は紘汰の後ろに付いて、チーム鎧武のガレージに入った。

——つい先ほどのことだ。今日はチーム鎧武が司会でトップランカーの会合が開かれる日だった。その会合に向かっている途中で、咲たちは鎧武がライオンインベスとカミキリンベスと戦っている場面に出くわした。

咲は一緒にいたナッツとチューやんを先に行かせ、自身は月花に変身して鎧武と共に戦い、インベスを撃退した。

そしてようやく今、チーム鎧武のガレージに紘汰ともども来ることができたのだ。

「ただいま」

「おじゃまします」

「おかえりなさい。咲ちゃんはいらっしゃい」

「……ダメだったんだな」

ガレージの中には、人が集まっていたらしき形跡はあるが、いるのはチーム鎧武と、ナッツとチューやんだけだ。交渉は決裂したのだろうか。咲にも読み取れた。

舞がテーブルを叩くように立ち上がった。

「あたし、バロンのところに行く！ チャッキーたちはイベン

トの準備始めてて」

「待ってくださいっ、舞さん一人じゃ」

「俺が行くっ」

舞は咲の横を歩き、傍らの絃汰は舞を追って、それぞれガレージを出て行った。

彼らを見送り、咲は階段を降りて仲間を目をやった。

「どうなったの？」

「『バロンの戒斗とは踊れない』だそうよ。被害者ヅラしてくれちゃってさ。だれか一人悪者にして、それで何がカイケツするのよ。セキニン逃れもイイとこだわ」

窓際のソファーにいたナッツが、床に届かない足をぶらぶらさせる。ナッツの横に立つチューやんも合わせて項垂れた。

「……悪いのは、バロンのカイトだけじゃないのに」

「うん……これは僕たち全員が悪いことだ。バロンがいてもいなくても、ビートライダーズはインベスゲームでの縄張り争いをした。僕らでさえそうだったんだから」

光実の核心を突く言葉に、チーム鎧武のメンバーは一様に俯いた。

「……咲たちはどうだったんだ」

「あ、そうよそれ。ここにいるってことはちゃんと退治できたって

こと？」

「うん。紘汰さんと二人がかりだったから」

ユグドラシルを脱走してから、咲は前より紘汰を近くに感じるようになった。それは決して色めいたものではなく、同じく辛い真実を知っている者同士のシンパシーだ。

「ただ、周り人たちの反応はあんまし……」

「また逃げられた？」

「おっしゃるとーり」

カウンタ―にいたラットがテーブルに顎を突いた。

「紘汰さんも咲ちゃんもこんな頑張ってるのになー」

リカとチャッキーも表情を暗くする。

「知らない人からはインベスもアーマードライダーも同じに見えちゃうんだろうね」

「どう違うんだって聞かれたらどう答えていいか分かんないし」

「やっぱり今度のイベントを成功させて、少しでも名誉挽回するっきゃないのかなあ」

「ナツちゃん難しい言葉知ってるねー」

ナツツとリカのやりとりを背に、光実がテーブルへ行き、何気なくテレビのリモコンを点けた。

「今のところ、僕らにできるのはそれくらいなものだ……よ……」

そこに流れた映像は——光実だけでなく、ガレージにいた全員がテレビ前に集まるほど威力があるものだった。

第69話 DJサガラの援護

「舞」

「――」

「まーいっ」

「……ねえ絃汰。ほんとなのかな。戒斗がバロンやめたって」

舞は路上でぴたりと立ち止まった。後ろで絃汰も立ち止まる気配。

「バロンの連中がそんな嘘言う必要はないから、マジなんだろうな」

チームバロンの戒斗とは踊れないと他のチームが言うから、舞は戒斗を説得しに行った。

だが、白いカーディーラーに戒斗はいなかった。

やめたのだ、とザックとペコから聞かされた。さらにはペコから、合同ダンスイベントにチームバロンも参加させてくれと逆に頼まれた。

「絃汰、知ってたの」

「知らなかったよ。でももしかしてやるかも、とは思ってた」

舞は俯いたまま両手を握りしめる。

（もしかすると戒斗、自分が合同イベントの邪魔になると思ったからやめたんじゃない……だったら、どうしよう。あたしのしたことが、戒斗からダンスを奪ったんだとしたら――）

「あんま重く考えんなよ」

「絃汰……」

「あいつのことだから、舞が思うような殊勝な理由でやめたとは限らないって。とにかく、チームバロンが参加するんだ。これでもう一度みんなを説得しに——」

「絃汰さん！ 舞さん！」

目の前の角から光実が飛び出して来た。しかも何やら興奮した様子で。

「どうしたの、ミッチ」

「これ、見てください」

光実が差し出したのは彼のスマートホン。正確にはその画面だ。

《ハロー、沢芽シティ！ 帰って来たぜ、DJサガラが！ 今日一発目のニュースは、ななななあんと！ ビートライダーズオールスターステージの開催のお知らせだ！》

DJサガラの映像を観たとたん、絃汰は険しく眉根を寄せた。最近増えた、舞の知らない、舞が遠く感じる絃汰の姿。

《さながら戦国時代のように暴れまくってたビートライダーズだが、彼らは抗争終了を宣言し、近々全チーム合同でダンスイベントを開催するそうだ。これを見逃す手はないだろう？》

舞は紘汰や光実と顔を見合わせた。確かに「ビートライダーズホットライン」は情報配信番組だが、いつのまに合同イベントの情報が彼に入ったのか。

「実はこの合同ダンスイベント、過去に例がなかったわけじゃないんだぜ？　まずはこの映像を観てくれ。チエケラ！」

舞は目を見開いた。流れたのは、チーム鎧武とチームリトルスターマインのコラボレーション・ステージの映像だったのだ。

映像は、凰蓮が介入する直前までの分が流れて、閉じた。

「なかなかビートに乗ったライダーズだろう？　この時こそたった2チームでの開催だったが、今度のステージはスケールが違うぜ！　何せビートライダーズのトップランカーが大集結だ。どうだい？　そんな世紀のビッグショーを観てみたことはないか？」

画面にリアルタイムでのコメントが流れる。「すげえ」「きれい」「かっけー」――

もうぼんやりとしか思い出せない。自分たちより一回り小さな少年少女との共演。

合同ステージは凰蓮の介入でうやむやとなり、咲が泣いてしまったりと、大変だったことばかりが記憶に先行していた。

それが、ビートライダーズが一番苦しい時に、舞を助けてくれた。涙が出そうだ。

「舞っ」
「舞さん」

味方が誰もいない、独りぼっちの戦いだと思っていた。けれども違った。

味方は過去の自分たち自身。つまり、足跡そくせき。歩んだ道が間違いでなかったという確信が、舞たちの強力な味方。

「くっあたし！ もっかい声かけ行ってくる！」

「僕もお供しますっ」

「じゃあ俺は別のチーム回ってみるな！」

舞は今までとは打って変わった明るい足取りと表情で、走り出した。

第70話 合同ダンスイベント前夜

合同ダンスイベントを明日に控えた夜。

呉島邸の光実の部屋では、光実と碧沙が、明日のイベントの会場になる場所の見取り図を間に、最終打ち合わせをしていた。

主催はチーム鎧武で、光実は実行委員長のようなポジションだ。やるのが大胆な分、最後まで粗がないか確かめる必要がある。

チームの位置や開始時刻、何度確かめてもやりすぎということはない。

「正面がこっちで——こっち向いてやればいいのよね」

「設置する時はみんなユニフォーム隠してもらおうから——」

「じゃあ待機中は——」

「この時間帯でバサッと登場して——」

「スピーカーはリースステージのと同じの借りれたから、タイマーで——」

そうしていると、ノックの音がした。光実は内心訝しむ。音が近すぎる。

「夜更かしは感心しないぞ」

すでにドアは開けられていた。貴虎が腕組みをしてそこに立って

いた。貴虎が音もなく開けたドアをノックしたから近く聞こえたのだ。

「ごめんなさい、貴兄さん。どうしてもやっておきたかったの」

「――宿題か？」

「うん。明日が期限なんだ。それに人の意見が要る課題だから、僕も碧沙も」

「今夜だけ許して？ ね？」

貴虎は光実と碧沙をじーっと見る。光実は心臓を跳ねさせながら笑顔を精一杯保った。

「……しょうがないな。朝寝坊しないように気をつけるんだぞ」

「はあい」

ドアが閉じる。貴虎の足音が聴こえなくなるまで待って、改めて光実と碧沙は向き直った。

「……バレた？」

「大丈夫、だと思っけど」

正直不安だ。ドアが開けられたタイミングによっては、明日の計画を聞かれた恐れもある。だがそれだと、貴虎は知っていて光実と碧沙の行いを黙認したことになる。

大きな真実を知った光実だが、まだまだ貴虎の本心は読み取れない。

「明日のステージが終わったら、貴兄さん、怒るかしら」

「碧沙がビートライダーズしてるのはまだバレてないからねえ」

光実にはスパイというお題目がある。敵の懐に入り込むためにダンスをしていると言えはいい。だが碧沙にはフォローできる材料がない。

「いっそのこと、碧沙も戦極さんに頼まれたことにしちゃおうか」

「それはさすがに……あの人に悪い気がする。それに、フリーでも咲たちをスパイしてるなんて……」

「——そうだったね。ごめん。今の無しで」

しおれる碧沙の髪を梳いてやる。——曲がらない性格なのがこの妹の魅力だった。

「兄さんよりも、明日やることのほうは、下手すると警察沙汰かもね」

話題を逸らすために言ったが、光実の表情は締まりない。光実自身、楽しみでしようがないのだ。

光実は何も貴虎への反発だけでビートライダーズに入ったのではない。ダンスは、呉島光実にとって大切なものになったのだ。

「そうだったらわたしが兄さん抱えて逃げるから」

「碧沙に僕は抱えられないんじゃないかなあ」

「今ちょっとバカにしたでしょ」

「してないよ。どっちかというと、僕が碧沙を抱えて逃げたいかな

って」

「前にリフトの練習した時みたいに？」

「そうそう。あ、せっかくだから明日やろうか、リフト。前はせっかく練習したのにできなかったからさ」

「ほんとっ？ やった、兄さん大好き！」

碧沙は光実に飛びついて笑った。光実も膝の上に乗った妹につられて笑っていた。

沢芽市ミッドタウン芝生広場——沢芽市の象徴、ユグドラシル・タワー。そのメインゲート前の広場には、その日、異様なモノがあった。

「白い布を被った四角い謎のものがいくつも並んでいる。通りすがりの人々には、足を止めて首を傾げる人もいた。」

時刻は17時まで1分を切っている。

「3…2…1…ゼロ!!」

ぴったり17時、白い布が剥ぎ取られた。否、白い布の下から、即席ステージと、その上下に立った人間が現れた。

青い歌舞伎柄の少女少女と、黒と赤の男たち。トランザットンそして、ピンクと黄色のコドモたち。

ビートルライダーズの合同イベント会場に、彼らはこの場所を、ちようどアフター5に重なる時間帯に、ステージジャックしたのだ。

これはビートルライダーズ同士の抗争終了宣言であると同時に、ユグドラシル・コーポレーションへの宣戦布告でもあった。

元はといえば、ユグドラシル・コーポレーションがインベスゲームを流行らせた黒幕だ。それは舞や光実が説得して回った時にどの

チームにも周知のこととなっている。

——これ以上、自分たちのダンスを奪わせない。穢させない。

それらの決意をユグドラシルに見せつけるためにこの場を選ぶことを、光実とヘキサが提案した。咲は大いに賛同した。

だが、現実はその綺麗に運んではくれない。

「お客さんが……」

咲の斜め後ろにいたトモが呆然と呟いた。

——まず客が両手の指で数えられる程度しか来ていない。人が通っても、横目でちらりと見ては家路を急ぐ人ばかり。せっかく留まった人々も、ビートライダーズだと分かるやそそくさと去って行く。

さらに、追い打ちとばかりに凰蓮・ピエール・アルフォンゾが現れて。

「M・etonne！ 閑古鳥がピーチクパーチク鳴いてるわね。無様ねえく。しかも合同イベントなんて言いながら、他のチームはあ？？」

そう。ここにいるチームは、リトルスターメインと、鎧武とバロンの3チームのみ。有象無象を含めれば数十にも及ぶチームの1組

もこの場にはいない。

「これで証明されたわね。アナタたちがやってたのは、アマチュアのお遊びだってこと。さ、迷惑になる前に、さっさと解散しなさい？」

凰蓮は哄笑する。

咲は爪が食い込むほど拳を握りしめた。いっそ変身して追い払ってやろうか。どうせ相手もアーマードライダーなのだ、少々以上にケガをさせたところで――

「うっせーんだよカマ野郎」

「はう！？」

客の一人が凰蓮を後ろから蹴り倒した。チーム鎧武もチームバロンもあ然とする。あれは痛い。

しかもその蹴った人物というのが。

「「「センサーー！」」」

咲たちが通うダンススクールの講師の女だった。

「チーッス。チラシ貰ったから観に来てやったぞー」

講師はひらひらとチラシを上げて振る。咲は仲間と顔を見合わせた。確かに講師にチラシを渡しはしたが、本当に来るとは思ってい

なかった。

「イイ歳した大人が、マナーがなってねんだよ。こちら観に来たくて来たんだい。茶々入れるくらいなら帰れっての」

「あだ！ いだ！？ ちょっとアナタ、ゲシゲシするんじゃないわよ！」

「せ、せんせー……」

かける言葉もないとはこのことか。バロンはもちろん、鎧武や龍玄が二人がかりでやっと競り合ったアーマードライダーブルーボの中の人にこの暴言と暴力。

「さてと、あんたたち——ああ、違う違う、あんたらじゃない、後ろの子たち」

講師が次にビシッと指差したのは、チームバロンの斜め後ろにいたリトルスターマイン。

凰蓮の惨状を見た後だけに、咲たちは呼ばれただけで縮み上がった。

「人目がなきや演技できないなんて教えた覚えはあたしにやないよ。特に出場経験も実績もない連中が、お客さんの人数に文句つけるんじゃない。はるばる来て下さった方たちに失礼だ。プロにでもなったつもりかい？」

「あ……」

重い。一度はプロの舞台に立ったことがある講師だからこそ、彼

女の言葉には重みがある。

咲たちが一様に俯いていると、講師はしょうがない、とでも言い
たげにニカッと笑った。

「踊りなさい。アマチュアだろうが遊びだろうが、あんたたちはダ
ンサーだ」

広場は水を打ったように静まり返った。

第72話 参戦！ アーマードライダーナックル

「――踊ろう」

やがて掠れた声で、けれどはっきりと、舞が言った。

「あの人の、言う通りだよ。お客さんが、一人でもいるなら、踊ろう。みんなで、みんなでビートライダーズの、意地を、意地を見せようっ」

「やりましょう」

光実も舞に続く。

「ここで踊らなきゃ、一生後悔する！」

舞と光実の言葉に、次々と続く言葉が上がる。

咲が講師を見ると、講師は満面の笑みを返した。

そうだった。アマチュアであろうがごっこ遊びであろうが恥じることなど何もなかったのに。邪魔されようが、やめる道理などなかったのに。

「咲」

「へキサ……」

「踊りましょ。いつもどおりに。センサーが教えてくれたとおりに」

「――、うん」

へキサが差し出した手。咲は拳を解いて、へキサの手を握り返した。

「ぐぬぬっ……ならしかたないわね！」

凰蓮が手を叩いた。するとクラックが開き、インベスが3体召喚される。観客や野次馬から悲鳴が上がった。

「皆さーん！ またビートライダーズがアブナイ怪物を出しましたよ〜」

（何てヤツ！ ビートライダーズが怪物を出すからやっつけに来たんじゃなかったの！？ 自分でインベス出して、あたしたちのせいにして、めっちゃくちゃだこいつ！）

咲はへキサを見返した。へキサは肯く。咲はドライバーを出しながら即席ステージを飛び降り、紘汰の横に並んだ。

紘汰は、咲の行動を受け容れた。

「センサーは離れててっ。——これ以上はあたしたちがゆるさない」

「ああ。邪魔させるか。ここは俺たちのステージだ！」

「変身！！」

《 オレンジアームズ 花道・オン・ステージ 》

《 ドラゴンフルーツアームズ Bomb Voyage 》

紘汰は鎧武に、咲は月花にそれぞれ同時に変身し、即席ステージに上がったインベスに挑んだ。

『そこは俺たちのステージだって——！』

『——言ってるでしょーが！』

二人で息を合わせてインベスを即席ステージから蹴り落とす。そして、次々と増えるインベスと、さらにはブラーボに変身した凰蓮との乱戦にもつれ込んでいく。

「紘汰さん、僕もいきますっ」

『ここは俺たちに任せろ！』

「——待ってくれ！！」

それはこの場面で上がるはずがない人物からの声だった。

「ザック、まさかっ」

「今ここは鎧武だけのステージじゃない。リトルスターメインだけのステージでもない。お前たちだけに戦わせない！」

ザックが取り出したのは、量産型の戦極ドライバー。月花は驚く。あれは戒斗がユグドラシルから脱走する時に持ち出したものだ。

ザックは力強くベルトを装着してから、クルミの錠前を開錠し、バックルにセットした。腕は下から上へ。カッティングブレードが叩き落とされる。

「変身ッ！！」

《 クルミアームズ M i s t e r K n u c k l e m a n 》

クラックが開き、クルミの形をしたアームズが落ちて、ザックを装甲した。巨大な拳を携えた、クルミ色のアーマードライダーがそこにいた。

『俺はチームバロンのリーダー、ザック―アーマードライダーナツクルだ！！』

その名乗りは、月花や鎧武、他のビートライダーズが一瞬戦いを忘れるほど雄々しく猛々しかった。

性懲りもなく即席ステージに上がったインベスを、ナツクルは巨大な拳で殴りつける。ラッシュユ、アッパー、そしてストレートパンチが決まる。インベスが爆散した。

『インベスは任せてくれ！』

クルミをモチーフとした拳は次々とインベスを殴りつけ、粉碎する。

ナツクルの勇姿は月花を、そして鎧武を勢いづけるには充分だった。

『紘汰くん！』

『おう！』

『『おおおおおおおッ！！』』

月花と鎧武、二人がかりでブラーボに体当たりし、ブラーボを地面に押し倒して押さえつけた。

『ちょ、どきなさいよ！』

『今だ、舞！ 踊れ！』

『ヘキサ、お願い——あたしたちの分も！』

舞が、ヘキサが、肯き返してくれた。

改めてチーム鎧武とチームバロンが、前奏のポーズを決め直した時だった。後ろに舞台代わりにかけていた幕が落ちた。

幕の向こうは、黄、マゼンタ、空色、白、黒——様々な色で彩られていた。

今まで誘いをかけたチームだけではない、何組かは自主参加のチームだ。

今や芝生広場の半分はビートルライダーズで埋め尽くされていた。

「俺たちも一緒に！」

「黙ってられるわけじゃないじゃないっ」

「みんな——よおっし！ 踊ろう！」

舞の一声に合わせたかのように、SEが入る。チームそれぞれが一斉にポーズを決めた。

一瞬の静寂。そしてスピーカーから流れ出す音楽。

ビートライダーズのオールスターステージが、ここに幕を上げた。

光実がチーム鎧武の即席ステージで、舞たちと共にダンスを披露していた。

（絃汰さんが「任せろ」って言ったからステージに立ったけど、本当にこれでよかったのか？ 今からでも変身して、絃汰さんや咲ちゃんの援護をすべきじゃないのか？）

音楽がやんだのは、そんな光実の迷いを讀んだかのようなタイミングだった。

——彼は知らない。城乃内がスピーカーからプレイヤーズパスを抜き、音楽を止めたことを。

いくら彼らがダンスの才に長けていても、バックミュージックなしには踊れない。ビートライダーズの間には気まずい空気が流れ始め

る――

「音楽ならあります!!」

飛び出したのはリトルスターマインの一人――碧沙だった。

「碧沙…!?!」

「兄さん、手伝ってっ」

チーム鎧武のステージまで来た碧沙は、光実の手を取ってスピーカーへ走った。妹のもう片方の手にはCDラジカセ。

（そうか！ ラジカセの音楽をスピーカーでボリューム上げて流せば）

碧沙がCDの曲を今回のものに合わせる間に、光実はコードをラジカセとスピーカーに繋ぎ、ボリュームを調整した。

やがて停まった音楽と同じ音楽がスピーカーから溢れ出した。ビートライダーズが歓喜に沸く。

「踊ろ、兄さん」

ヘキサが手を差し出す。

光実が初めて見る妹の顔がそこにはあった。これがリトルスターマインとしての、「ヘキサ」としての顔。

兄妹ではなく、同じくダンスを愛する者の、ダンサーの貌。

「うん——みんな！ 踊りましょう！」

光実 はヘキサの手を取った。——迷いは振り切った。今はダンスこそ呉島光実の戦場だ。

若者たちは再び踊り始める。

サウンドに合わせて、チームごとに己の色のステップを踏む。

彼らはビートライダーズ。刻むビートにその身を乗せて舞い踊る少年少女。

月花は戦いの最中であってさえ感動していた。

ヘキサが光実と二人で踊っている。兄妹が手を取り合って最前列で、まるでバレエのように。

初めての時は失敗したコラボレーション・ダンス。それが今日、ここで、実現した。

（ヘキサがずっとやりたかったこと。お兄さんのミツチくんといっしょに踊ること。これを最後までやり通させてあげなきゃ）

ステージに向かおうとするインベスを、片っ端からDFバトンで叩き返す。その中の一体のインベスが客の近くに倒れたことで観客の列が割れた。

「ゲッ」

『あー！』

割れた列の後ろから出てきたメガネの男。これが誰かを知らない月花ではない。

月花は回れ右をして、BGMに負けない大声で叫んだ。

『チームインヴィットさーん！
リーダーの城乃内サンここにいますよー！』

「うわこら！ 何てこと…っ」

わっ、と駆けつけたインヴィットの女子たちが、すばやく城乃内を取り囲んだ。

わいのわいのと城乃内をインヴィットのステージに連行するマゼンタカラーの女子たち。何のかんのと、ステージに上げられるとダンスーの血が騒ぐのか、踊り始めた城乃内。

月花はそれを見届け、ナツクルの援護に走った。月花はナツクルの前にいたインベスにドロップキックを食らわせて着地する。

『ぶじ?』

『この程度で泣き言なんか吐けるか』

『よかった。アッチ押さえたから、もうインベス増えないよ』

『……お前ってサイッコーのクソチビだ』

インベスが月花とナツクルに飛びかかってくる。月花はDFロッドで、ナツクルは巨拳で返り討ちにした。

すると今度は下級インベスではなく、セイリュウインベスが現れた。

まずい、と月花は思う。このインベスは確か火を吐く種類だったはずだ。

(DFボムで相殺する? だめ、それじゃ後ろで踊ってるヘキサや舞さんたちもあぶない)

セイリュウインベスがカッと口を開く。

だがセイリュウインベスが火を噴くことはなかった。セイリュウ

インベスの口を塞ぐように白い槍を横薙ぎにした者がいたのだ。
それはバナナの鎧をまとった、赤い騎士だった。

『戦いはまだまだのようだな』

『戒斗！？』

『何でっ？ ビートライダーズ抜けたって』

バロンはバナスピアを振り抜き、月花とナックルの横まで下がってきた。

『室井。葛葉のほうへ行け。ここは俺とこいつで十分だ』

『わ、わかった』

月花はバロンとナックルから離れて、ブラーボと戦う鎧武の下へ急行した。

鎧武は戦極ドライバーを何かいじっている。新しいアームズかもしれない。卑怯にもブラーボが武器を投げて邪魔しようとしたので、月花はDFロッドを外してバトンにして投げた。バトンがブラーボの武器にぶつかり、弾き返す。

《 ロックオン・ミックス ジンバーレモン 》

同時に、鎧武のアームズチェンジが終わった。今までに見たことのない、陣羽織を着た武将のようなデザインだ。

『サンキュー、咲ちゃんっ』

鎧武は月花に礼を言ってからブラーボへ向かっていった。相変わらず律儀な人だ。そして、相変わらず彼の背中は頼もしい。

(って感心してる場合じゃない。紘汰くんのフォローしなきゃ)

鎧武とブラーボは少ない観客の列を割って広場から離れて行く。

月花も彼らの後を追おうとして――

『ひゃあ!』

顔面から盛大に前に転んだ。背中にセイリユウインベスがぶつかったのだ。

『スマン! 加減間違えた!』

後ろから飛んでくるナツクルの謝罪。月花も変身したての頃はそうだったからよく分かるが、何もこんなタイミングで。

ぶつかったことで敵意が移ったのか、セイリユウインベスは月花に牙を剥いた。

月花はドラゴンフルーツの錠前を外し、パッションフルーツの錠前をバックルに嵌めてカッティングブレードを拳で叩き落とした。

最終話 戦極乱世へ

《 パッションフルーツアームズ Time on the B
ladedance 》

『すう———はああ!!』

時針を象った双刃でセイリュウインベスに交互に斬りつけ、さらに回って3、4撃を決める。双刃を繋げてダブルセイバーにする。

『仕上げはあ——ヨロシクっ!!』

大上段からの一斬の勢いでセイリュウインベスをナックルとバロンのほうへ吹き飛ばす。

バロンがバナスピアをセイリュウインベスに突き立てて動きを止める。

『ザック!!』

『これで最後だあ!!』

《 クルミオーレ! 》

ナックルの巨拳が巨大なソニックブームとなり、セイリュウインベスをついに粉碎した。

セイリユウインベスとの決着が、ラストのポーズを決めるタイミングとぴったり重なったことで、場のビートライダーズ全員から大喝采が上がった。

皆がステージを降り、中央に集まって歓声を上げ、手を叩き合い、喜び合う。

その中には咲のチーム、リトルスターマインのメンバーもいる。大人たちにもみくちゃんにされながらも、元気に飛び跳ねている。

(今度は、壊されなかった。あたし、守りきれた)

咲は荒い息をしながら変身を解いた。

同じく変身を解いた戒斗とザック。戒斗はザックに何かを告げて広場を去って行った。何を言われたか聞きたかったが、チームメイト同士のことにはそれは無粋だ。

「おつかれさま」

「あ、ああ……終わった、のか」

「うんっ。すっごくリーダーらしくてカッコよかった」

ザックはドライバーを外し、それを見下ろした。まだ自分がやったのだと実感できていないようだ。咲も初陣はそうだったからよく分かる心理だ。

「やったね」

「――、ああ」

咲の言葉で、ザックはようやく落ち着きを取り戻したようだった。

戦いは終わった。咲は、この喜びの熱狂にもう一人加わるべき人物を迎えに行くべく踵を返した。

「あたし、紘汰くん呼んでくるね」

「あ、おいっ」

「ザックくんはみんなとよろこんでていーのっ」

「は？　――おわ！」

ザックの後ろからペコをはじめとするチームバロンのメンバーが飛びついた。当然ザック一人では重みに耐えきれず芝生に倒れ、チームメイトにわちゃわちゃにされる。

咲はそれを軽く笑って、広場を出た。

ずっと日差しの下にいたので、陰に目が慣れない。咲は数回目を瞬いて、紘汰を探した。いない。

広場を出てすぐの場所にいないことに、咲は疑問を持たなかった。ここにいないなら別の場所だ、としか考えなかった。

――そして、咲は完全に忘れていた。今いる場所が、ユグドラシ

ル・タワーの前——敵地の目と鼻の先なのだ。

咲は広場から少し離れたビルの前の階段を上がった。視界を掠めるオレンジ色。

「絃汰く——！」

どしやつ

「……、え？」

咲はその光景を見て、笑顔のまま凍りついた。

地面に倒れ伏す鎧武。鎧武を見下ろすのは、レモンの鎧をまとった、青いアーマードライダー。

『ああ。キミは確か——室井咲君だったね。キミも変身してみてくれないかな？』

人は己一人の命すら思うがままにならない。

誰もが逃げられず、逆らえず、運命という名の荒波に押し流されていく。

だが、もしもその運命が、君にこう命じたとしたら。

世界を変えろと。未来をその手で選べと。

君は運命に抗えない。だが——世界は、君に託される。

【少年少女の戦極時代 第一部 | 完 |】

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~6629

少年少女の戦極時代

2014年02月22日 21時30分発行